背

特 276
386

特276
386

文學士内海弘藏著

文記評釋

東京 明治書院

大正
5. 7. 3
内交

緒言

一、本書は、一般方丈記の讀者に向つて、この書の趣を開きすゝめようとして、著作したのである。

一、方丈記の本文は、さう大した異本もなく、おのづから一定されたやうになつてゐるが、それでもやはり、在來の刊行本には、ところどころ、ちよつとした相違があり、誤もあるやうである。で、本書はまづこの上の整頓を、ちやんとしたつもりである。

一、本書の體裁は、さきに出版した、拙著『徒然草評釋』の體裁にならうたものであるが、やゝ深く研究しようといふ讀者の便をはかつて、別に『註釋』の欄を設けたのである。すなはちちよつとした意味は、上、欄の語句の解釋で足りるが、少しくはしい解釋を要とされる場合

には、下の註釋を見てもらひたいのである。『文評』はそのどちらの場合にも通じて、見てもらはなければならぬ。

一、卷末に附した索引は、書中の主要の用語、事實、出典などについて、その解釋の出所をもとめるの便に供したものである。

一、方丈記には、目次が立てられないのである。從つて諸本ともに、これを缺いてゐるが、讀者の便をおもうて、少し無理なつくり方ではあるが、本書には目次を附したのである。

一、序說はやゝ長きに失したかもしれぬが、本書の成立及び價値を明にしようと思うたものであるから、一通り讀んでもらひたいのである。

序說

方丈記は、わが古文學の隨筆ものゝ中で、枕草紙につぎ、徒然草と肩をならべると推稱されて、廣く世に愛讀される、一傑作である。その內容は、徒然草の多方面的にして、深遠幽微なのに比して、大分見おとりがするが、しかしその文章は、流麗にして明確をかね、いかにも整然としてゐて、たしかにその獨特の妙を具へてゐる。ことにそれが、あのいはゆる和漢調和體の先驅をなしてゐるといふ上において、最も珍重すべきものである。

自分は今この書の評釋を、こゝに世に公にするに當り、聊か自分の觀るところ、考へるところを述べて、一般讀者の參考に資せようと思ふ。

一　方丈記の異本及び註釋書

方丈記の廣本と略本と流布本諸本の異同

方丈記には、廣本と略本との二本がある。廣本は、今一般に行はれてゐるところの流布本である。略本は延德二年宗祇の手書したのを寫したものだというて、いたく流布本と異つてゐる。まづ大火、大風、地震などの天變地異の記事がないし、それに順序も前後轉倒してゐる。文章もまた、流布本にくらべて、著しくまづい。この二本の中、そのいづれが原本であらうかといふ事は、わからないのである。但し略本は、今日全く世に行はれてゐない。

流布本の廣本の方についても、本によつて、多少ともその字句の異つてゐるものがある。しかしそれは、他の古文學書の異本の間に見るやうな、大きな相違ではなくて、ほんの一二の字句の相違、いうて見れば、音訓のよみ方の相違、副詞、助詞などの相違、字句の有無の相違といふ位なものに過ぎないのである。そしてそれらは、いづれも傳寫の間に、ちよつとして寫し違へて、それでおのづから生じたらうと思はれる程度の相違なのである。從つてこの書の諸本には、その多少の相違はあつても、他の古文學書のやうに、何々本といふやうな、異本の名稱は立てられてゐないのである。

この書の古註釋書の一である、『方丈記流水抄』には、本文のわきに、一々小書にして、その異本の殆どすべてを擧げてゐるから、ついてその一般を窺ふことができる。

古註書のよみくせ

さてかういふ次第であるから、この書について、その異同を正すといふには、一に文章の趣の上と、この作者の慣用例とによる外はないのである。今日一般に刊行されるところの方丈記は、いづれもみな、大抵『流水抄』の本文に從つてゐるのだが、自分は趣の上からと、作者の慣用例からと考へて、多少の斟酌をその上に加へたのである。なほ用語のよみ方については、古註書一般のくせとして、とかく古語風に讀みなしてしまふといふ弊があるから、その點も注意しておいた。この書を新文體の魁をなしたものと觀るならば、必ずそこに、多少音讀的の用語法をしてゐるに違ひないと、推想することができるからである。

方丈記の古註釋書
方丈記抄
方丈記流水抄

方丈記の古註釋書の中で、その完備してゐるのは、加藤盤齋著の『方丈記泗說』の二つである。(盤齋は『方丈記流水抄』と、槇島昭武著の『方丈記抄』と、流布の泗說とは異る寫本を、『國文註釋全書』で刊行著者といはれてゐるが、流布の泗說とは異る寫本を、『國文註釋全書』で刊行して、『方丈記抄』としたので、それに從つたのである)『流水抄』は、『抄』などの後に出て、出典や語釋は大分詳しくといてゐるので、この書註釋書の最も完備したものといはれてゐる。しかし古註釋書の通弊として、當りもせぬ、用もない出典をむやみに引き、また無理に佛教思想に引きつけてとき、しかも字句の肝要の解釋を逸してゐるといふやうな憾をのこしてゐる。『抄』の方の解釋は、出典や語釋の解き方は、遙に『流水抄』に及ばないが、しかし文脈の推移、段落の接續、關係については、まゝ妥當なとき方をしてゐて、全篇の結構をとく上からは、『流水抄』よりもよほど進んでゐる。とにかくこの書の古註解書の中では、以上の二書がまづたよりになるものといふべきのであらう。

鴨長明の傳
十訓抄所載

明治以後、この書の新しい註釋書が、數種出版されてゐるが、いづれも古註釋書以上に出てゐるものはないやうである。

二　方丈記の作者

方丈記は、古來、鴨長明の著作と稱せられてゐる。尤もそれには、世に異論があるのであるが、そのことは、別にあとにいふことにする。

鴨長明は、その名の著しく聞えてゐる人であるが、その傳記は詳でないのである。近衞天皇の御代の久壽元年に生れて、順德天皇の御代の建保四年六月八日に、六十四歳で死んだといはれるが、はつきりとはわからぬ。十訓抄の第八『可レ停二懇望一事』の七に出てゐるところによると、鴨の社の氏人で、俗名を菊太夫といひ、和歌管絃にすぐれてゐたが、社司を望んでかなはなかつたので、世を恨んで出家し、大原にすまひして、方丈記を書いたとある。またその後、後鳥羽上皇が、もとの如く、和歌所の寄人にと召されたが、

沈みにき今更わかの浦波に、
　寄せばやよらむあまの捨て舟。

と申して、終に籠居を出でなかつたといふことが書いてある。そこに『もとの如く』と書いてあるのは、以前、宮中に仕へて和歌所の寄人であつたといふのである。新古今集に長明の歌がかなり多く載つてゐるが、雜部に、『和歌所の歌合に、深山曉月といふことを』といふはしがきのある歌があるから、嘗て和歌所に仕へてゐたといふことは、たしかである。

また作者部類には、鴨の祐宣長繼の男で、應保元年十月十七日に叙爵（中宮の叙爵とある。本文八五頁の註釋の條參照）されたとある。

また東鑑の巻十九には、建暦元年十月十三日に、鴨の社の氏人菊太夫長明入道（法名蓮胤）が下向して、將軍實朝に度々謁したといふことが載せてあつて、その日は故頼朝の忌日に當るので、法華堂に參つて、念誦讀經し、懐舊の涙を催して、

作者部類所載

東鑑所載

草も木もなびきし秋の霜消えて、
　むなしき苔をはらふ山かぜ。

といふ歌を、堂の柱にしるしつけたといふことが書いてある。

以上が、長明の事歴について、はつきりしてゐるところである。その他のいろいろといはれてゐる事歴については、はつきりとはわからないのである。

で、以上の事歴や、本文に見えてゐるところによつて、これを綜合して見ると、幼時より父方の祖母に養はれ、その祖母がもと宮中に仕へてゐた縁から、長明も宮中にはひつて叙爵され、そして和歌に長じてゐたところから、後鳥羽上皇の寵任を受けて、和歌所に參じてゐたが、鴨の社司たらむことを望んでかなはず、それで世をはかなんで、遁世して、そのいはゆる方丈の庵に籠居して、世を終つたといふのであるらしい。その實朝との交情も、自然和歌の上からの事であらうと思はれる。

遁世の理由は、一體、當時の世態がそのあさましさの極にあつたことや、

長明遁世の理由

長明遁世の動機

また佛教の思想の深く人心にしみ入つてゐたといふ、時代思潮からの影響にもよらうが、しかしその動機は、たしかに鴨の社司を望んで、得ることができなかつたといふ不平失望からであつたらしい。新古今集の雜部に、長明の『身の望かなひ侍らで、社のまじらひもせで、こもりゐて侍りけるに、葵を見てよめる』といふはしがきのついた、

見れはまづいとゞ涙ぞもろかづら、
いかにちぎりてかけ離れけむ。

といふ歌の載つてるのを見ると、その消息がわかると思ふのである。

方丈記の書名

方丈記といふ書名は、前にいうた十訓抄のそこに、

『方丈記とて、かなにて書きおきけるものを見れば、はじめのことばに、「行く河の流は絶えずして、しかももとの水にあらず」とあるこそ、云云』

と書いてあるから、もとから定つてゐた名に違ひない。十訓抄は建長四年の作であるから、方丈記の作を去ること、僅に四十年に過ぎないのである。し

長明の著書

てそれは、本文の『その家のありさま、世の常ならず。廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり』とあるのから出たものであるのは、いふまでもない。

長明には、なほ四季物語、無名抄、瑩玉集等の著作がある。

三　方丈記の作者についての異論

藤岡博士の説

ところがこゝに、方丈記が長明の作ではあるまいといふ、異論があるのである。

それは、方丈記の文章が、著しく平家物語や源平盛衰記の文章に似たところがあるので、多分、後人が諸書の一部を抜き集めて、補綴して、この一書をなしたものであらうといふのである。

この説を立てる學者の中について、故藤岡博士は、その遺著『鎌倉室町時代文學史』の中に、はつきりとそれを主張してをられる。して博士のいはれるところは、大要左の如くである。

一、方丈記の大火、大風、福原遷都、飢渇、大地震の叙事が、いづれも平家物語、もしくは源平盛衰記の叙事に酷似してゐること。

二、方丈記の日野山の庵室のさまが、平家、盛衰記の大原山の女院の御庵室のさま、ことに盛衰記の文に酷似してゐること。

三、玉葉集の『山鳥のほろほろと鳴く聲聞けば、父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ』の歌、山家集の『山深みなるゝかせぎのけぢかきに、世に遠ざかるほどぞしらるゝ』の歌を引いてる所のあること。

四、卷末の『月影は入る山のはも』の歌は、長明の歌ではなくて、新敕選集に出てゐる、源季廣の歌であること。

以上の理由によつて、博士は、

『余は、この書はおそらくは、後人が諸書の一部を飾恒補綴して作りなせる僞書にして、長明の作にはあらざるべしと信ず。』

と、かういうてをられるのである。尤もこれは、流布本の廣本についていふので、略本の方は、さう斷言することはできぬと、ことわつてをられる。

この説は、一應尤のやうに聞えるが、自分はこれに同ずることができないのである。で、左に、藤岡博士の數へられた理由に對して、少しく自分の見るところを述べて見よう。

まづ第一の、大火、大風、遷都、飢渇、大地震の文章が、方丈記と平家、盛衰記と著しく似てゐる、あるところは全く同じであるといふのは事實である。自分もこの評釋書に、その著しい所は、一々對照しておいたほどである。しかし、かう酷似してゐるとして、さてどちらがもとであらうか、方丈記が平家や盛衰記から拔いたのか、平家や盛衰記が方丈記から拔いたのかは、別に判斷を要する次第である。どちらか一方がもとであらうといふことは、誰でもうなづき得るが、そのいづれがもとであらうかといふことは、別に研究を要するわけである。

このことについては、先年、國語調査會が、その委員會で編纂された、『平

方丈記と平家、盛衰記との類似

國語調査會の『平家物語考』の判定

家物語考』の『平家物語の成立及び變遷』の章に、平家と方丈記との、その酷似してゐる所を、すつかり表示して對照して、そして、

『方丈記と平家物語との關係は、方丈記が平家物語を剽竊して作れるものにあらずして、むしろ平家物語が、方丈記の文を收容したるものなるべきことを、判定し得るに至るべきなり。』

といふ結論をしてをられる。なほ同書のそこに、前にいうた、十訓抄の文を引いて、十訓抄をもし僞書だとするなら論はないが、もし十訓抄を正しいものとすれば、當時の方丈記と今の方丈記とは、ほゞ同じものであるべきのは、疑ふことができぬというて、方丈記の僞書でないといふことを斷じてをられる。

こゝには同書の研究の本文を引く餘裕を許されないから略すが、自分は全く同書の說に贊成するものである。

第二に、藤岡博士のいうてをられる、方丈記の日野山の閑居のさまが、平家、盛衰記、殊に盛衰記の女院の御庵室のさまに似てゐるといふのは、これはことがらそのものからして、自分にはがてんのいかぬのである。自分は注意して、盛衰記の卷四十八の『女院の吉田御住居同じく御出家の事』以下の、女院の御庵室のところの文章をしらべて見たが、遂にその似よりの字句を見出すことができなかつたのである。たゞそこの『法皇大原入御の事』の條の、女院の御庵室の光景を叙してあるところに、

『僅に方丈なる御庵室を、……往生要集を置かれたり。北の壁には、琵琶各々一張立てられたり。……』

『……御寢所と覺えて、蕨のおどろを折りしきて、……』

とあるのが、その調度のやゝ似てゐるといふだけで、これとても、文章は違つてゐるのである。

なるほど、所も大原山、住居も方丈の庵室、調度もやゝ似てゐると、いへばいへようが、これを以て、二書の酷似となすのは、何人も躊躇せざるを得

ないところであらう。

一體、この大原山の閑居の文章が、方丈記の文章の山である。で、かりに前の天變地異の叙事が、他書から抜き集めてきたといふ證明がついても（それも前いふ通りの次第だが）、この所の抜き書きのもとがあらはされない以上、方丈記は後人が諸書から抜き書きしたものであるといふことはいへぬわけである。それを博士のこの點についての論據が、かう無理であるとすると、博士のその結論は、當然否定されなければなるまいではないか。

おもふにこれは、博士が前の第一の理由で、方丈記を僞書と思ひこんでしまはれたため、つい知らず識らず、さういふ思ひちがへをされたのであらうと思ふ。

自分は第一の、平家や盛衰記が方丈記から抜いたものであるといふ判定からして、これはむしろ平家や盛衰記が、方丈記の庵室の叙事を、女院の御庵室の叙事の上に脫化してきたと見るべきものであらうと思ふ。但し、平家も

盛衰記も、そこではたゞ單に脫化してきたといふだけで、その文章をそのまに襲踏してゐるのではない。いづれも別にその獨特の文章の妙を示してゐるのである。

第三の玉葉集、山家集の歌を引いてるといふ理由は、てんで問題にならぬ。古歌を引用し、古歌のことばによつて、文章の趣をとゝのへるといふ修辭は、古文學に最も普通なものである（尤もそれが、その書の作者より後の歌人のである場合は別だが）。これを以て、その一理由とすることは、勿論できない、おそらく博士も、これはまじめにいうてをられるのではあるまい。

第四の理由は、たしかに事實である。長明の歌でない歌が載つてるのは、全くをかしい。しかしこれは、後人がその歌だけを攙入したものに違ひないので、それでその疑はとけるわけである。評釋の本文の方にといておいたから、こゝにはくはしくはいはぬ。

以上の如き見解によつて、自方はこの書が僞書であるといふ説には從ふこ

とができないのである。

但し以上説明するところによつて、方丈記が僞書でないといふことはいへるが、それが長明の著作であるといふ證明はまだついてゐないのである。

われわれは今日、積極的にこれを立證することはできない。しかし前に引いた、この書の書かれた時から僅四十年後にできた十訓抄に、明にそれというてゐるのをはじめとして、古來さう定めいうてある以上、これを否定する證據が出てこなければ、消極的ではあるが、長明の著作であるといふことがいへるのである。

四　方丈記の結構

方丈記は、古來、隨筆ものゝ中に數へ入れられゐるが、他の隨筆もの、たとへば枕草紙、徒然草などとは、全くその體裁を異にしてゐる。一般の隨筆ものは、一段一段にきれて、いろいろさまざまな問題についての、作者の感想

を、得るがまゝに、斷片的に書きつけたものであるが、これは始から終まで、ちやんと續いてゐる一篇の文章である。してその述べてゐることは、作者の遁世觀とでもいふべきものである。試にその大體の結構をいうて見ると、ざつと次のやうである。

一、まづ第一に、世の中の無常なることを說き、世の中にある人と、その住家との、競うて無常につくさまを述べ、

一、次に、その實例として、作者が四十年ばかりの間に親しく遭遇した、安元三年の大火、治承四年の旋風、同年の遷都、養和の飢渴、元暦二年の大地震の慘狀を述し、

一、次に世態人情のあさましくて、世の中の住みうきことを述べ、作者自身の世にはぐれたさまを、おほろげに叙し、

一、遂に世を遁れて、日野山の外山の方丈の庵に籠居したことを叙し、その閑居の感興をといて、一篇を結んでゐる。

方丈記の主題

長明の遁世觀

かういふ風に、始めから終まで、ちやんと順序の立つた、脈絡の通つた、一篇の文章であるのだ。

もとより作者のいはうとした主題は、日野山の閑居のその感興の上で、前の數段は、その主題に到達すべき爲の序説であるのである。して作者は、これは人の爲にいふのではなくて、たゞ自分の身の上に取つて、昔と今とを比較して、今の閑居の心やすさに興をやるばかりであると、ことわつてゐる。すなはち文章の調子はどこまでも叙情文的になつてゐて、人を勸誘しようといふ評論文的にはなつてゐないのである。しかし、さういう作者の心の底には、これを以て、世人がはかない無常の世の中に、功利に營々として蠢動してゐるのを咎めて、われみづから味ひ得た、閑居のその心やすさに、これを誘ひ入れようといふ考が、たしかに流れてゐたのである。その然る所以のあとは、十分にこれを、その文章の調子の上に窺ふことができるのだ。さうして見れば、これを指して、作者長明の遁世觀といつても、あまり不當ではあ

方丈記にあらはれてる作者の感想

るまいと思ふ。

以上は、本書を縱に、その結構の脈絡の上から觀たものであるが、更にこれを横に、作者のこの書の上にあらはしてゐる感想の上から觀ると、われわれはこゝに、

一、作者の無常觀

一、作者の當時の世態人情に對しての感想

一、作者の日野山の閑居にしての感想

といふ三つの問題を抜き出すことができるのである。で、これについて、次に少しく自分の考を述べて見たいと思ふ。

五　方丈記の内容

方丈記は、いかにもその文意の明晰なものである。その秩序のあり、その條理のよく通つた構想と、その明確にして、透徹した表彰とは、相待つて、

方丈記の特長

作者の性格

そこにいかにも明晰なる文意をあらはし出してゐるのである。これがこの書の特長であつて、わが古文の中には、あとにもさきにも、その類例を見ざるところのものである。

この上からして想ふと、作者はたしかに、頭の極めてはつきりした人であつたらうと思ふ。してものごとにきちんとしてゐて、何でもちやんとした形の整頓を好み、氣にもした人であつたらうといふことは、この書の全體に通じて、隨所にこれを窺ふことができるのである。

しかしかういふ性格の人は、遁世といふ事には、えて適しないものである。あらゆるうるさい、世の中の形から離れて、そしてひたすらに内容の修養につかうといふのが、遁世の趣旨である。それを、とかく形が氣になる、形の整頓をおもふ念が強いとあつては、どうしても形から離れてしまふことが、できにくいものである。尤もはじめから形が氣にならず、形の整頓の念のない人なら、これはまた形から離れるも何もないのだ。形が氣になり、形の整

方丈記と徒然草と

兼好の無常觀

頓をおもふ心があつて、それでさらりと形から離れるといふ所に、遁世のそのゆゑしい趣が出るのであるが、しかしそれには、非常な煩悶、非常な苦心、修行がいるのである。作者にはこれが缺けてゐた。で、作者の遁世には、そこにそのゆゑしい趣がしのばれるといふわけにはいかなかつたのである。

さて第一に、作者の無常觀であるが、これをいはうとすると、自分はそこに、徒然草にあらはれてゐる兼好法師の、あの無常觀を思ひ寄せざるを得ないのである。

方丈記の主題の根調は無常觀である、徒然草のも同じく無常觀である。そして長明の遁世者であるのに對して、兼好もまた同じく遁世者である。この點において、二者の間には、著しい類似があるのである。しかしこれを比較して見ると、そこにはまた、逆にかなり大きな相違が分れてくる。

兼好が徒然草の無常觀は、勿論、佛教の無常觀に根ざしたものに違ひないが、しかしそのし上げられた所は、佛教のそれとは全く違つたものになつて

るる。兼好の無常觀には、佛教のそれのやうに、強い來世のあこがれはない。兼好は、この世は無常である、死は一刻一刻に、われわれの身後に迫つてゐる、それ故、われわれは何もうち棄てゝ、――くだらぬ世の中の形に身心を勞することをやめて、一刻も早く、自分の專門の道にいそがなければならぬと、かういふのである。自分はかりにこれを名づけて、兼好の趣味論といふ。（拙著『徒然草評釋』に詳說してある）

長明の無常觀

長明の無常觀は、兼好のに比して、よほど佛教思想に傾いてゐる（その佛教より來たものであるのは勿論だが）。その方丈の庵に、闍伽棚を作り、阿彌陀の畫像を安置し、普賢竝に不動の畫像をかけ、往生要集を側におくといふやうな用意は、一に來世の淨土を欣求する心からであらうと見られる。しかしそのどこまでもこの穢土を厭うて、ひたすらにあの淨土にあこがれるといふ熱情のおもかげは、思想の上にも、文章の調子の上にも、全篇を通じて、遂に見出すことができないのである。試にこの書の方丈の庵の段を、平家や

盛衰記の、あの建禮門院の寂光院の段にくらべて見たまへ。あすこには、ひたすらに淨土の往生を願ふといふ熱情のこもる、佛教の思想、佛教の信仰がありありと見えるが、こゝにはとんとそのおもかげが見えないではないか。かやうな次第で、長明の無常觀なるものは、佛教から來たものではあるが、しかし佛教のその深い意趣にはふれてゐないといふことがわかるのである。さりとて、兼好のやうな趣味論でもないのだ。すなはち、その無常觀は、極めて徹底してゐないもので、ほんのたゞ、世の中は無常であるといふ事實をいうてゐるに過ぎないのである。

一體、長明は佛教の方には、さう造詣の深くなかつた人であつたに違ひない。座右の書として、往生要集の抄本を擧げてゐるのは、たまたま以て、その一端を窺ふことができる。世の評家が、長明を佛教に精通し、老莊の學にくはしかつたというてゐるのは、たしかにまちがひである。長明はさういふ思索や信仰のがはの人ではなかつた。彼のもつてゐた佛教の智識、信仰は、た

だ單に、その當時一般の人々の心にはひつてゐた程度のものに過ぎなかつたであらうと、自分は思ふのである。

この點において、――いひかへれば、思想の深遠豐富といふ點においては、長明は到底、兼好の敵ではなかつた。これがこの書をして、その文意の透徹してゐて、なるほどと、われわれをうなづかしめ得るにもかゝはらず、そのまゝそこに、われわれをその趣の中に引き入れてしまふ力を、缺いてゐる所以のものである。

たゞ長明は、事實の上から、痛切に世の無常を感じたのである。この無常のはかない世の中から離れて、ひとへに後世の安樂を願はうといふ、強いあこがれの心に誘れてではないが、とにかくかういふ世の中にゐるのは危險である、早くこゝから逃げなければならぬといふことを、痛切に感じたのだ。どうするが爲に遁れるではなくて、何はともあれ遁れなければならぬと、かう感じたのである。これが長明の遁世の理由である。これには、われわれ

欠

長明遁世の眞原因

無常であり、世の中のたのみがたく、交りにくいことを痛切に感じたであらうかは、推測するに難くないのである。

そこへちやうど鴨の社司を望んで得られないといふ事がらが起つたのである。もう堪へられない、それを動機に、そのまゝ世を遁れてしまつたのである。

長明の遁世は、かういふ次第で、ゆゝしい信念からでもなく、またその遁世の朝夕は、西行のやうな優々自適の趣でもなかつた。遁世しても、まだ形が氣になる、方丈の庵の部屋の裝置にまで心を勞してゐる、時にはよまひごとめくことまでもいうてゐる。がしかし、これをさして、その鴨の壯司を望んで得られなかつた爲の、單純な不平からの遁世と評し去るのは、甚だその當を得ない。坪内博士のいはれた通り、わが國史の中で、あとにもさきにもないといふ、おそろしい、あさましい暗黑時代の世態人情、これが長明をして、はやくこの世をはなれて、一身の安きに著かうとせしめた、その重な原

欠

因であることを忘れてはならぬ。

長明が、遁世の叙事の前の段に、

『世にしたがへば身くるし。また從はねば狂へるに似たり。いつれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしもこの身をやどし、玉ゆらも心をなぐさむべき。』

というてゐるのは、まさにこの般の消息を、われらに語るところのものである。

この當時の世態人情に對しての作者の感想、これがこの書について觀るべき第二の問題である。

最後に第三は、作者の日野の閑居にしての感想である。

これはいふまでもなく、本書の主題であつて、文章もまた最もふるうてゐるのであるが、しかしわれわれは、作者のそこに叙してゐる方丈の庵の光景、そのあたりの自然の風物のながめ、併せてその述べてゐる作者の感興、作者

作者が日野山閑居の感想

事實の權威

の主張の上に、ちよいちよいとした興味を引かれはするが、それがどうしても連續した、ゆゝしい興味、ゆゝしいあこがれの心とはならないで、遂にその舞臺の中に、たゞそのまゝに引き入れられてしまふといふまでにはいかないのである。

これはいふまでもなく、作者の感想が充實してゐないからである。作者の遁世が消極的のもので、積極的のものでないからである。で、ともすると、つい談理になり、說明になり、はてはよまひごとに落ちるのは、まことにやむを得ない當然の結果で、それが析角催されかけた、われわれ讀者の感興を中斷してしまふのである。

たゞこゝに注意すべきことがある。これは長明の遁世が事實であるといふことである。世の中に、『事實である』といふくらゐゆゝしいものはあるまい。たとひ、その事が、いかにはかないことであり、つまらないことであるにしてが、われわれはその事實であると事がらの前には、いつでも何等かのある

一種の權威を認めないわけにはいかないのである。

長明の遁世は、その動機がどうであるにしても、そのさまがどうであるにしても、たしかなる事實である。長明はこゝに遁世のその空理を說いてゐるのではなくて、自分の晩年を、みづからその草庵の閑居にうちまかせた事實を話してゐるのだ。われわれがこの書について、かれこれ批評はするものゝ、そこにたしかに、ある一種の權威に打たれる感をとどめることのできないのは、全くこれが爲である。してこれは、兼好の徒然草にはないところのものである。

既に事實である。從つてその實行者は、その實行の上において、たとひゆゆしい遁世の心をいだいてゐないにしてが、その折々の瞬間には、必ず深い心の催しに觸れたに違ひない。その瞬間の深い心の催し、眞心のひらめき、それが明に、この書中に散見してゐるのである。自分は特にこれを、この書の上に珍重するのである。但しそれは、本文の評釋に、その場所場所に細說したから、こゝには略することにする。

自分の方丈記の內容について、觀るところ、思ふところは、ざつと以上の如くである。

六　方丈記の文章

前に述べたやうに、方丈記の內容は、これを徒然草などに比すると、よほど下るものである。しかし、その文章は、いかにも華麗にして、しかも明確をかね、まこと整然とした、いゝ文章である。おもふに方丈記の價値は、その文章の上において、特にこれを認めるべきものであらう。

それに、この書は、かの平家物語以下の軍記物によつて大成された、あの和漢調和體のはじめを開いたものであつて、まさに新文體の先鞭をつけたものといふ名譽を擔ふべきものである。從つて前にいうた通り、平家や盛衰記などもの、大分この書の文章を學んでゐるし、あの、時代の文章の外に立つて、

獨特の文章を書いた徒然草でさへも、この書の文章を學んだあとが、數段見えてゐるのである。第二百十一段などは、現にその著しい例である。既にこれ一つだけでも、この書の價値は十分に認められようではないか。

方丈記の句法

方丈記の文章は、極めて簡明である。その短い句で、いつも結果をさきに出して、原因を後にし、事がらをさきにいうて、說明を後につぐといふ、きまつた句法で、どこまでいつても同じことである。かういふ風に、同一句法で、しかも簡明な句法で、終始するといふやり方は、きつと單調平板の弊に陷るのが常である。ところが、この方丈記に限つて、それがさうでない。單調平板の弊は絕えてなくて、いつも一種淸新の趣が出てくる。そこに作者の用意と特長とがあるのである。すなはち作者は、いつも長短句のとりあはせと、聲調の整頓とに心を用ゐる、また巧に感歎詞的、副詞的の趣をもつ接續詞を用ゐなしては、その趣を保たせてゐるのである。それがこの作者の文章の長所である。

方丈記の文章の特長

一體、この作者は、用語、ことにわが純國語の用語の力は、さうすぐれてはゐなかつた。特に國語の神髓ともいふべき助詞の用法が確適でなかつた。それ故、なみの例でいへば、どうしても章句の斷續がだらしなくなたり、くだらぬ接續詞が(助詞が確適でない爲に)續出すべきわけなのである。ところが、この文章に限つてさうでないのだ。といふのは、そこに作者の修辭の力が、著しくはたらいてゐるからである。ことに聲調の整頓といふことに、作者はそのすぐれた筆の力をもつてゐたのである。この點においては、まさにあの太平記の文章と、同工異曲のものであるといへる。

方丈記の修辭の力

修辭に富む文章は、ともすると、その明晰を缺き、文意の透徹をそがれるものである。それがこの作者の文章は、修辭の巧を具へてゐて、しかも明確にして透徹したものであるのだ。これはまた平家物語の文章と、その巧を同じうするというてよからう。但し平家のはそれが無造作に出てゐる、この書のは、それがありありとした用意のあとをとどめてゐるといふ相違があるのだ。

何ごとにもきちんとして、形の整頓を氣にしたといふ、作者の性格は、そ

の文章の上にも、よくあらはれてゐる。その整然として一絲亂れずといふところが、すなはちこの書の文章の特長である。しかしこれと同時にまた、聊かその餘情を缺いてゐる憾をのこしてゐる。

大町桂月君は、この書の文章がすきで、長明といふ男はきらひだが（いかにも桂月君にはすかれさうにない）、文章はひどくすきだというてゐられる。さう思ふと、桂月君の文章と、この書の文章との間には、どこか似かよふところがあるやうである。

なほ文章の上については、いひたいこともあるが、本文の評釋の中に細說したから、こゝには略する。

以上は、この書を讀まれる讀者諸君の參考にまで、聊か自分の思ひついた注意點の二三を、述べたまでのことである。敢て方丈記の研究を云々しようとしたのではない。

目次

ゆく川の流は……一―一二
行く川の流は絶えずして……一
玉敷の都の中に棟をならべ……四
知らず生れ死ぬる人……八
世の不思議を見ること……一二―七二
およそものゝ心を知れりしよりこのかた……一二
安元三年の大火……一四―二二
去にし安元三年四月二十八日かとよ……一四
吹き迷ふ風にとかく移りゆくほどに……一七
或は煙にむせびて仆れ伏し……一九
人のいとなみ皆おろかなる中に……二一

治承四年の辻風……二二—二五
また治承四年卯月二十九日の頃……二二
家の損亡せるのみならず……二五
治承四年の都うつり……二六—四三
また同じ年の六月の頃……二六
されどとかくいふかひなくて……二八
軒を爭ひし人のすまひ……三〇
その時おのづから事の便ありて……三三
日々にこぼちて川もせきあへず……三五
これは世の亂るゝ瑞相かと……三八
ほのかに傳へ聞くに……四〇
養和の飢渴……四三—六一
また養和の頃かとよ……四三
これによりて國々の民……四五

京のならひ……四六
さきの年かくの如くからくして暮れぬ……四九
かくわびしれたるものども……五一
しづ山がつも力つきて……五二
またあはれなること侍りき……五五
仁和寺に慈尊院の大藏卿隆曉法印といふ人……五八
況やその前後に死ぬるもの多く……六〇。
元暦二年の大地震……六一—七一
また元暦二年の頃……六一
況や都のほとりには……六三
その中にある武士のひとり子の……六六
かくおびたゞしくふることは……六八
むかし齊衡の頃かとよ大地震ふりて……六九
すべて世のありにくきこと……七二—八四

すべて世のありにくきこと……七二
もしおのづから身數ならずして……七四
もし貧しくして富める家の隣に居るものは……七七
もし狹き地に居れば……七九
勢あるものは貪欲深く……八一
わが身父方の祖母の家を傳へて……八五—九四
わが身父方の祖母の家を傳へて……八五
これをありし住居になずらふるに……八七
すべてあらぬ世を念じ過しつゝ……九〇
六十の露消えがたに及びて……九四—一〇一
こゝに六十の露消えがたに及びて……九四
とかくいふほどに……九七
いま日野山の奥にあとをかくして後……一〇二—一四八

いま日野山の奥に……一〇二
傍に箏琵琶おのおの一張を立つ……一〇七
その所のさまをいはゞ……一一〇
春は藤波を見る……一一五
もし念佛ものうく讀經まめならざる時は……一二〇
もしあとの白波に身を寄する朝には……一二二
また麓に一つの柴の庵あり……一二八
あるはつばなを抜き岩梨をとる……一三〇
あゆみ煩なく志遠く至る時は……一三四
もし夜靜なれば……一三八
おほかたこの所に住みそめし時は……一四三
ほどぜばしといへども夜臥す床あり……一四六
すべて世の人の住家を作るならひ……一四八—一六六
すべて世の人の住家を作るならひ……一四八

それ人の友たるものは……一五〇
もしなすべきことあれば……一五三
今一身を分ちて二つの用をなす……一五五
衣食のたぐひまた同じ……一五七
おほかた世を遁れ身を捨てしより……一五九
それ三界はたゞ心一つなり……一六二
もし人このいへる事を疑はゞ……一六五
餘算山のはに近し……一六六―一七三
そもそも一期の月影傾きて……一六六
しづかなる曉……一六八

目次終

欠

の趣、ものごとの意味の意。◎春秋　春と秋とを以て、一年を意味する用例。◎不思議　思議すべからずを棒讀にした不可思議の略。思ひはかるべからざることの意。こゝは天變地異を指したのである。◎やゝ　だんだんに、やうやくの意。

春秋（はるあき）を送れる間に、世の不思議（ふしぎ）を見ることゝ、やゝたびたびになりぬ。

注釋【もの〻心を知る】は、九條殿の遺誡に、『凡成長頗知二物情一之時』とあり、源氏物語の乙女卷に、『學問などして、少しもの〻心を得侍らば』とありなどして、世の中の事の趣、意味がわかるといふ意にいふ例である。で、この書が、作者長明の七十歳位の時に書かれたものとすると、その間に四十幾年の年月を送つたといふのであるから、まづ二十歳頃の時をさしてゐるのである。【春秋】は、楚辭に、『日月忽其不レ淹兮、春與（トモ）秋代序』とあり、又、魯國の年譜を春秋と號するなどのやうに、漢文で、それを以て一年を意味する例から、そのまゝわが國語の上でも、一年の意に用ゐられることばである。【やゝ】といふのは、見ること、世の不思議なるが、だんだんと重つて、その數が多くなつたといふのである。

文評これは、世の無常の實證であるところの、作者の見聞した、その天變地異の話にはじる冒頭である。別にこれと指していふべきほどの所もないが、前節に朝顏

欠

◎安元三年　高倉天皇の御代の年號。◎戌の時　昔の五つ時、今の午後八時。◎たつみ　東南のすみ。◎いぬゐ　西北のすみ。◎はては　しまひには、つひには の意。◎朱雀門　御所の南面の門。◎大極殿　宮中の正殿。◎大學寮　學生を養成する所で、朱雀門外、神泉苑の西隣にあつた。◎民部省　諸國の戸口、田畠、山川、道路、租税等を掌る役所で、美福門内の西方、太政官の南にあつた。◎樋口富の小路　樋口は五條の下の小路、富小路は壬生の東にある。

の露の比喩を出して、『消えずといへども、夕を待つことなし』と結んだ後を受けて、さてこゝに、文章を轉じようといふに當つて、その轉じめをきはたゞすに、——仰山な轉じ方をしないで、極めて輕く、無造作に、『およそものゝ心を知りしより』と、叙し入つてしまつた所が、さすがに巧である。後世の文章が、かういふ所で、とかくきはだつた、仰山な轉じ方をするのに對して、かういふ風に、ごく輕く轉じ入るといふのが、この書に限らず、概して古文に通じての長所であつた。

去にし安元三年四月二十八日かとよ、風はげしく吹きて靜ならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來て、いぬゐに至る。はては朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、一夜がほどに塵灰となりにき。火もとは樋口富の小路とかや。病人をやどせる假屋より出で來けるとぃ

なむ。

【註釋】【塵灰】といふのは、このあとの所には、『七珍萬寶、さながら灰燼となりにき』とあり、また平家物語のこの火事を叙したとこにも、『朱雀門よりはじめて云々、一時がうちに、みな灰燼の地とぞなりにける云々、七珍萬寶、さながら塵灰となりぬ』と書いてゐる。で、灰燼と同じ意に用ゐたのであらう。して、古本には、これを、『ちりはひ』とよませてゐるのがある。【病人をやどせる假屋より】といふのが、こゝでは出火の原因になつてゐるが、源平盛衰記には、山門の御輿振の時、十禪師の神輿に矢を射立てた、重盛の侍の成田兵衞爲成といふものが、その科によつて伊賀國へ流されることとなつて、その夜、富小路に止宿して、同僚等と別の酒宴を開いたが、その席で爲成は自殺してしまひ、それでその家主の男が、後の咎をおそれて、その家に火をかけて燒いたのから、火事が起つたと書いてある。但し平家物語の方には、何にもその火本の事は書いてない。假屋といふのは、當時、施藥院、悲田院などで、孤兒や病人を給養する所があつたから、これもそれであらうといふ。

文評 この火事のことは、平家物語には、巻一、『内裏炎上の事』の條に、源平盛衰記には、巻四、『京中焼失の事』の條に、共に出てゐる。盛衰記の方は、さうでもないが、平家の方は大分似た書きぶりである。参考の爲に、左に平家の文を抄出して置かう。

同じき二十八日の夜の戌の刻ばかり、樋口富小路より火出で來つて、京中多く焼けにけり。折ふしたつみの風はげしく吹きければ、大きなる車輪の如き炎が三町五町を隔てゝ、いゐゐの方へすぢ違ひに飛び越え飛び越え焼けゆけば、恐しなどもおろかなり。或は具平親王の千種殿、或は北野の天神の紅梅殿、栖遑勢の蠅松殿、鬼殿、高松殿、鴨居殿、東三條冬嗣の大臣の閑院殿、昭宣公の堀川殿、これらをはじめて、昔今の名所三十餘個所、公卿の家だにも十六個所まで焼けにけり。その外、殿上人、諸大夫の家々はしるすに及ばず。はてはゝ内に吹さつけて、朱雀門よりはじめて、應天門、會昌門、大極殿、豐樂院、諸司八省、一時がうちに、みな灰燼の地とぞなりにける。家々の日記、代々の文書、七珍萬寶、さながら塵灰となりにき。その間のつひえいがばかりぞ。人の焼け死ぬること數百人、牛馬の類、數を知らず、

で、これはどちらか一方が原本で、一方は、それを書き直したものであらうが、どちらがさきかは、判斷することができない。くはしいことは序論にといたから略す。

吹き迷ふ風に、とかく移りゆくほどに、扇をひろげたるが如く、末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりは、ひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焔、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝうつり行く。その中の人、現心あらむや。

註釋 【とかく移りゆく】といふのは、何となくあちこちと、火のうつりついていくさまをあらはしたので、いひかへれば、無造作に、あちらこちらへ、それからそれ

◎吹き迷ふ　烈風の吹きみだれるさまである。◎とかく　あちこちといふほどの意。◎末廣　末の廣がつてゐることの意。（火さきの）◎ひたすら　一向に、いちづにの意。◎あまねく　どこもかも、一面にといふほどの意。◎うつゝごころ　うつゝの心、すなはち現實の心の意。

と、火のうつるさまである。【ひたすら】は、今口語にいふところの『たゞもう』といふやうな調子である。【あまねく】は、眞名本に『漫空』といふ字をあてゝる。空一面まつ赤になつてゐるさまである。【うつゝごころ】は、古本にはうつし心とよんでゐるのがある。『うつゝ』は、夢、まぼろしに對して、現實であることにいふことばである。で、生きてる心もちがしない、本心を失うてゐようといふやうな意にいうたのである。

文評 極めて平明な、無造作な叙事であるが、しかしいかにもよく、その大火のすさまじい趣を寫し出してゐる。いゝ文章である。

『吹き迷ふ風に、とかく移りゆくほどに』といひ、『ひたすら焔を地に吹きつけたり』といひ、『あまねく紅なる中に』といふやうに、まづ用語の正確にして適切なところが、眼に立つてうまく、そして、それに伴うて、『扇をひろげたるが如く』といひ、『焔を地に吹きつけたり』といひ、『空には灰を吹き立てたれば』といひ、『風に堪へず吹き切られたる焔』といふやうな叙し方が、いかにも巧に出てゐる。かういふおちついた、平明な用語、句法で、無造作に叙し去つて、しかもそこに、その叙事の生趣を保つといふところは、この作者の、特に得意な筆法であつた。それから、『遠き家は煙にむせび、近きあたりは、ひたすら焔を地に吹きつけたり』といふやうに、その光景を並叙するに當つて、わざと、その句法の對句になるのをきらつて、それで平板に陥るのを避けたところも、この作者のよくつとめたところの、一つの用意である。

かういふ點については、この作者の叙事法は、よく平家物語の作者の叙事法に似てゐるのである。但し似てゐるといふのは、その無造作にして、平明な叙事の中に、よくその生趣を保たさせるといふ上の用意であつて、その調子や、その叙し方は全く別のものである。かのいはゆる同工異曲なるものであるのだ。

或は煙にむせびて仆れ伏し、或は焔にまぐれて忽に死ぬ。あるは又纔に身ひとつ、からくして遁れたれども、を取り出づるに及ばず。七珍萬寶、さながら灰燼と、きゝその費いくばくぞ。

◎まぐれて　まぐるは、まぎるに同じい。煙にまきこまれ混じてしまふ意。◎からくして　やつと、からうじての意。◎資財　財物、たからもの。◎七珍萬寶

めづらしい、貴いたからものを、くるめていうたのである。◎さながら　そのまゝの意。◎公卿　攝政、關白、大臣を公といひ、大中納言、三位以上を卿といふ例。◎邊際　かぎり、際限の意。

このたび公卿の家、十六燒けたり。ましてその外は

らず。すべて都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死

の數千人、馬牛の類、邊際を知らず。

註釋【死にぬ】といふのは、死しぬとかいてゐる本もある。【七珍】は、一に七寶とふ。もと佛敎の語である。七つの珍重すべき寶。但しその七つの數へ方は、經文によつて多少異つてゐるが、まづ金、銀、水精、瑠璃、琥珀、碼碯、硨磲（增一阿含經の敎へ方）といふやうな類。【さながら】といふのは、その家の中にあつたまゝの意をいうたのである。

文評これは前段につゞいて、大火の損害を叙したので、これといふべきとこもないが、さすがに、その叙法には用意がしてある。

『或ば』と重ねていくところには、その句の長短を異にして、その平板に流れるのを避けてゐるし、――ことに『或は』の第二のとこに、『忽に』といふ副詞を挿んだところなど、なかなかこまかい筆づかひである、――『ましてその外は數を知らず』といふ句に對しては、『馬牛の類、邊際を知らず』と、ことばを調子もかへてゐる。そして、『ましてその外は』、『すべて都の中』といふところの、『まして』と『すべて』のつかひわけが、ことに眼に立つて巧にあらはされてゐる。

それから、こゝは（ここばかりに限らぬが）、すべて現在で、あの修辭にいはゆる直現法で書いてある。それがまた、その叙事を、いかにも直截に、活潑に、讀者の前にひらき出してゐるのである。

◎いとなみ　とゝのへること、なすことの意。◎おろかなる中に　すべてみな、つまらぬ中でもの意。◎さしも　さまでに、それほどにと、つよめていふ意。◎あぢきなく　無益に、つまらなくの意。

人のいとなみ皆おろかなる中に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し、心をなやますことは、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

註釋【さしも危き】といふのは、前の實例にさしつけて、その極めて危險（火事などの）の多いのをいうたのである。【心をなやます】といふのは、その家を作るについて、いろいろと工夫をこらして、心を勞するのをいうたのである。

文評これは、前段の安元三年の大火の實例をもとゝして、その總評に、かういふ無

◎治承　高倉天皇の御代の年號。◎卯月　陰暦四月の稱。◎中の御門京極　中の御門は、一條通より下る六つめの横通、京極は、東のはしの竪通である。◎辻風　つむじかぜに同じい。旋風である。◎わたり　あたりに同じい。◎いかめしく　甚しくといふほどの意。◎さながら　そのまゝの意。◎數をつくして　ことごとくといふほどの意。◎檜皮ぶき　檜の小さい板を、密に重ねて、厚くして、屋根をふいたもの。◎鳴りとよむ　なりとゞろく意。◎地獄　佛教にいふ、死者のゆく惡所、地下の獄の意。◎業風　下の註釋にとく。◎かくこそは　まさにかくの如くであらうとの意。

常の世に、一番無常の危險の多い、京中の家作りに金を費し、心を勞するのは、一番つまらないことであるとの意をいうたのである。

以上が、天變地異の、その第一例である。

また治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極のほどより、大きなる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹けること侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、その中に籠れる家ども、大きなるも、小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁柱ばかり殘れるもあり、また門の上を吹き放ちて、四五町がほどに置き、また垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり。況や家の内のたから、數をつくして空にあがり、檜皮ぶき、板の類、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹き立てたれば、すべて目も見えず。おびたゞしく鳴りとよむ音に、ものいふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりともぞ、かくこそはとぞおぼえける。

註釋【治承四年卯月二十九日】といふのが、平家物語には、治承三年五月十二日となつてゐる。【三四町をかけて】といふのは、風のいかにも猛烈で、三四町の間を、時に吹きまくるさまをいうたのである。【吹きまくる】は、一本には吹きまけ。【さながら平に】といふのは、家の建つたそのまゝで、ぴしやりとれたさまである（横へ仆れ傾かないで）。【四五町がほどに】は、一本にはかにとある。【すべて】といふのは、誰もといふ意にもとけるが、ちつといふ意にいうたのであらう。【地獄】は、佛教語で、奈利、もし、語の譯である。佛教所説の十界中の最劣境界で、現世に罪業んで行く所だとといてゐるのだ。【地獄の業風】は、一に

罪業の力が、もろもろの衆生を率ゐて、悪所に苦を受け、風に吹かれて飄へさせられるが如くあるといふので、佛教に、それをこゝは、おそろしい風の意に用ゐたのである。「かくこそ」であらう、これには過ぎまいと、つよめて（こそで）いうたのだ。但ばかりにとある。

文評 これは、天變地異の實例の第二である。叙事は、前の大火のにくらや見劣りがするが、しかしその輕い叙事で、ひと通りその趣を寫し出してころは、やはりうまいものである。『さながら平に倒れたるもあり、……』以一節、『塵を煙の如く吹き立てたれば、すべて目も見えず。おびたゞしく鳴りとよむ音に、ものいふ聲も聞えず』の一節のあたりは、ことに眼に立つ。ここでも、例の對句のとりあはせに、そのこまかい用意がしてある。これも、平家物語の巻三に、『颪風の事』とあるのと、大分よく似てゐる。ことに、平家に、

『……檜皮ぶき、板の類は、冬の木の葉の風に亂るゝが如し。おびたゞしう鳴りとよむ音は、かの地獄の業風なりとも、かばかりにとぞ覺ゆる。』

と叙してゐるところは、殆どまるで、こゝの叙事と同じである。

家の損亡せるのみならず、これを取りつくろふ間に、身を害ひて、かたはづけるもの數を知らず。この風、ひつじさるの方にうつりゆきて、多くの人のなげきをなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。たゞごとにあらず、さるべきものゝさとしかなとぞ、疑ひ侍りし。

註釋 【さるべきものゝさとしかなとぞ、疑ひ侍りし】といふのは、かなは、強くものをとりもちていふ、興感の助詞であるので、何かしかるべきものゝさとしに違ひない、さても何のさとし、何の事變の前表であらうかと、疑ひあやしみましたといふ意をあらはしてゐるのである。

文評 前の大火の條の終には、かゝる大火の災害の多い都の中で、家づくりに心を勞

◎そこなひて　そこなふは、損ずる、きづつく意。◎かたはづける　かたはになつた意。かたはは、からだにそろはぬところのあること、すなはち、不具なるにいふことば。◎ひつじさる　西南の隅。◎かゝる事やはある　やはは反語、かういふこと（こんなひどいこと）があらうや、ありはせぬの意。◎たゞごと　なみのこと、常のことの意。◎さるべきさあるべき、しかる

べきの意。◎ものゝさとし　事變の前兆といふやうな意。

◎同じ年　治承四年。◎みなづき　陰暦六月の稱。◎都遷り　清盛のはからひで、攝津の福原へ遷都されたのをさす。◎思ひの外　思はずであつたことの意。◎嵯峨天皇の御時　嵯峨天皇は、桓武天皇の御子。平安京は、桓武天皇の御代におつくりになつたのであるが、作者の思ひ違へたのでもあらうか。◎ことわりにも過ぎたり　ことわりは道理の意。尤もあるでと思はれる以上に過ぎて、憂へあうたとの意。

するのは、つまらぬことであるといふ評言を加へて結んでゐたが、こゝでは、何のさとしであらうかと疑うたと、辻風のその意味につけていうて、結んでゐるのだ。その同じ結末になるのを避けてゐるところに、ちやんと用意がしてある。あとの不思議の例も、すべてみな、その結末をかへて結んである。以て作意の用意のこまやかなのを窺ふべきものである。

また同じ年の六月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思ひの外なりしことなり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨天皇の御時、都と定りにけるより後、既に數百歳を經たり。これを世の人、たやすくあらたまるべくもあらねば、ことわりに過ぎたり。

註釋【おほかた】といふのは、くはしくといふの反對にいうたので、まあざつと、この京のはじめを聞いてみると、しらべてみるとといふ調子である。平安京の始は、桓武天皇の延暦三年十月三日に、奈良から山城の長岡へお遷りになり、同十三年十月に今の京都にお遷りになつたのがはじめである。それを作者が、かういうてゐるのは、どういふものであらう。平家物語の卷五の『都うつりの事』の條に、くはしく遷都の事を書いてゐる中に、

『一年、嵯峨の皇帝の御時、平城の先帝、尚侍のすゝめによつて、既にこの京を他國へ遷させむとせさせ給ひしかども、大臣、公卿、諸國の人民、そむき申しかば、遷されずしてやみにき。』

といふことを書いてゐる。作者は何かかういふことでも、思ひ違へたのであらうか。【數百歳を經たり】といふのは、平家には、『延暦十三年十一月二十一日、長岡の京より、この京へ遷されて、帝王は三十二代、星霜は三百八十餘歳の春秋を送り迎ふ』と書いてある。

文評　これから、不思議の例の第三にはひるのである。これは遷都のさわぎであつて、天變地異ではないが、その都うつりによつて、平安京の荒れてしまひ、人々の憂

はげみあへり

◎とかくいふかひなくて　都の人が、かれこれ、いろいろと遷都の不便をいうたかひもなくてといふのだ。◎世に仕ふるほどの人　官職のある人をいうたのである。◎故都　今は古都となつた、平安京をさす。◎思をかけ　望をいだく意。◎とく　早くの意。◎はげみあへり　互にいそぎあ

ひなげいたさまの、いかにもあさましかつたといふ所を取つていうたのである。平家物語には巻五に、『都うつりの事』、『都がへりの事』といふのがあり、源平盛衰記には巻十六の終に、『遷都、付、將軍塚、付、司天臺の事』、巻十七の始に、『福原の京の事』といふのがあつて、ことに平家のは、この書の文章と大分同じやうな所がある。それは、その當る所に引くことにしよう。

されど、とかくいふかひなくて、御門よりはじめ奉りて、大臣公卿、ことごとく移り給ひぬ。世に仕ふるほどの人、誰かひとり、故郷に殘り居らむ。官位に思をかけ、主君のかげをたのむほどの人は、一日なりともとくうつらむと、はげみあへり。時を失ひ、世にあまされて、期するところなきものは、愁へながらとまりゐたり。

註釋【御門】は、皇居の御門を以て、天皇を敬稱して申し上げることばである。【公卿】は、前の二〇頁にといておいた通り、三位以上、大臣までもくるめていふのが常であるが、またこゝでのやうに、大臣公卿と熟して用ゐられることがある。その時は、大中納言の三位以上のものだけをさしていふことになるのである。【ことごとく移り給ひぬ】といふのは、その福原の新都へお遷りなされたのをいふのであるが、一本には、『大臣公卿、ことごとく、攝津の國、難波の京に移り給ひぬ』とある。【世に仕ふるほどの人】といふのは、ほどといふのは、一を指定して、その度合を大きくとりなすに用ゐる助詞であつて、苟くも世に仕へて、官職のあるといふだけの人はといふ樣に、そのすべてをくるめていうたのである。【主君のかげをたのむ】といふのは、主君の恩惠に浴しようとたよるものをいうたのだ。古今集の序に、『おほん惠のかげ、筑波山の麓よりも繁くおはしまして（漢文の序には、『惠茂二筑波山之陰一』とある）』とあり、又同じ古今集の東歌に、『筑波ねのこのもかのもにかげはあれど、君がみかげにますかげはなし』とありなどする、その用例にいひなしたのである。【時を失ひ】は、漢文で時に遇ふ、時を失ふと、相對して用ゐる用例から來たものである。文選の答賓戯に、『得レ氣者蕃滋、失レ時者零落』とふ意。◎時を失ひ　時世にあはない意。◎世にあまされ　世にのこされる、すなはち、世に用ゐられない意。◎期するところなき　期すは、あらかじめ定めて待つ意、で、前途の望のないのをいうたのである。

こぼたれて

◎軒を爭ひし　軒と軒と相接するといふやうに、家のたてこんでゐるさま。◎こぼたれて　こはされての意。◎淀川　宇治川から出て、伏見を經て、難波の海に入る川。◎浮び　筏にして浮べ下すのをいふのだ。◎庄園　朝廷より諸臣に賜る、諸國の田園をいふことば。

ある。古今集の序にも、『きのふは榮えおごりて、時を失ひ、世をわび』と用ゐてゐる。【愁へながらとまりゐたり】は、愁ひはするものゝ、どうすることもできないで、そのまゝ古都に留つてゐたといふのである。

文評　都の人は、誰も彼も、いろいろと新都の不便なことをいひさわぐが、さてどうにもならないで、御遷都になつてしまふ。それで、官途になり、官途に望をかけてゐるものは、心ならずも、先を爭うて遷つていく、また世にはぐれたものは、うれひながら、さびしく舊都にのこる、――かうした人々の心情が、ちよつとおもしろく書きわけられてゐる。

軒を爭ひし人のすまひ、日を經つゝ荒れゆく。家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の前に畠となる。人の心みな改りて、たゞ馬鞍をのみ願ひ、牛車を用とする人なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。

註釋　【軒】は、家の屋根の裾の、四方へ垂れてさし出てゐる所をいふことば。で、その軒と軒とが相接して、家のたてこんでゐるのを、軒を爭ひしと、修辭でいうたのである。【日を經つゝ荒れゆく】のつゝは、接續の助詞で、での更に繼續の意をもつものである。それで、一日一日と、つゞいてその荒れまさつていく意をあらはしたのである。【淀川に浮び】といふのは、平家物語には、『家々は、賀茂川、桂河にこぼち入れ、筏に組み浮べ、資財、雜具、船につみ、福原へはこび下す』と書いてある。それと同じ意で、家のこはした材木を筏に組んで、河に流し下すのをいうたのである。【馬鞍をのみ重くす、牛車を用とする人なし】といふのは、武士の事をのみ尊んで、公家のさまを卑んだといふ解がある。なるほどさうらしくも聞えるが、これは、世の中のいかにもあわたゞしくて、馬に乘つていそいで往來する人ばかりで、優長に牛車を驅る人はないやうになつたといふ意味ではあるまいかと思ふ。尤もあとの【西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず】といふのを、武士になつて、國守になり、西南海の所領を得む事を願うて、公卿になつて東北國の庄園をもらふことを好まないと解けば、前の武事を尊んで、公卿のさまをいやしむと解く方が當るやうである。しかし、西南海は新都に近く、東北國

は新都に遠いので、その近い所の領地を望んだといふやうにも解けるのである。或は以上、二つの解をかれた意、すなはち、とかく武士の風をまねて、いそがしげに馬に乘りまはつて、もとの優長な牛車を驅るものはない、そして領地にしても、とかく近くの地に國守となることを望むといふやうな意にいひなしたのかもしれぬ。また平家物語には、『今は辻々堀り切つて、車などのたやすう行き通ふこともなく、たまさかに行く人は、小車に乘り、道をへてこそ通りけれ』と書いてあるのを見ると、第一に道がひどくなつて、牛車では通れなかつたといふことも、あつたのかも知れないのである。

文評 舊都の日に日に荒れまさりゆくことをいうて、人の心の改るといふことを述べるのに、『たゞ馬鞍をのみ重くす、……』、『西南海の所領をのみ願ひ、……』といふあらはし方をしたのが、氣がきいてゐる。一つには、以てその觀察のおもしろきを見るべく、一つにはその叙述の簡潔なのを見るべきである。『家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の前に島となる』といふところは、例の通り、わざとその對句の形のそろふのを破つてゐる、書き方である。

◎おのづから事の便ありて　作者が、自然、事のついでがあつてといふのである。◎今の京　福原の新都。◎ほどせばくて　分限がせまい、區域がせまい意。◎條里を割る　平安京のやうに、一條より九條といふやうに、その大路の市區のわり方をするのをいうたのである。◎かまびすしや

こゝの所も、ちよつと平家物語と似てゐる。參考の爲に、左に平家の文章を引いておかう。

軒を爭ひし人のすまひ、日を經つゝ荒れゆき、家々は賀茂川、桂河にこぼち入れ、筏に組み浮べ、資財雜具、船につみ、福原へはこび下す。たゞなりに、花の都、田舍になるこそ悲しけれ。

その時、おのづから事の便ありて、津の國今の京に至れり。所のありさまを見るに、その地ほどせばくて、條里を割るに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。浪の音常にかまびすしくて、鹽風ことにはげしく、內裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと、なかなか樣かはりて、優なる方も侍りき。

註釋 【條里】は、拾芥抄に、『條起二從北一行二於南一、里起レ西行二於東一』とある。源平盛衰

かましく、さわがしい意。◎鹽風　海より吹き上げる風。◎内裏　皇居を申し上げることば。◎木の丸殿　天智天皇が筑紫に行幸なされて、筑前の朝倉において丸木のまゝでたてられた御殿。◎なかなか　かへつてといふほどの意。◎優なる方　風雅な點といふほどの意。

記には（卷十七、福原の原の事）、『河内守光行、丈尺を取つて、輪田の松原、西の野に、宮城の地を定めけるに、一條より五條まであつて、五條以下はその所なし』とある。さういふ意にいひなしたのである。『木の丸殿』は、上の語釋にといたやうに、天智天皇が筑前の朝倉山の山中におたてになつた行宮で、丸木のまゝでお作りなされたもの。新古今集に、天智天皇の御製の、『朝倉や木の丸殿にわがをれば、名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ』といふのが載つてゐる。もと神樂の朝倉の謠物（うたひもの）である。『やうかはりて』は、さまのかはつてゐる意である。源氏物語の須磨の卷に、『所につけたる御すまひ、やうかはりて』とある。『なかなか優なる方も侍りき』といふのは、その風雅の點のあるのを擧げて、そのさまを譽めていうたのではない。却つて優なる方もあつたといふので、そのいかにもはえない皇居のさまをあらはしたのである。

文評　作者が事のついでがあつて、新都を見たというて、そのさまを叙したのであるが、例の簡明の筆で、よくその一通りの趣をつくしてゐるところが、巧なものである。ことに、『北は山にそひに高く、南は海に近くて下れり。涙の音常にかまびすしくて、鹽風ことにはげしく』といふところが、いかにも簡明で、いかにも氣がきいてゐる。木の丸殿の例をおもひよせて、『なかなか優なる方も侍りき』といふて、却つて適切に、その疎末な、はえない御殿のさまをあらはしたところも、氣がきいてゐる。

平家物語には、卷五の『都がへりの事』のとこに、

新都は、北は山々聳えて高く、南は海近くして下れり。涙の音常にかまびしう、鹽風はげしき所なり。

と書き、又、新都とは緣のない、卷八、『宇佐行幸の事』のとこに、

内裏は山の中なれば、かの木の丸殿も、かくやありけむと、なかなか優なる方もありけり。

と書いてゐる。全くこゝと同じ文章である。

日々にこぼちて、川もせきあへず運びくだす家は、いづくに作れるにかあらむ。なほ空しき地は多く、作れる屋は少

◎川もせきあへず　川もさへぎり得ずの意であらうか。なほ下の註解にとく。◎空しき地

家の立つてない空地である。◎浮雲の思風のまにまに、あちこちと浮きたゞよふ雲を以て、人の心の安堵しない比喩にいうたのである。◎もとよりゐたる　福原の舊住民である。◎土木　家屋の建造をいふことば。◎車に乘るべきは　車に乘るべき身分のものが、馬に乘つてゐるといふのである。◎衣冠　公卿の正服で、冠と袍に指貫をつけるのである。◎布衣　狩衣と同じ製で、官服である。◎直垂　當時の平服で烏帽子をつける。◎手ぶり　風俗といふほどし。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。ありとしある人、みな浮雲の思をなせり。もとよりこの所にゐたるものは、地を失ひてうれへ、今移り住む人は、土木のわづらひあることをなげく。道のほとりを見れば、車に乘るべきは馬に乘り、衣冠布衣なるべきは、直垂を著たり。都の手ぶり忽に改りて、たゞひなびたる武士に異らず。

註釋【川もせきあへず】といふのは、川も流れあへずの意にいうたものと、解いた註書があるが、せくを流れる意に用ゐるのはをかしい。これはあとからあとから、筏を流してくるので、川水もこれをさへぎり得ずといふ意であらうと愚はれる。【車に乘るべきは馬に乘り】といふのは、前段の、馬鞍をのみ重くす、牛車を用とする人なし（三〇頁）とあるのに應じたのだ。こゝを見ても、前のは、人々の何の用意も整はないので、あわたゞしげに馬を驅つてゐるといふ意にいうたものの意。◎ひなびたる　ゐなかめいたる意。

しい。【手ぶり】は、風俗、ふるまひなどの意である。萬葉の歌に、『天さかるひなに五とせすまひして、都の手ぶりわすらへにけり』といふのがある。

文評 前段につゞいて、新都の未だ整はず、舊都のはやく荒れゆくさまをのべ、そしていづこも安き心なく、風俗さへもかはりゆくといふことをいうてゐるのであるが、すべて例の簡明な叙法である。

そしてこゝでは、『なほ空しき地は多く、作れる家は少し』、『故郷は既に荒れて、新都はまだ成らず』、『もとよりこの所にゐたるものは、地を失ひて憂へ、今移り住む人は、土木のわづらひあることをなげく』、『車に乘るべきは馬に乘り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり』というやうに、殆ど全節を、對句で進めてゐる。但し、その對句のかけあはせには、例の平板に流れ、千篇一律に陷らぬ用意がしてあり、また、その對句をはづしていく所が（『ありとしある人、……』、『都の手ぶり忽に改りて、……』といふやうに）、なだらかにうまく轉じてある。

こゝも、平家物語の卷五、『新都の事』の條に、

舊都は既にうかれぬ、新都は未だことゆかず。ありとしある人は、みな身をう

き雲の思をなし、もとこの所に住むものは、地を失つて憂へ、今移る人々は、土木のわづらひをのみなげきあへり。

と、殆ど同じ文章に書いてゐる。

これは、世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つゝ、世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂へ遂に空しからざりければ、同じ年の冬、なほこの京に歸り給ひぬ。されどこぼちわたせりし家どもは、いかになりにけるにか、ことごとくもとのやうにも作らず。

◎瑞相　前兆、前表の意。◎しるく　明である、明白である意。◎同じ年の冬　平家物語には、治承四年十二月二日とある。◎なほ　やはりといふほどの意。◎この京　平安京。◎こぼちわたせり　一面にこはしてしまつた意。

明であり

瑞相

註釋【瑞相】は、もと佛教で、佛が說法される時、多く奇瑞の相を現じなさるといふので、めでたい、不思議の相の意にいひ、めでたい前兆、前表の意に用ゐられたことばであるが、轉じて、吉凶ともに、その前兆、前表にいうやうになつたのである。さてそこで、これは世の亂れる瑞相とか聞いてゐたが、なるほどいかにもさう明にといふのであるが、その意がよくわからぬ。つまり、こればといふのが何をさしてゐるのか、わからないのだ。で、抄には、『武をこのめば、亂世の瑞相とか聞きおける如くに、世がうきたちたるとなり』と解いてゐるが、それもその武を好むといふことが、前に別に當る所がないのである。しひてたづれば、前段の世の人のみなわづらひ歎いて、安い心もなく、都のてぶりも改つてしまつたといふのを指したものでもあらうか。『民の憂遂に空しからざりければ』といふのも、ちよつとわかりにくい。民のうれへなげく志が、遂に達したといふやうに、諸註がいてゐるが、空しからざりければといふのは、さうはとけない。民のうれへなげいて心配した通り、賴朝が東國に旗擧げしたり何かして、世の中も亂れ、人の心も治らずなつてきたといふのをさしたものであらう。すなはち空しからずは、そのうれへ、心配が事實になつてきたのをさしたのであらう。で、【世の中うき立ちて】といふのは、賴朝が伊豆に旗擧げをし、平家の軍がこれを討ちに、關東に向つたのをさしたのだらうと、抄にといてゐるが、まさにさうであらうと思ふ。平家物語には、卷五、『都がへりの事』のところに、

◎かしこき御代　聖天子の御代、聖代の意。◎みつぎもの　人民より官に奉る租税の泛稱である。◎なぞらへて　くらべて、比しての意。

今度の都うつりなば、君も臣も、斜ならず御なげきありけり。山、奎良をはじめ、諸寺、諸社に至るまで、しかるべからざるよし、訴へ申したりければ、さしも横紙を破られし太政の入道殿、『さらば都がへりあるべし』とて、同じき十一月二日、俄に都がへりありけり。

文評 別にいふべきこともないが、『日を經つゝ、世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の憂遂に空しからざりければ、……』といふつゞけ方がちよつとうまい。それから、前の遷都の時に、町なみ一面に、片つぱしこはしてしまつたといふのを、こゝぼちわたせりしといふたのも、ちよつと氣のきいた書き方である。

ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、憐をもて國を治め給ふ。すなはち御殿に茅を葺きて、軒をだにとゝのへず、煙の『ともしき』を見給ふ時は、かぎりある貢物をさへ免されき。これは民を惠み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔になぞらへて知りぬべし。

政策上、民心糧に考へ、殖もち便ちり為る事。

評釋 【ほのかに傳へ聞くに】といふのは、はつきりとは知らないが、かすかに傳へ聞くところによるといふやうな意で、作者の謙していうた調子である。【御殿に茅を葺きて、軒をだに整へず】といふのは、書經や史記などにある、堯帝が質素の家作りをして、『茅茨不ㇾ剪』といふて、茅を葺きつぱなしにして、軒のさきのところもそろへずにおいたといふ故事をさしたのである。【煙のともしきを見給ふ時は】といふのは、仁德天皇の御聖德の故事をさしたのである。【今の世の中のありさま、昔になぞらへて知りぬべし】といふのは、ちよつとわかりにくい書き方である。この時の新皇居は、『内裏は山の中なれば、かの木の丸殿もかくやと』と、前にあつた通りで、何もさう美麗をつくした御殿ではなかつたらしい。實際それに急の御遷都であるから、さうちやんと御裝飾などもできてゐなかつたに相違ない。すると、こゝの引例とのとりあはせが工合がわるいのである。從つてなぞらへてと

いふのが、適切にきかなくて、意味がはつきりしないことになる。で、平家物語の『新都の事』（巻五）のところを見て見ると、

この國綱の卿と申すは（この時の御造營係である）、ならびなき大福長者にておはしければ、内裏つくり出されむこと、さうに及ばねども、いかんが國のつひえ、民のわづらひなかるべき。まことにさし當つたる天下の大事、大營會などの行るべきをさしおいて、かゝる世の亂に、遷都、造内裏、少しも相應せず。

と書いて、そのあとにこゝと同じ『いにしへのかしこき御代には、……』といふ文章がつゞけてある。それを以て、こゝをおもふと、これは、昔の聖天子は、御修理なるべき御殿をさへ、民の上をおもうて、そのまゝにお忍びなされた。それを今の朝廷では（清盛の專横）、遷さんでもいゝ都を無理に遷して、ふけいな費用をかけて、民に難儀をさせられる、これでは世のみだれるのも尤だと、――かういふ意にいうたものであらう、たしかにさうとくべきものだと思ふ。知りぬべしの「ぬべし」は、古文によくある例で、推量のべしに現在完了のぬをつけて、その動作の完了すべき筈だと推量する意に用ゐたものである。すなはち、わかつてしまふ

◎養和　安德天皇の御代の年號。◎久しくなりて　今からは、久し

べき筈だといふ意である。

文評 これで、都うつりの話を結んだのである。すなはち、不思議の實例の第三を終つたのである。こゝでは、その故事を引いて立證するのに、それをごく輕く、ぼんやりと（誰でも知つてることであるから、はつきり、大仰に引用すると、くどくなるので）引用したところが、いかにも氣がきいてゐるのである。ほのかに傳へ聞くにといふのも、わざとらしくなるのを避けた、同じ用意である。

こゝも、平家の『新都の事』の條に、

いにしへのかしこき御代には、すなはち内裏に茅を葺き、軒をだに整へず、煙のとぼしきを見給ふ時には、かぎりある貢物をもゆるされき。これすなはち、民をめぐみ、國をたすけ給ふによつてなり。

と、殆ど同じ文章で書いてゐるのである。

また養和の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間飢渴して、あさましき事侍りき。あるは春夏日でり、あ

い以前のことになつたのでといふのだ。◎飢渇　飢は飢饉、渇はのどの乾くことで、ひでりをいうたのである。◎あさましきこと　あきれるほどに甚しいことの意。◎五穀　穀物の總稱。◎いとなみ　しわざ、勞役をいうたのである。◎ぞめき　にぎやかに取りさわぐことの意。

るは秋冬大風大水など、よからぬことどもうち續きて、五穀ことごとくみのらず。空しく春耕し、夏植うるいとなみのみありて、秋刈り、冬收むるぞめきはなし。

註釋【養和の頃かとよ】といふのは、今はもう時が久しくなつてはつきりおぼえないがといふ書き方にしたのであるが、作者が巧を求めて、わざとさうぼんやり書いたものであらう。治承五年七月十四日に養和と改元されて、翌年の五月二十四日に、更に壽永と改元されたのであるから、養和はまる一年ほどしかなかつたのである。『平家物語の卷六、『横田河原會戰の事』の條に、『同じき二十日の日(養和二年四月二十日)、二十二社へ宣幣使を立てらる。これは饑饉疾疫によつてなり』とあるから、前年からこの頃にかけてのことであつたらう。【飢渇】は、飢饉と旱魃で、飲食物のないのに苦むをいふ。【あさましきこと】といふのは、世間の窮苦のさまの、實にあきれるほどに甚しくあつたのをいうたのである。【春夏日でり、秋冬大風大水】といふのは、春から夏にかけては、ひでりがし、秋から冬にかけては、

大風が吹き、大水が出て、といふのだ。【五穀】は、五種類の穀類をいふ義であるが、もとのおこりの漢文では、その五種類の數へ方がいろいろかはつてゐる。わが國語の上では、米、麥、粟、黍、豆と、大抵數へてるのである。そしてそれがすべての穀類の總稱として用ゐられるのである。【冬收むる】は、すなはち收め入れる意で、收納である。【ぞめき】は、秋冬のその收穫時に、農夫もいそがはしく、かもにぎやかにさわぎ立つて取入れることをいうたのである。それで、收穫の少しもないのを意味したのだ。

文評　これは、別の話になつて、不思議の實例の第四として、養和の飢渇の例にはひつたところである。

『春夏日でり、秋冬大風大水など』といひ、『春耕し夏植うるいとなみのありて、秋刈り、冬收むるぞめきはなし』といふやうに、例の簡明の筆で、まづ飢渇のその一般を叙したところが、いゝ調子である。

これによりて、國々の民、あるは地を捨てゝ境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さまざまの御祈はじまりて、なべ

◎境を出で　他國へ出て流浪するのである。◎さまざまの御祈　朝廷で、諸社諸寺に奉幣、

何わざ

わびつゝ

供養あつて、いろいろと年のなほるやうにお祈があるのである。◎なべてならぬ法　一通りでない法、やかましい秘法などの祈である。◎更に　ちつともといふほどの意。◎そのしるしなし、その效驗がないといふのである。

◎何わざ　なにごとといふほどの意。◎さのみやはみさをもつくりあへむ　さうばかり、體裁を作りきれようや、きれないとの意。

てならぬ法ども行はるれども、更にその效なし。

註釋【地を捨てゝ境を出で】といふのは、かういふ年がらで生活ができず、租稅なども納められないで、田畑を棄てゝ、他國に出て流浪してしまふといふのである。【家を忘れて山に住む】といふのは、家にゐては食物がないので、山にはひつて、木の芽や、草の根などをさがして飢をしのぐといふのであらう。【家を忘れて】の忘れては、すてゝといふほどの意である。前の句に地を捨てゝとあるから、對句にして忘れてというたのである。

文評　あるは地を捨てゝ境を出で、あるは家を忘れて山に住むと、この二句で、例のやうに、輕くその人々の流離困頓のさまを、あらはし出したところが、ちよつと眼に立つ。

京のならひ、何わざにつけても、源は田舍をこそたのめるに、絶えてのぼるものなければ、さのみやはみさをもつくりあへむ。念じわびつゝ、さまざまの寶物、かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たまたまかふるものは、金を輕くし、粟を重くす。乞食道のべに多く憂へ悲む聲、耳に滿てり。

註釋【源は田舍をこそたのめるに】といふのは、すべて京のならはしとして、何ごとにつけても、その原料は、これを田舍に仰ぎ、田舍に待つといふのである。但しその中でも、主として食料の上をいうてゐるのである。それが田舍がかう飢饉なので、少しも京へ、その食料が上つてこないといふのだ。そしてその上つてこないといふのは、また主として、領地などから上つてくる上納の穀物をさしていうたのであらう。【さのみやは】といふのは、都の人は、苦しくても、がまんして體面をつくろうてゐるものだが、さうばかり、いつまで體面をつくつてをれようや、をられぬといふ意にひぶかしていうたのである。【念じわびつゝ】といふ、念じわぶは、『住みわぶ』などの用ゐ方と同じく、念ずるといふことにたへない意である、すなはち、こらへかれる意。【かたはしより捨つるが如くすれども】といふのは、みさをは、體裁、體面といふほどの意。◎念じわびつゝ　こらへかれてといふほどの意。◎更に　ちつともの意。◎目見立つる　目をとめる、目をつける意。◎道のべ　道のほとり。

その寶物を、無造作に、手あたり次第に持ち出して、まるで捨てるやうに賣らうとするが、誰もそれに目をとめて、買はうとする人もないといふのである。『たまたまかふるものは、金を輕くし、粟を重くす』といふのは、ちよつとその前とのつゞき工合のわからぬ書き方である。で、前の句とは切りはなして、一體、穀類を持つてるものは、なかなかそれを賣らない、たまに賣るものがあると、金のねうちはごく輕くして、穀類のねうちの方はひどくたかくすると、かうとく註解書があるが、どうもさうらしくない。たまたまかふるといふのは、どうしても前につづいてゐる。ちつとも目にとめるものはない。たまにそれに目をつけて、買はうといふものがあると、――かういふつゞきである、それで、その寶物を買ひ取るにつけて、金で拂ふならば金はいくらでもやらう、穀類で拂ふならば少ししかやれぬといふやうに、賣る人も、金よりは穀類を望み、買ふ方も、金は輕くして穀類は重くしたと、かういふのであらう。たまたまは、たまに、稀にの意、粟（ぞくは、漢文の用例で、もみをいひ、そして穀類の總稱に用ゐられることば。

文評 都人士の飢渴の窮狀をあらはすのに、さまざまの寶物を、かたはしから捨てるが如くに持ち出しても、誰も顧みるものもないといふ一事を以て、極めて痛切にこれをあらはし出して、讀者をしてそのすべてを聯想せしめたところが、いかにも敍事の要を得てゐていゝ。文章の調子も、その『さのみやは、みさをもつくりあへむ、念しわびつゝ、……』と云ふところが、一番いゝ調子である。

さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立ち直るべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさるやうに、跡かたなし。世の人、みな飢ゑ死にければ、日を經つゝきはまり行くさま、少水の魚のたとへにかなへり。はてには笠うち著、足引きつゝみ、よろしき姿したるもの、ひたすら家ごとに乞ひありく。

注釋 【からくして暮れぬ】といふのは、やうやつと暮れたの意で、人々が苦みに苦んで、どうやらかうやらして年を越して、それで翌年の年なみのなほるのを待つた

◎さきの年　前年、すなはち養和元年である。◎からくして暮れぬ　やつとくれた意。◎あまさへ　あまつさへ、その上に。◎えやみ　やくびやう、流行病。◎まさるやうに　前年より一層はげしい慘狀のやうにといふのだ。◎跡かたなし　その極端のあさましいさまをいうたのである。◎きはまり行く　人々

の次第次第に衰へ弱つて、死に迫つて行くのをいうたのである。◎少水の魚のたとへ　下の註釋にとく。◎はてには　しまひには。◎ひたすら　專念に、ひとへに。

といふのをいうたのである。【まさるやうに跡がたなし】といふのを、跡がたなしは、前にあつた御所や、修法などのしるしが、少しもないといふのだと、諸註がといてゐるが、さうではない。それは、その慘狀のいかにも甚しいのをいうたので、前年よりはまさるやうにして、何ともいへない慘狀だといふのである。【少水の魚のたとへ】といふのは、往生要集に引いてある文殊出曜經の、『佛說頌曰、是日已過、命則衰滅、如少水魚、斯有何樂』とあるのを引いたのである。水の少いので、魚の苦みよわるといふたとへである。【かなへり】はかなうてゐる、當つてゐるの意。【笠うち著、足引きつくみ、よろしき姿したる】といふのは、さういふ上流の人までが、食を乞うてあるくやうに、甚しくなつたといふのである。

文評 どうやらその苦しい年を送つて、翌年はどうにかならうとたのしんでゐたのが、それがまた疫病さへ加つて、一層にひどい、――その慘狀は、實に想見するにあまりある。それをその、人々の期待に反して、疫病さへ加つたといふとこから叙し入つて、少水の魚の喩を以て、そのさまをおもはせ、そして上流の人までが、見えも何も忘れて、一心に食を乞うてあるくといふのを出して、それでその外の

◎わびしれたる　思ひわづらうてぼけてしまつた意。◎ありく　あるくに同じ意。◎築地のつら　築地は、ついぢともいふ。屋根のあるねりべいである。そのおもて、その前をつらというたのだ。◎取り捨つる　その死骸を取り捨てることをしないといふのだ。◎世界　都の中を、誇張的にいうたのである。◎かはりゆくかたち　死んだ人の相貌のかはるのをいうたのである。◎目もあてられぬ　直視するに堪へない意。◎馬車の行きちがふ道　死骸に道が埋つて、馬

すべてを、讀者に聯想させてゐるのである。いつもながら、氣のきいた叙法である。『ひたすら家ごとに乞ひありく』のひたすらが、いかにもよくきいてゐる。

かくわびしれたるものども、ありくかと見れば、すなはち仆れ死ぬ。築地のつら、路のほとりに飢ゑ死ぬる類は、數も知らず。取り捨つるわざもなければ、くさき香、世界にみちみちて、かはりゆくかたちありさま、目もあてられぬ事多かり。況や河原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。

註釋 【世界】は、もと佛教語で、生物の棲息してゐる國土のすべてを稱することばである。尤も普通には、『世の中』といふ意に用ゐられることが多い。ここは、そのくさい臭が都の至る處にみちみちてゐるといふので、それを誇張して、世界というたのである。【多かり】は、多くありのつまつたもの。

文評 前段を受けて、路上に飢死する人が多くなる、それをかたづけることもしない

車のゆきあふ道だけもないといふのである。

◎しづ山がつ　賤しい樵夫の意。◎ともしく　とぼしくに同じ。◎たのむ方なき人　たよる道のない、窮困の人である。◎あやしきことは　その事のあり得べからざること、解釋し得ないほどにあるので、臭氣はあたりにみちみちて、死骸は日に日に腐爛していく、河原のあたりなどは、まるで馬や車の行き違ふ餘地もないまでに、死骸で埋つてゐると、かうその慘狀を叙したのである。これは、いはゆる誇張法の修辭で、實際あるよりは、その慘狀を誇大して書いたものであらう。『かくわびしれたるものども、ありくかと見れば、すなはち仆れ死ぬ』と、前段をそのまゝに受けて、叙し入つたところが巧である。慘狀の叙事も、その順序とその要とを得てゐる。

しづ山がつも力つきて、薪にさへともしくなりゆけば、たのむ方なき人は、みづから家をこぼちて、市に出でて賣るに、一人が持ち出でたる價、なほ一日が命を支ふるにだに及ばずとぞ。あやしきことは、かゝる薪の中に、丹つき、白金、黃金の箔など、所々につきて見ゆる、木のわれ、相まじれり。

をいうたのである。◎丹　あかい色の古の繪具である。◎白金黃金の箔　いはゆる金箔、銀箔である。箔は、金類をたゝいて、紙の如く薄くして、ものにおして用ゐるもの。◎すべき方なき者　何とする事もできない。窮困のもの。◎物具　道具である。◎濁惡の世　佛敎語、澆季な、わるい世の意。◎しも　强めていふ趣の助詞。◎心うきわざ　わざはことといふほどの意。

これを尋ぬれば、すべき方なき者の、古寺に至りて佛を盜み、堂の物具を破り取りて、わり摧けるなりけり。濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うきわざをなむ、見侍りし。

【注釋】【しづ】は賤しきものをいふことばである。それを熟合して、しづ山がつと用ゐるのである。【薪にさへともしくなれば】といふのは、都の中で、薪までもともしくなつてきたといふのだ。つまり樵夫たちも、飢渴に苦められて力つきてしまふ。それ故、都へ薪がでない、都の人は薪の不自由までも感じるやうになつた。そこで、その薪に賣らうといふので、何のよるべもない窮困の人々は、家をうちこはして、市に出て賣る、しかしこれでもなほ、一日の命を支へるだけには價しないと、かういふのである。【物具】といふのは、後には武具ばかりをさしていふやうになつたが、もとは、一般の道具、調度にいふことばである。【わりくだけるなりけり】のけりは、詠歎のけりで、わりくだくのであつたんだといふ調子。なほいへば、その原因をたづねあて

て、そのあまりのことなのに（佛像や佛具をくだくなどいふ）、驚きあきれる、その感慨の趣をあらはしてゐるのである。【濁惡の世】は、佛教語であつて、濁世（ちよくせ）ともいふ。この世は、五濁（ごぢよく）（劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁）の惡處で、しかも釋迦出世の年時を去ることが遠いので、實に澆季末法の世であるといふやうな意に用ゐられるのである。

文評 前段につゞけて、更にその窮困の狀の甚しく、遂には佛像、佛具をまで盜んで、わりくだいて賣るといふ、極端の例を描き出したのである。當時は、ともかくも、佛教の信仰の盛な時であつた。それでありながら、かういふことまでもするといふのは、よくよくのことでなければならぬ。作者はこの例によつて、そのいかに窮困の狀の極端であつたかを、見せてゐるのである。字面の上からは、『濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うきわざをなむ、見侍りし』といふのが、その主題のやうになつてゐるが、作者の意は、その感慨の裏に、そのあさましいことを敢てするまでに、人々の窮困の甚しかつたといふことを、きめて出してゐるのである。これは事實談ではあらうが、その極端の窮狀を、讀者に髣髴せしめる、最も

◎さり難き　わかれがたい、はなれ難い意。◎つぎにして　あとにしての意。◎いたはしく　いとほしい意。◎たまたま　たまにの意。◎いとけなき　をさない意。

いゝ事例である。作者の觀察の鋭さを見るべきものである。なほ叙事の上でいふと、樵夫も力がつきて薪を取る氣力もない、都では從つて薪にまでこまつてきた。そこでその薪に賣らうといふので、家をうちこはして市に賣るといふものが出てきた。しかしこれとても、一日の命を支へ得ぬといふ、あはれなさまである。と見る中に、古寺の佛像、佛具までも盜み出して、くだいて賣るものができてきた。あゝ何といふあさましさだらうと、――かういふやうに、進めてある、その叙事の進行が、いかにも次第よく、いかにも要領よく行はれてゐるのである。終の『……割りくだけるなりけり』――『……心うきわざをなむ、見侍りし』と、その感慨のかけあはせが、ことによく出てゐる。

またあはれなる事侍りき。さり難き女男など持ちたるものは、その志まさりて深きは、必ずさきだちて死しぬ。その故は、わが身をばつぎになして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふ方に、たまたま乞ひ得たるものを、まづ讓る

によりてなり。されば父子あるものは、定れることにて、親ぞさきだちて死にける。また母が命つきて臥せるをも知らずして、いとけなき子の、その乳房にすひつきつゝふせるなどもありけり。

註釋 【あはれなる】といふのは、人をして一種の情に打たれしむべくあるにいふことばである。【さり難き女男など持ちたる】といふは、男からいへば女、女からいへば男である、その兩面をかねて、くるめていうたので、女男など持ちたると書いたのである。で、これは夫婦の間をいうたのだと、諸註がいてゐるが、さうではあるまい。戀の上をいうたのである。尤も夫婦をもその中にこめてもいふが、とにかく戀といふ關係を、主としていうてゐるのである。【男にもあれ、女にもあれ】といふのは、或は男、或は女の、そのこちらの思ふ情の深いものから、その對者をさしていうてゐるのだ。【定れるものにて】といふのは、男女の間では、その志の深いのは、或は男の方にあり、或は女の方にありして、一定してはゐないが、親子の間では、親の子を思ふ情のより深いのは、きまつてゐることでといふのである。

文評 前に、窺困のその極端のさまを叙し終へて、さてこゝには、更に進んで、その際にあらはれた、人情のその悲痛な例にはひつたのである。

取材はいかにもいゝ、まことにあはれ深いものである、まことに悲慘の極である。が、趣は、こゝでは、そのわりにうつつてゐない。説明がちと過ぎたやうである。で、その叙事の生趣が出てゐないのである。戀人の例などは、ことにいゝ例であるりながら、そのあはれはうつつてゐない。なるほどとはうなづかれるが、そのまそのあはれには引き入れられない。それに、死んだ母を、知らずに、その乳房にすひついてゐるといふ例などは、まるでういてしまつて、そのあはれにさそひ入れないのである。

かういふ叙事は、一體この作者に向かないのであるが、それに加へて、説明を費しすぎたのと、筆が割合にこまか過ぎたのとで、この一節を存外感興を引かぬものにしてしまつたのである。

◎仁和寺　山城の葛野郡御室にあつた寺。◎慈尊院　仁和寺の支院であつた彌勒寺のことであらう。◎隆曉法印　源俊隆の男で、彌勒寺法印と號した人。大僧正寛曉の弟子。◎ひじり　僧を、敬稱的にいふことば。◎阿字　梵語の第一字母で、眞言では、ひどくその功德を尊重するもの。なほ下の註釋にとく。◎緣を結ばしむる　成佛すべき緣を結ばせる意。◎四五兩月のほど　ほどは、間といふに同じ意。

仁和寺に慈尊院の大藏卿隆曉法印といふ人、かくしつゝ數しらず死ぬることを悲みて、ひじりをあまたかたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて、緣を結ばしむるわざをなむせられける。その人數を知らむとて、四五兩月がほど數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四萬二千三百あまりなむありける。

【註釋】【仁和寺】は、一に御室の御所と申したもので、光孝天皇の仁和年中、ここに離宮を創したまひ、後、醍醐天皇の延喜三年、伽藍を建立して、大内山仁和寺と稱し、また朱雀天皇御讓位の後、ここに宸居を定め給うてより、明治の初年に至るまで、世々、法親王が一山の事務をお執りになつてゐたのである。古義眞言宗の一本山である。【慈尊院】といふのは、その支院であらうが、わからぬ。但し支院に彌勒寺といふのがあつて、彌勒は慈尊と譯されるのであるから、それに隆曉は、彌勒寺法印と稱せられてゐたのであるから、その彌勒寺のことをいうたものに違ひない。【かくしつゝ】といふのは、前段にあつたのをさして、都の人のふらふらと歩き出しては、そのまゝに路頭に仆れ死ぬのをいうたのである。【ひじり】は、もと學德の高い人をさしていふことば、それが學德の高い僧をさしていふやうになり、更に轉じて一般に敬稱的に僧をさしていふことばになつたのである。【かたらふ】は、談合して、自分の仲間に引き入れる意である。【阿字を書きて】といふのは、阿字は、梵語の第一字母であるが、眞言では、ひどくこれを尊んで、この字に特殊の支理があると說き、この一字を觀ずれば、一切の煩惱束縛を斷絶することができるといふやうにとくのである。で、死者の額に、阿字を書いて、それで成佛の緣を結ばせたといふのだ。【緣を結ぶ】といふのは、いはゆる結緣で、因緣を結ぶ義である。それによつて因緣を結んで、佛道を成ぜしめようといふのである。【一條より南】云々といふのは、北のはての一條から南のはての九條まで、これが南北の條で三十八町、東のはての京極から西のはての朱雀まで、これが里で十六町、

◎その前後　四五兩月の前後。◎河原　賀茂河の河原である。◎白川　比叡山の南麓から發して賀茂川に入る白川のそのあたりの汎稱。◎西の京　もとの右京である。◎もろもろの邊地　京都ゐまはりの郊外の邊鄙な地をいうたのである。◎際限　かぎりの意。◎諸國七道　七道は、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道。◎長承の頃　安元と改元された長承四年のことだといふ。◎まのあたり　目の前でといふほどの意。◎いとめづらしく、あやしくの意。◎元暦　後鳥羽天皇の

そのすべての條里の區間をくるめていうたのである。【四萬二千三百あまり】といふのは、他によるべき所がないが、大分誇大していうたものであらうと思ふ。

文評　前に既に飢渴の慘狀を叙しつくしたのであるが、作者はなほこゝに、その一歩を進めて、死者の數をあらはしてゐるのだ。しかもそれを隆曉法印の結緣のわざにつけて、そして四五兩月の間に數へた數で出したところが、まことに氣がきいてゐる。たぶいきなりに、その數をあらはしたのから見れば、遙にそのあはれ深い趣もそはるし、おそろしい數についての驚歎の情もさそはれるのである。但し、註釋にもいうた通り、數はだいぶ誇大されてあるものであらう。

叙事の上では、『かくしつゝ、數しらず死ぬる』といふ書き方が、ちよつと巧に出てゐる。それから、『一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東』といふいひざまが、その京中のすべてをつくす意においても、また誇張的の趣を出す上についても、まことにその要を得てゐるのである。

況や、その前後に死ぬるもの多く、河原、白川、西の京、もろもろの邊地などを加へていはゞ、際限もあるべからず。いかに況や諸國七道をや。

近くは崇德院の御位の時、長承の頃かとよ、かゝる例はありけると聞けど、その世のありさまは知らず、まのあたりいとめづらかに悲しかりしことなり。

註釋【諸國七道なや】の諸國は、七道に對して、畿内の諸國をいうたのであらうと、諸註にといてゐるが、さうらしい。但し、七道にかけて、日本全國を、諸國というたものともとける。【長承の頃かとよ】といふのは、泗說に、年代紀を引いて、『考、長承四年、安元開元、安元元年天下疱瘡はやり、人多く死ぜり。疑ふらくはこの義なるべし』というてゐる。

文評　これで飢渴の例を結んだのであるが、『況や、……』、『いかに況や諸國七道をや』と、つゞけて、その慘狀のいかにおそろしかつたかを想ひ見させた所の句法がちよつと巧である。

また元暦二年の頃、大地震ふること侍りき。そのさま世の

御代の年號。◎なゐ地震の古語。◎ふるふるふ、ゆり動く意。◎まろび入り　ころがり入る意。◎立ちど立ちどころ、踏みどころの意。◎まどはせり　足の踏み所を失ふ意である。

常ならず。山崩れて川を埋み、海かたぶきて陸をひたせり。土さけて水涌きあがり、巖われて谷にまろび入り、渚こぐ船は浪にたゞよひ、道行く駒は足の立ち所をまどはせり。

注釋【元暦二年の頃】は、東鑑の卷四に、『元暦二年七月九日午刻、京都大地震云々』とある。平家物語卷十二の『大地震』の條にも、『同じき七月九日の日の午の刻ばかりに、大地震おびたゞしう動いて云々』とある。

文評　これは又、天變地異の新しい例である。『山崩れて川を埋み』以下、すべて誇張法の修辭で、大仰にその震災のおそろしいさまを描き出してゐるので、その誇張の修辭は一通りその要を得てゐるが、こゝは句法が、すべて對句になつてゐて、その對句があまりきちんとしてゐるので、わり合にその趣が出てゐない。これはあの軍記物の文章によく見られるところのものである。一體、この句法は、とかくはなやかになりたがるもので、かういふ叙事には適しないものである。こゝでもまさにその憾がある。

◎在々所々　いたる所の意。◎堂舍塔廟　神社佛閣民屋のすべてをさしていうたのである。◎うちひしげ　ひしとおしつぶれる意。

これは、平家物語の卷十二の『大地震』の條に、こゝとよく似た文章で出てゐる。こゝの一節は、

また遠國、近國、かくの如し。山崩れて河を埋み、海漂ひて濱をひたす。渚漕ぐ舟は波にゆられ、陸行く駒は足のたちどを失へり。大地裂けて水涌き出で、磐石割れて谷へまろぶ。

と書いてゐる。

況や、都のほとりには、在々所々、堂舍塔廟、一つとして全からず。あるは崩れ、或は倒れぬる間、塵灰たち上りて、盛なる煙の如し。地のふるひ、家のやぶるゝ音、雷に異らず。家の中に居れば、忽にうちひしげなむとす。走り出づれば、また地われ裂く。羽なければ空へもあがるべからず、龍ならねば、雲に上らむこと難し。おそれの中におそるべかりけるは、

ただ地震なりけりとぞ覺え侍りし。

註釋【在々所々、堂舍塔廟一つとして】といふのは、ちよつとわかりにくい。在々所々は、在所在所の、すなはち、都のほとりのゐなかではといふやうにも聞える。しかし平家物語卷十二の『大地震』の條のところに、『在々所々の神社佛閣、あやしの民屋、さながらみな破れ崩る』とあるのを見ると、こゝも同じ書きざまで、至る所の神社佛閣民屋といふ意であらう。舍といふのは、すなはち民屋をさし、堂、塔、廟は、神社佛閣をさしたのであらう。【羽なければ、……龍ならねば……】といふのは、何か出所ありげのことばに見えるが、さうではなくて、たゞ比喩の巧にいうたものである。【地震なりけり】のけりは、前の五三頁に說明した詠歎の動詞のけりで、地震であつたんだと、つくづく感じた趣をあらはしてゐるのである。

文評 前段とつゞけて、地震のそのおそろしかつたさまを、誇張的に、修辭して書いてゐる。そしてすべて對句にして、叙事を進めてゐる。叙事の進行の順序もよく、誇張の修辭もよく、『羽なければ、……』、『龍ならねば、……』のその比喩もよく出てゐるのであるが、しかしそのわりに、その叙事の趣があらはれてゐない。これは前段でもさうであつたが、あまり對句でばかり叙事を進めてある爲であらうと思ふ。それ故、何となく、こゝの叙事は、前の數例の叙事より見劣りがする氣がするのである。

但し、『或は崩れ、或は倒れぬる間、塵灰たち上りて、盛なる煙の如し』と叙して、『地のふるひ、家のやぶるゝ音、雷に異らず』と、すぐに受けて、その叙事を進めたところは、簡明にして、氣のきいた筆法である。

こゝも、平家物語の卷十二、『大地震』の叙事が、殆ど同じやうな文章で出てゐる。左にその似よりの所を抄出しておかう。

皇居をはじめて、在々所々の神社佛閣、あやしの民屋、さながらみな破れ崩る。崩るゝ音、雷の如く、上る塵は烟の如し。(下略)

(上略)洪水漲り來らば、岡に上りてもなどか助からざらむ。猛火燃え來らば、川を隔ても、しばしは避けぬべし。鳥にあらざれば、空をもかけりがたく、龍にあらざれば、雲にもまた上りがたし。たゞ悲しかりしは大地震なり。

◎ものゝふ　武士、さむらひをいふ。◎六つ七つばかり　ばかりは、ほど、ぐらゐの意。◎築地　屋根のあるれりべい。◎おほひ　その築地の屋根である。瓦で葺いてあるのだ。◎はかなげなるあとなしごと　つまらぬ遊戯の意。◎ひらに　まつ平に。◎いとほしく　いたはしくの意。◎ことわりかな　ことわりは道理の意。尤だ、無理はないと感じた趣。

その中にある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を作り、はかなげなるあとなしごとをして、遊び侍りしが、俄に崩れうめられて、あとかたなく、ひらに、うちひさがれて、二つの目など一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲も惜まず悲みあひて侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしか。子のかなしみには、猛き武士も恥を忘れけりと覺えて、いとほしくことわりかなとぞ、見侍りし。

註釋【はかなげなるあとなしごと】といふのは、はかなげなるは、はかなさうなの意であるが、はかなきと同じ意に用ゐたのである。とりとめもない、かりそめなの意で、ちよつとした、つまらぬといふのである。あとなしごとは、何の意味もないことで、遊戯をさしたのである。つまり、それからそれと、わけもない遊戯をしてゐたのをいうたのである。【あとかたなく】は、そのつぶされ方のいかにもひどく、殆ど形をとめないくらゐに、うちひしがれたのをいうたのである。【悲みあひて】といふのは、父母二人の悲みあふさまである。【恥を忘れけり】も、前のけりと同じく、恥を忘れてしまつたんだと、強い感慨の趣をあらはしてゐるのだ。

文評　これは、震災のいづれもはげしく、あはれであるが中に、特にその一つの、最もあはれな例を點出したのである。武士の子といふ特別のもの、しかもひとり子といふ特別のものを取り、してそれが何の考もなく無邪氣に遊んでゐる所を、そのまゝにうちひさがれたといふ例で出したのである。いかにも適切の例である。それで、『猛き武士も恥を忘れけり』といふ感慨もよくきいてゐるのである。取材はかういゝのであるが、たゞ少し書き過ぎてしまつた。『二つの目など一寸ばかりうち出されたる』といふのは、あまりに筆が過ぎた。實際の事實ではあらうが、しかしかう書いてしまつては、その趣がうつらぬ。慘澹の光景が過ぎて、むしろ滑稽になつてしまふ。その一つの書き過ぎで、こゝの全體のいゝ例が、その

◎おびたゞしく　盛に多く、甚しくの意。◎ふるふ　ふるふ、震動する意。◎なごり　餘波といふほどの意。◎まどほ　間の遠いこと。◎一日まぜ　一日おきにの意。◎おほかた　おほよその意。◎四大種　四大元素といふほどの意で、地、水、火、風の四つをいふ。◎ことなる　かはつた、かくべつなの意。

あはれさの感慨を、半分以上そいでしまつてゐるのである。不用意といはなければならぬ。

かくおびたゞしくふることは、しばしにてやみにしかども、そのなごりしばしば絶えず。よの常に驚くほどの地震二三十度ふらぬ日はなし。十日、二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、おほかたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ。四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては、ことなる變をなさず。

註釋【なごり】は、そのこと（はたらき）の過ぎ去つた後、あとにのこる餘情ないふことばである。【しばしば】は、一本にはしばしはとある。どちらでも通ずる。【一日まぜ】といふのは、まぜは入れあはせること、まじへることの意であるので、それで一日おいて、たがひちがひになることを意味したのである。ちよつとかはつた用ゐ方であるが、おそらく當時の用例であつたのであらう。【三日ばかり】のばかりは、ほど、くらゐの意である。【四大種】は、一に又、四大（しだい）ともいふ。もと佛教語で、一切萬有を形成するところの四大元素であるといふので、地、水、火、風の四つをいふことばである。これはあの西洋の十七世紀に、化學者の間に信ぜられてゐた四元素説（フォーアエレメンツセオリー）（まだ諸元素の發見のない時代）と、全く同じであるのは、おもしろいことである。

文評　こゝは別にこれと、眼に立つ叙事の巧もないが、その大地震のなごりが、實記的に、そのまゝに叙してあるところはなかなかおもしろい。

『……大地に至りては、ことなる變をなさず』と、切りつばなしにしたところは、何だかもの足らぬやうな書きぶりであるが、これはこの作者の一種の筆法であつたのである。

むかし齊衡の頃かとよ、大地震ふりて、東大寺の佛のみぐし落ちなどして、いみじきことども侍りけれど、なほこの

◎齊衡　文德天皇の御代の年號。◎東大寺　南都七大寺の一。聖武

天皇の御創立。◎みぐし　御頭の意。◎いみじきこと　大へんなことといふほどの意。◎あぢきなき　せんのない、つまらないといふほどの意。◎ことのはにかけて　ことばにあらはしての意。

度には如かずとぞ。すなはち人みな、あぢきなき事をのべて、聊か心のにごりもうすらぐかと見しほどに、月日かさなり、年こえしかば、後はことのはにかけて、いひ出づる人だになし。

註釋【齊衡の頃がとよ】といふのは、文德實錄に、『齊衡二年乙亥五月庚午(二十三日)、東大寺奏言、毘盧舍那大佛頭、自落在地云々』とあつて、その年の四月から地震がして、翌年の春まで、數度に及んで、京都並に城南の家居、佛塔、多く破壞したといふことであつた。それをさしたのである。平家物語の卷十二の『大地震』の條には、『文德天皇の御宇、齊衡三年三月八日の大地震には、東大寺の佛の御ぐしなゆり落したりけるとかや』とある。【東大寺】は、いはゆる奈良の大佛を安置した寺で、この佛といふのは、すなはちその大佛である。大佛は、金銅十六丈の盧舍那佛で、聖武天皇の勅を奉じて、天平十七年八月に、奈良に安置せられ、同時に、大佛殿諸堂も造營されたのである。【あぢきなき事】といふのは、この世をあぢきなきものと思ひ取ることの意で、かゝる無常の世に、はかない慾をほしいまゝにしても、せんのないこと、つまらないことといふやうに感じたのをいうたのである。【心のにごり】といふのは、五濁(五四頁參照)の中の、煩惱濁を主としてさしてゐるのである。すなはち、貪慾、瞋恚、愚癡などの心をいうたのである。【ことのは】は、ことばといふに同じい。【人だにもなし】といふのは、せめてことばにあらはしていふ人だけもない(心には勿論思ひもせず)といふ意である。

文評『人みなあぢきなきことを述べて、いさゝか心のにごりもうすらぐかと見しほどに』といふのは、例の佛教思想からいうてゐるのであるが、その當否は別として、とにかく、目前のおそろしい慘害に驚いて、自省の念を起した人々が、時のたつに從つて、またその事を想ふものもなく、はかない名利の慾にあくせくとするといふのは、たしかに人情の常の機微を穿つたものである。平家物語の大地震のところには、

六七十、八九十のものども、世を滅するなどいふことは、當のならひなれども、さすが昨日今日とは思はざりしものをといひければ、云々。

◎世のありにくきこと　世の常住なりがたいこと、すなはち無常であることの意。◎あだなる　かりそめなの意。◎身のほど　身分ないうたのである。

と書いてゐる。實際、この眼前の慘害に打たれて、當時の人心は、かうした感慨におそはれたものに違ひなからう。

以上すべて、不思議の實例を終つたのである。そしてこの實例をより所として、次に世の無常と、して世の中の人の心とを批評して、說き出すのである。

すべて世のありにくきこと、わが身とすみかとのはかなく、あだなるさま、かくの如し。況や、所により、身のほどに隨ひて、心をなやますこと、あげて數ふべからず。

註釋【はかなく、あだなる】は、はかなしは、とりとめたことのない、かりそめなの意、あだなりも、やはりかりそめなの意で、殆ど同じ意に重れて用ゐたのである。つまり、わが身とすみかと、ともに無常のもので、少しもたよりになるものでないい、ほんのかりそめなものであるのをいふのである。【所により、身のほどに隨ひて】といふのは、この次に、そのいろいろの例を擧げていうてゐるところのもので、その住ふ場所の關係により、また身分の如何に應じて、なほ別に、その爲に

心をなやますことが多いといふのである。【あげて數ふべからず】といふのは、これを一々擧げて數へられないほどに多い（心をなやますことが）といふのである。

文評この前段まで、大火、辻風、都うつり、飢渴、地震といふやうに、つゞいて擧げてきたところの實例は、要するに、こゝのこの『すべて世のありにくきこと、わが身とすみかとのはかなく、あだなるさま、かくの如し』といふ結論を證據だてる爲の例證だつたのである。すなはち、作者のこゝに、『かくの如し』と論斷してゐるのは、その當然の徑路を經來つてのことばであつて、しつかとよくきまつてゐるのである。

『わが身とすみかと』といふのは、いふまでもなく、卷頭第一に、作者の說き出したところの、『その主人と住家と無常を爭ひ去るさま』といふ、あの朝顏の露の比喩であらはした感想に相應じてゐるのである。

更にいふと、作者はまづはじめに、世の無常の理をいひ說き、次に、これを立證する爲に、今までその實例のいちじるしいものを擧げてきて、そしてこゝに、それを合せて結んだのである。

◎おのづから　自然(しぜん)の意。◎數ならず　人かずにはひらず、すはなち出世せずにの意。◎權門　高位高官に上つて、勢權のある人をいふ。◎たのしぶにあたはず　たのしぶといふことができぬ意。◎立居　起居動作である。◎をのゝく、恐れふるふ、わなゝく意。

作者はなほこゝに、その論法を進めて、ひとりこれのみに止らず、われわれはまた、その住む所の場合と、世に處するその身分の如何によつて、別にそれ相應に心をなやますところの、いろいろの事に出あふものである、——と、かういひ說くのである。以下の數段は、まさにその上の說明、批評であるのだ。

もしおのづから身數(かず)ならずして權門(けんもん)のかたはらにをる者は、深く悅ぶことはあれども、大に樂(たのし)ぶに能はず。なげきある時も、聲をあげて泣くことなし。進退やすからず、立居(たちゐ)につけておそれをのゝく。たとへば、雀(すゞめ)の鷹(たか)の巢(す)に近づけるが如し。

註釋【權門】は、朝廷に仕へて、權勢ある臣の家をいふ、漢文の用例からきたことばである。後漢書の明帝紀に、『權門請託』とある。【深く悅ぶことはあれども】といふのは、ちよつとをかしな書き方だが（ことばのはがきき過ぎてゐるので）、たとひ深く悅ぶことがあつても、となりの權門に遠慮して、大聲を出して笑ひ樂むといふことはできないといふのである。【大に樂むにあたはず】といふのも、ちよつとかはつたいひ方である。このには關係の助詞で、その動作、狀態の歸するところ、據るところを定めて、その事物をさし示すに用ゐるものであるが、その用法の中、比較の對者をさし示すに用ゐる場合がある。（『昨日は今日に優りしを』などの例）こゝもちよつとさういふ趣、——深く悅ぶは、大に樂ぶに及ばぬといふやうな趣をこめていうたものであらうか。いづれにしても、意味は、大に樂ぶこと能はずといふもいうたものであらうか。或はまた、單に漢文の調子（？）でほどの意味である。【聲をあげて泣くことなし】といふのも、やはり、そのとなりの權門にはぢかる上からいうたのである。これは、本朝文粹の十二卷にある、慶滋保胤の池亭記に、

近二勢家一容二微身一者、雖レ破不レ得レ葺、垣雖レ壞不レ得レ築、有レ樂不レ能二大開レ口而咲一、有レ哀不レ能二高揚レ聲而哭一、進退有レ懼、心神不レ安、譬猶二鳥雀之近二鷹鸇一矣云々、

とあるのによつて書いたものであらう。『雀の鷹の巣に近づけるが如し』といふのも、その文から脱化してきたものと見える。尤も、池亭記の方も、左傳の『見ㇾ無ニ禮於其君一者上誅ㇾ之如ニ鷹鸇逐ニ鳥雀一』とあるのなどから脱化したものであらう。

文評 前の『所により、身のほどに隨ひて心をなやます』といつたのゝ例の第一で、數ならぬ身を以て、權門のかたはらに住むといふ場合をいつたのである。

ことわりはさることながら、あまりに神經質で、あまりに卑屈な心である。これでは、とても山の中へ引つこむより外に、し方がない。第一、この世のはかない形のとらはれから離れて、心の靜養にまかせようとする、この作者のその主題からしても、甚だをかしいことになる。これではつまり、形に苦んで、形にあこがれていく、――世の中の形からはなれて、遁世といふ形にあこがれていくといふことになつてしまふ。かういふべきである。要するに、この作者の遁世が、ほんとの遁世でなくて、形の上からの遁世であるのだから、そこにいろいろと遁世の理を説いても、かうしたをかしな所が出てくるのである。かういふ點になると、兼好の徒然草の感想とは、大分段が違ふ。あの兼好のいふところの、『あるかなきかに

◎すぼき　みすぼらしい意。◎僮僕　しもべである。◎ないがしろ　なるけしき　人を輕んじ侮るやうす。◎念々　時々刻々といふほどの意。◎時として　一時として、一時もといふほどの意。

門さしこめて、待つこともなくあかしくらしたる』といふやうな感想は、遂にこの作者には見ることができないのである。

但し、當時、權門の勢力が強くして、そのあたりの人々の、これに對する心づかひは、たしかにかうしたものであつたらうといふ事は、想到にかたくないところである。

もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ出で入る。妻子、僮僕のうらやめるさまを見るにも、富める家の人の、ないがしろなるけしきを聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。

註釋 【すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ出で入る】といふのは、自分のみすぼらしい姿を恥ぢて、何かにつけ隣に追從をいつて出で入るといふのである。出で入るは、自分の家を出で入るにつけて、始終さうだといふのである。すぼしは、すぼんでほそいにいふことばで、轉じて、みすぼらしい意にいふのである。これも、前

に引いた池亭記に、

南院貧、北院富、富者未二必有一レ德、貧者亦猶有一レ恥、

とあるのを、思ひよせて書いたのであらう。【僮僕】の僮は奴で、通じて下べの意にいふことばである。これは本によつて、妻子、僮僕（つぶれは奴、下べの意）とよませてゐるのがあるが、妻子、僮僕とよんだものであらう。これは自分の妻子僮僕が、隣の人の上をうらやんでゐる意である。【ないがしろなるけしき】は、なないがしろなるは、なきが如くに、輕んじ侮つてる意、けしきはもと顏色をいひ、そしてやうすにいふことばである。すなはち、人をも世をも輕んじ侮つてふるまうてゐるやうすである。【見るにも、聞くにも】といふのは、對にしていうたので、特にそこに、見ると聞くとを區別したのではない。【念々】といふのは、佛教語である。で、一念一念と、その前後の相續し、連絡することが、極めて速で、やすみない意にいふことばである。

文評 前段について、所により、身のほどに隨ひて、心をなやますといふ、第二の例で、自分の貧しき身を以て、富める人の隣に住むといふ場合の心情をといたので

◎炎上す　火災で燒けるにいふことば。◎邊地　かたよつた、へんぢ

ある。これも道理はさることながら、あまりに形にかゝはり過ぎた感想である。但し、『見るにも、……聞くにも、心念々に動きて、時としてやすからず』といふ、文章の句法は、ちよつと巧に書きなされてゐる。

『朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ出で入る、妻子僮僕、……』といふ句を、『……へつらひつゝ出で入る妻子、僮僕……』と、つゞけて讀ませてゐる本があ る。意味は、或はその方がいゝかも知れぬが、下の『富める家の人の……』といふ句に對してゐる調子では、やはり、『出で入る』ときれるのであらうと思はれる。つまり、續けてよんでゐるのは、『富める家の人の』の人のを重く見過ぎて、前をそれに合せて、『出で入る妻子、僮僕の』と對させようとしたのであらうが、どうも、調子がさうでなささうにおもはれる。尤もそれでもとけないことはないので、文章のつゞきも、さうしたとて、大してわるくなるといふのでもない。

もし狹き地に居れば、近く炎上する時、その害を遁るゝことなし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難は

びな所。◎往反　ゆきかへりである。すなはち、都へのゆきかへりである。◎わづらひなやむことで、不便といふほどの意。◎はなれがたし　まぬかれがたいといふほどの意。

なれがたし。

註釋【狹き地に】といふのは、これも池亭記に、

高屋比ㇾ門連ㇾ堂、少屋隔ㇾ壁接ㇾ簷、東隣有ㇾ火災、西隣不ㇾ免ㇾ餘火、

とあるのから思ひついたのであらう。【邊地】といふのは、田舍の邊鄙の地をいうたのではなく、都の郭外のかたよつた、へんぴな所をいうたのである。【わづらひ】は、事のさはり滯つて、わづらひなやむことにいふことばで、都への出はひりに不便なのをいうたのである。

文評　前につゞいての例である。こゝの一章は、前から註釋に引いた通り、多く池亭記によつて、それで思ひついて書いたものであらう。それで『もし』、『もし』と、一段一段、そのいろいろの場合を想像して、その説明を重ねていく所は、こまかいといへばいへるが、しかしこゝに至つては、あまりにかゝはり過ぎてるといはなければならぬ。おもふに、作者も、これによつて、自分のその主張を進めようといふのよりは、むしろそのいろいろの場合を、こまかくいひ説くといふ上に、その巧を求めてゐるものであらう。しからざれば、何ぞしかく、求めて自から世

◎ひとり身なる　志を得ないで、孤立してゐるのをいうたのである。◎切なり　その心の深くあるにいふことば。◎他の　人のの意。◎やつこ　下べといふに同じ。◎はごくめば　はごくむは、養ふ意から、人を憐み助けるにいうたのである。◎狂へる　狂氣してゐる意。◎しめ　領

を狹うするの甚しきやと、いひたくなるのである。

文章の調子からいふと、『もし』で起してきた、前の二つの例を受けて、こゝでは短く、切迫して、『もし』を重ねて、それで收めたところが、ちよつと巧に出てゐる。そして更に、次の段の切迫した、疊句法の修辭に移るところが、よく整つてゐるのである。

勢あるものは貪慾深く、ひとり身なるものは、人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人をたのめば、身、他のやつことなり、人をはごくめば、心、恩愛につかはる。世にしたがへば、身くるし。又したがはねば、狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしもこの身をやどし、玉ゆらも心をなぐさむべき。

註釋【勢あるもの】といふのは、高位高官に上つて、時を得て權勢をふるうてゐるも

ずる意で、居住する意にいふことば。◎玉ゆらも　しばしもの意。

のをいうたのである。【貪慾深く】といふのは、權勢が加れば加るほど、名利の慾のふかくなるのをいうたのである。【ひとり身なる】といふのは、世にあはず、世にはぐれて、よるべもなく孤立してゐるのをいうたのである。【寶あればおそれ多く】というたのは、盜賊の心配などよりはじめて、その寶を失ひはすまいかとの恐れが多いといふのである。【貧しければなげき切なり】といふのは、本朝文粹の卷六にある、源順が奏狀に、『年老家貧、愁深歎切、云々』といふのをおもひよせて書いたのであらうと、古註にいうてゐるが、さうらしい。【人をたのめば、身、他のやつことなり、人をはごくめば、心、恩愛につかはる】といふのは、莊子に、『有レ人者累、見レ有二於人一者憂』とあるのを思ひよせて書いたのであらうと、古註にいうてゐるが、これは必ずしもさうではあるまい。【人をはごくめば、心、恩愛につかはる】といふのは、あとにも出てくる感想で、蓋し作者の得意な、一つの考であつたのである。恩愛といふのは、しまひには、主として親子の情にいふことばになつてしまつたが、もと佛教語で、親子、夫婦、兄弟、家族等に對する愛情、恩によつて引かれる愛著の心をいふことばである。で、人を憐み、人を愛し、

人をたすけると、つひその愛著の念に囚れて、それで心をなやますことになるといふ意にいうたのである。【世にしたがへば、身くるし。又したがはねば、狂へるに似たり】といふのは、砂石集卷五にある、行基菩薩遺誡の文の中に、

浄土にあらざれば、心にかなふ所なく、聖衆にあらざれば、おもふにしたがふ友なし。世にしたがへば望あるに似たり。俗にそむけば狂人の如し。あなうの世の中や、いづれの所にかこの身をかくさむ。云々。

とあるのを、思ひよせて書いたものであらう。【玉ゆら】は、ものに著けた玉のゆれて、ふれ合ふ音のかすかであるのから、かすかにといふ意に用ゐられることばであるが、轉じて、しばしばかりといふ意に用ゐられるのである。こゝもその意である。

文評　前段を受けて、更にそのさまざまの場合を考へ、そのいづれもみな、たのむに足らず、身をおくによしなきをといて、そしてその最後の、『いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしもこの身をやどし、玉ゆらも心をなぐさむべき』といふ主題に到達したのである。これは、修辭にいはゆる設疑法の修辭で、この

大きな、最後の疑問に、讀者を導き來つて、讀者をしてその解決を得るに思ひまどはしめ、さてそこに、作者が遁世の大眼目を出して、はじめて讀者に首肯せしめようといふのである。かうして、この書の論叙法は、いかにもその整然なるものがあるのである。たゞ惜しいかな、これが文章の形の上の整頓に止るのは、蓋し作者の遁世が、そのまことの爲のものでないからである。

こゝでは、その最後の設疑法の主題にはひつたとこが、いかにもよく出てゐる。但しそこに到達せしめてゐる、折り重れての疊句法の例も、前段のやうなくどくどしいものでなくていゝ。蓋しそれは、前段には、羨むがはの例ばかりで、とかくよまひごとに聞えたのが、こゝでは、得意不得意のその兩面を一つにして、共に遂にたのむに足らぬのを併說してゐるからであらう。そしてその說の中では、『人なはごくめば、心、恩愛につかはる』といふのが、一番穿つた、こまやかな、いゝ例である。註釋にもいつた通り、この作者の獨特の感想の、一つのおもなものであつたのである。

さて、これから以下、この設疑に向つて、作者みづからの經歷を述べて、その方

◎父方の祖母の家　その住宅を傳へたといふのである。◎緣かけ　失意になつた意、なほ下の註釋にとく。◎しのぶかたがたしげかりしかば　世をしのぶことが多かつたのでの意。なほ下にとく。◎あととむることを得ずして　その家にとゞまることができないでの意。◎わが心と　わが心からの意。◎庵　かりやである。

丈の庵の本文に叙し入らうといふのである。

わが身、父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後、緣かけ身衰へて、しのぶかたがたしげかりしかば、遂にあととむることを得ずして、三十あまりにして、更にわが心と、一つの庵をむすぶ。

註釋【わが身】は、作者が自分の身の上をいうたのである。【父方の祖母】といふのは、作者の父は長繼であるが、祖母の傳はわからぬ。流水抄に、二代后多子の御方の女房であつた人だらうかといひ、作者部類に、この作者が、應保元年に中宮叙爵とあるのは、作者のちやうど二十歳にならぬ位の時であるから、この祖母の功勞などの賞であつたのかもしれぬというてる。【家を傳へて】といふのは、家名をついだといふのではなく、その祖母の宅地を傳へ領して、住んでゐたといふのだ。【緣かけ身衰へて】といふのは、世にはぐれて失意になつた意で、作者が賀茂の社務職を望んだが、許されないで、退隱したのをいうたのであらう。累代、賀茂の社務

職であつたといふから、ことに緣かけというたのだらう。【しのぶかたがたしげがりしがば】といふのは、續世繼や、無名抄に出てゐて、金葉集の雜部に收めてある、『家を人にはなちてたつとて、柱に書きつけ侍る』といふことばがきのある、周防内侍の、『住みわびてわれさへのきのしのぶ草、しのぶかたがたしげき宿かな』といふ歌のことばを取つたのである。たゞし、この歌の意は、われさへ退くといふ意を、軒のにいひかけて、そして今家を人に讓つて、立ちのくに當つて、久しく住みなれた家であるから、しのぶことの多くあるやどだというたのであるが、こゝは、世をしのぶことが多いというて、その生計の心のまゝならぬ意にいひなしたのである。【遂にあとをとむることを得ずして】といふのは、前の周防内侍の歌のことばを轉用してあるのを見ると、やはり住みきれないで、人に賣り渡しなどしたものと思へる。【わが心と】といふのは、わが心からといふ意である。駟説に『得心して』といふ意にといてゐるのは、少しいひ過ぎた傾はあるが、まづざつとさういふ意でゐる。【いほり】は、いほに同じい（いほを作る意のいほるといふ動詞からできた名詞）杜佑通典に、『結二草木一爲レ廬皆曰レ庵』といひ、釋氏要覽に、『草爲二圓座一曰レ庵、西天僧俗修行多居レ庵』というてゐるが、その庵と同じで、簡略にむすびなした、草ぶきのかりやである。むすぶは、構へ結んで作る（庵を）意である。

文評　これから、作者は、自分の身の上を叙し、その外山の方丈の庵にはひるまでの徑路をとくのである。

こゝには、多く含蓄の多いことばづかひがしてある。そしてみんな、住む、むすぶといふやうに、直現法で、現在に書いてある。してそれが、例の簡明な句法と相伴うて、一種のいゝ趣を出してゐる。何となく讀者の感興を引くものがある。周防内侍の故事、歌を、そのとりあはせとして、その背景にしてゐるのも、いゝ用意である。

それから、何でもないことである。『久しくかの所に住む』の、そのかの所といふのが、いかにも簡明で、しかも一分の餘情をたゝへてゐる。

これをありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、はかばかしくは屋を造るに及ばず。

◎ありしすまひ　あつたすまひ、すなはち祖母から傳へた家であ

る。◎なずらふるにくらべるにの意。◎はかばかしくは　きはきはしくで、ちやんとといふほどの意。◎築地　前にあつた、れりべいである。◎つけり　築けりといふのだ。◎たつきなし　便なしの意。◎車やどり　門の側にて、車を入れる所。◎河原　賀茂河原である。◎白波のおそれ　盗賊のおそれである。

僅に築地をつけりといへども門たつるにたつきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪降り、風吹くごとに危からずしもあらず。所は河原近ければ、水の難ふかく、白波のおそれもさわがし。

註釋【はかばかしくは屋を作るに及ばず】といふのは、たゞ居宅ばかりで、客屋、部屋、長屋、物置、馬屋などまで、ちやんと作ることをしないといふのである。はかばかしくはのはは、なかしい。後世の文章にはまゝある例だが、古文にはかういふ用ゐ方はない。はかばかしくでいゝのである。前にもかういふはが用ゐてあつた。この作者のくせと見える。概して、この作者は、助詞の用法が正確でなかつた。【門たつるにたつきなし】は、たつきは、たより、よるべの意で、門を立てるのに、もう資力がないといふ意にいうたものであらう。【雪降り、風吹くごとに、危からずしもあらず】といふのは、竹を柱として、形ばかりに造りなりした車やどりであるから、雪が降つたり、風が吹いたりするごとに、あやふいといふのである。しもは、俗に強調といふ、節定の助詞の指定する意の鋭いものであるが、時にごく輕く、語句に抑揚を添へ、その音調を整へる爲に用ゐられることがある。こゝもその例である(後には轉じて、消極的の意趣をあらはすものとなつたもの。)【白波】は、袖中抄に、『白波は、昔より盗人のことをいへり云々』とある。そして後漢靈帝紀に、張角、郭泰などが、西河の白波谷といふ所に起つたので、これを白波賊というたのから出來たことばであるというてゐるのだが、それは(その語原は)どうかわからぬが、とにかく盗賊にいふことばの慣例である。こゝは、それをまた、水の緣語に用ゐなしてゐるのである。

文評　そのはじめの庵の、いかにも疎末なものであつたのをいうてゐるのである。疎末な、簡略なさまは、さることであるが、しかし、何だかちとよまひごとめいて聞える。『門たつるたつきなし』のあたりなどは、同じ事でも、もう少しさつぱり書いてほしかつた。

こゝに、ちよつとおもしろいことが見える。一つは、その車やどりといふことで、かうした庵めくすまひにあつても、なほ車やどりを要としたと見えるのである。

◎あらぬ世を念じ過しつゝ　心にもあらぬ世を堪へ忍んで、年を過しつゝといふのである。◎折々のたがひめに　不慮の災難や、志業の齟齬したのをさしたのである。◎短き運　人生の、はかない短い運命である。◎家を出で　出家の意をいうたのである。◎よすがもなく　よりどころ、より所の意。◎執　執著である。◎空しく大原山の雲に　下の註釋にとく。

すなはち、當時はかうした境涯にあつても、車に乘つてゐたといふことが窺はれる。一つはまた、その白波のおそれ、すなはち盜賊のおそれといふことである。これは前にもあつたが、作者はひどくそれを氣にかけてゐるやうである。これはちよつと見ると、いかにも作者の盜賊ぎらひ（誰もすきなものはないが）であつたといふやうにも見えるが、しかし當時、さういふ物騷な世の中で、盜賊のしきりに横行したといふ爲であつたのであらう。この二つは、當時の風俗を窺ふのに、おもしろい材料であると思ふ。

すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやませることは、三十餘年なり。その間、折々のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめむ。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をか經ぬる。

註釋【すべて】といふのは、その三十餘歲にして、もとのすまひを出て、庵を結んだ後ばかりでなく、その以前にまで溯つて、すべてといふたのだ。つまり、身の不遇をなげき、不平の念を起しなどそれで、すべてといふたのだ。つまり、身の不遇をなげき、不平の念を起しなどして、心をなやましたことが三十餘年になるといふのである。【おのづから短き運命の十餘年なり】とあるのを見れば、二十歲頃からの事をかけていうてるのである。【おのづから短き運命をさとりぬ】といふのは、その間に、いろいろの世變、心のなやみによつて、いつとなく、自然に、人生は短い運命である、はかないものである、あぢきないものであるといふことを、悟了したといふのである。【家を出で世をそむけり】といふのは、出家遁世した意をあらはしたのである。出家（しゆつけ）は、佛教語で、煩惱の塵宇を離れて、閑曠なる所に出て、善法を修するといふ意であるが、こゝはそれに、家を出る、すなはち、その庵を出てしまふといふ意をこめてゐるのである。世をそむけりといふのは、世にそむけりといふのと同じやうな意であるが、求めて世にそむくといふ意が、一層つよいのである（にとをとの趣の相違で）。

【執】といふのは、佛教語で、執著（しふちやく）と同じく、その事に深く思をかけてかゝはることの意だ。で、この世に未練はないといふのである。『空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をか經ぬる】といふのは、一本には、『空しく大原山の雲に臥して、五かへりの春秋をかへぬる』とあるが、前の方がいゝやうである。さてそこで、この句の意味がちよつとわかりにくゝ、諸註の解が、すべておぼろげになつてゐる。ひとり抄だけは、

このことば、發心せしより、方丈をつくるまでありし所を擧げたり。十年、大原にありと見えたり。空しくといへることば、心をつくべし。

と解いてゐるが、正解と思ふ。かうして家を出で、世をそむいたものゝ、なほ大原山にぐずぐずと年を送つて、あゝいくとせをか過してしまつたらうと、かういふ感慨をあらはしてゐるのである。空しくといふ副詞が、それで適切にきくのである。そして、すぐ次に、【六十の露消えがてに及びて】とあるから、こゝの五十の春を迎へてといふのから數へれば、抄の解いてゐるやうに、かれこれ十年の間を、出家してしまつたものゝ、空しく大原で過したといふことになるのである。

文評 こゝはいゝ調子である。『すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやせる事は三十餘年なり』と叙し起して、『おのづから短き運をさとりぬ』といひ、『家を出で、世をそむけり』と結ぶところまで、又、その心情をといて、『……捨てがたきよすがもなし』、『……何につけてか執をとゞめむ』と斷ずるところまで、すべて感慨の切なる趣が、いかにもその高調に達してゐる。そしてその最後の、『空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をか經ぬる』に至つて、更に一段の感慨の高調をあらはしてゐるのである。

作者の遁世の動機は、官を望んで得なかつた不平にあるとすれば、もとより大したものではない。又、遁世しての後の、いはゆる方丈の庵にしての朝夕（あさゆふ）も、さうゆかしいものではない。まさにそのさとりきれないあとが見えてゐる。しかし、遁世したといふことは事實である。既に事實であるとすれば、たとひ動機がどうであらうとも、その心情がどうであらうとも、そこにその事實であるといふことそれ自身の、その〇ゆゝしい權威があるのである。作者自身に取つて、またその無限の感慨があつたらうではないか。その權威とその感慨と、それがこゝに、この一

段において、その高潮に達した趣を、われわれ讀者に見せてゐるのである。われわれは、この趣を珍重しないわけにはいかないのである。

人生は事實である、空理ではない。ある人が、ある考、ある感想を、さながら事實にあらはしたといふことは、まさに一つの大きな事がらである。到底、他人のひやゝかなる談理を、不用意にこの上に加ふることを許すべきではない。われわれが方丈記を讀んで、方丈記にその生命を認めもし、興味を引かれもするといふのは、まさにこゝにあるのだ。して自分は、方丈の庵の條の、ゆかしげな叙事の上においてよりも、むしろこゝのこの一節の上に、その最も深い作者の感慨を認めるのである。

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりをむすべることあり。いはゞ狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をいとなむが如し。これを中ごろのすみかになずらふれば、また百分が一にだも及ばず。

◎消えがたに　餘生のいくばくもないのないうたのである。◎末葉のやどり　晩年の宿の意。◎いとなむ　作りこしらへる意。◎なずらふれば　くらべれば の意。

註釋【六十の露消えがたに及びて】といふのは、古文古歌の上にふくあるところの、人の命のはかなさを露にたとへて、そしてもう六十で、餘命のいくばくもないといふのを、露の緣語で、もう消える頃になつてといつたのである。ある註書で、これを六十の露といふのにかゝはつて、六十といふ年のまさにつきようとする頃、すなはち五十七八の頃をいつたのだといつてゐるが、さうではない。露の命のもう六十になつて、消えがたであるといふ意にいひなしたのである。【末葉のやどり】は、末葉にやどる露の意で、その最も消えやすい、はかないさまを比喩にし、晩年のやどりの意にしたのである。【むすぶ】は、庵をむすぶ意を、露のむすぶにいひかけたのである。風雅集に、寂然法師の『稻妻の光のほどか秋の田の、なびく末葉の露の命を』といふ歌がある。又、詞花集に、增基法師の『朝な朝な鹿のしがらむ萩が枝の、末葉の露のありがたき世や』といふ歌もある。作者もこれらと同じいひあらはし方をしてゐるのである。【狩人の一夜の宿】といふのは、狩人が山中などに狩りくらして、そこに一夜のかりの宿ないとなむといふ意にいつたのであらう。尤もこれは、保胤の池亭記に、『亦猶行人之造旅宿、老蠶之成獨繭』

矣、其住(トドマルコト)幾時乎、云々』とあるのから脱化して來たものであらうから、狩人は旅人(たびびと)の傳寫の誤であらうといふ説があるが、或はさうかもしれぬ。但し狩人としてもとける。すれば、その池亭記の行人とあるのを、かへて用ゐたものと見るべきのである。【中頃のすみか】といふのは、前の『三十あまりにして、』『更にわが心と、一つの庵をむすぶ』といつたのをさしてゐるのである。【百分が一】は、勿論、誇張していうたのだ。

文評 さてこれより、いよいよ方丈の庵の本文にはひるのである。但し、あとに又、『今日野山の奥に跡をかくして後』と、更に叙し起してるのを見ると、この庵が、作者の殘年を託した、その最後のすまひではないらしい。恐らく、この方丈の庵を、更に日野山に移したものであらう。但しそれは、なほあとの日野山のところで説明することにしよう。

こゝは、全段、殆どすべて比喩の修辞で書いてゐる。してその比喩は、別に新しいものでもないが、しかしよく作者のこの境遇に當つてゐるので、さすがに一種の感興を引かせるものがある。ことに『いはゞ狩人の……』の對句の二句がきい

◎とかくいふほどにとかくするほどにといふやうな意、とやかくしてゐるうちにといふのである。◎かたぶきかたむきに同じい、餘命のだんだんにつきるやうになる意。◎せばし せましに同じ

てゐる(池亭記から脱化してきたものではあるが。)『百分が一にだも及ばず』も、その誇張がわざとらしくなく、同じく一種の趣をあらはし出してゐるのである。こゝもまた、すべて直現法の修辞によつて、現在格に書きなしてゐる。直現法の修辞は、叙事文には、最も普通のものであつて、特に取り立てゝいふべきではないが、しかしそれが、この作者の例の簡明直截な句法と、いかにもよく調和してゐるのである。直現法の修辞は、この書の上において、たしかにその一つの大きな成功をしてゐるものといはなければならぬ。

とかくいふほどに、齢(よはひ)は年々にかたぶき、すみかは折々(をり)にせばし。その家のありさま、世の常にも似ず。廣さは僅に方丈、高さは七尺が内(ツミウチ)なり。所をおもひ定めざるがゆゑに、地をしめて造らず。土居(ツチヰ)を組み、うちおほひを葺きて、つぎめごとにかけがねを掛けたり。もし心にかなはぬことあら

い。◎方丈　一丈四方の意、下の註釋にとく。◎七尺が内　七尺以内、七尺にも足らぬといふのだ。◎地をしめて　地を定めての意。◎土居　周圍の壁ないふ。◎うちおほひ　屋根をいうたのである。◎かけがれ　掛金である。◎安く　容易にといふほどの意。◎わづらひ　面倒といふほどの意。◎二兩　車二臺ないうたのである。◎車の力をむくゆる　車の勞力に酬ゆる、車の勞力に對して車代を拂ふのをいうたのである。◎更に　ちつともの意。◎用途　金錢の

ば、安く外に移さむが爲なり。その改め造る時、いくばくのわづらひかある。積む所、わづかに二兩なり。車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらず。

【註釋】【齡は年々にかたぶき】といふのは、夕日の西の山の端にかたむくやうに、餘命のもういくらもないといふほどになるのをいふのである。增鏡の序にも、『あはれにも山のは近く傾きぬめる日かげかな。わが身の上の心ちこそすれ』とあるが、よくさういふ意に用ゐられる用例である。【すみかは折々にぜばし】といふのは、前の句と對にして出したもので、さう深い意味はない。たゞ折につけて、そのせまいのを感ずるといふのであらう。ある註書に、はじめは大家であつたが、次第次第に小家となつたといふ意にといてゐるのはをかしい。ぜばしといふのに、ひどくかゝはつた爲に、つひ折々を曲解することになつたのであらう。これは對にする爲に、ごく輕くいうてるので、別に深い意味はないのだ。【方丈】は、一丈四方の室の義である、もと維摩居士が方一丈のせまい室に起居してゐたといふ故事

用ゐどころの意にいうたのであらう。

から起つたことばである。維摩居士は（維摩は梵語で、淨名と譯す。故に又淨名居士ともいふ）、釋迦と同時代の人で、家にあつて菩薩の道を行じたものだといふ。その事蹟は維摩經に委しく出てゐる。で、後には、このことばが寺院の長老の居所の稱にいはれるやうになつてしまつたのだ。そしてきちんと一丈四方でなくとも、狹い家には、さういふ例になつた。作者は、この書の卷末に、『住家はすなはち、淨名居士（維摩居士のこと）の跡をけがせりといへども』というてゐるから、まさにそのあとを學んで作つたといふのである。從つて、これがこの書名に冠せられるやうになつたのである。【所を思ひ定めざるが故に】といふのは、佛敎の一所不住の意を寓してゐるのである。【地をしめて】といふのは、昔は家を建てるのには、地を卜して、吉凶をうらなうて定めたものであるから、かういうたのである。【土居】は、もとつちぬとよんだものである。こゝもさうよむのかもしれぬが、古註がみなどゐとよませてゐるから、それに從つておいたのである。家のめぐりの土の垣である。但しこゝのは、家そのものゝ外面の壁であらう。【組み】といふのは、まづ骨を組んで、さて壁をぬるから、そのあらつくりのさまをあらは

していうたものであらう。【うちおぼひ】も、そまつな家根であるから、特にさういうたのだ。【つぎめごとに】といふのは、家の材木を構へ成すのに、釘でうちつけなどしないで、かきがねでとめておくといふのだ。【わづらひ】といふのは、面倒といふ意であるが、いくらの入費がいらうや、いりはせぬといふ意をこめてあるらしい。

文評 前段からつゞけて來て、こゝにその方丈の室の概況をといたのである。

筆はわりあひにこまかく、よくその方丈の室のあらましをあらはし出してゐる。しかし、趣の上からいふと、その筆のこまかいのが、却つて累をなしてゐる。『廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり』といふだけでも、既にもうそのこまか過ぎるのを感ずる。それが、『つぎめごとにかけがねをかけたり』といふに至つては、用意の周到はさる事ながら、こまかさもまた甚しいといはなければならぬ。『所を思ひ定めざる故に』というてゐる、一所不住の世捨人の心としては、いかにもふさはしくない。してそれが更に、『改め造る時、いくばくのわづらひかある。積もところ僅に二兩なり。車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらず』に至つては、

殆ど沙汰の限である。この際に當つて、――今作者が、すべてのうるさい形の俗世間から脱出して、世外の草庵に行ひすますといふ際に當つて、何も損得勘定をしてゐる要はなからうではないか。

自分は、この書のこの一段を讀んで、これをあの兼好法師が、徒然草の第十一段に、兼好が平生心におもひ浮べてゐた、その殆ど理想的ともいふべき、山里の一草庵を見つけたのを叙したところに、たゞ單に、『遙なる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり』とばかり書いてゐるのにくらべ見て、この二人者の性格、趣味の相違の、著しいのに想ひ到らざるを得ないのである。

「一體、作者は、ものごとにひどくきちんとしてゐた人であると見える。そのあとは、全篇隨所にこれを窺ふことができる。ことに日野山の閑居の、この次の條に、その著しいあとが見えてゐる。しかし、これは單に、作者のさういふ個性からばかりでなく、たしかに作者の遁世が、その本心からのものでなつた爲であらう。なほ、ちよつとしたことであるが、こゝの結末の、『更に他の用途いらず』といふ句法は、大分拙である。作者の筆ににやはぬものである。何だが、結がついてゐ

◎日野山　山城國宇治郡木幡山の東北に當つてゐる。◎日がくし　ひさしである。◎すのこ　竹の縁がはである。◎闕伽棚　佛に供へる水などを載せておく、佛前の棚。◎安置し　安らかにすゑおく意。◎眉間　阿彌陀佛の眉間である。◎帳のとびら　とびらは開き戸である。　で、帳のさがつてゐるとびらの意にいうたのだ。なほ、下にとく。◎普賢不動　ともに下にとく。◎皮籠　皮で包んでこしらへた匣である。◎三

ないやうな感じがする。

いま日野山の奥にあとをかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、中には西の垣に添へて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉間の光とす。かの帳のとびらに、普賢ならびに不動の像をかけたり。北の障子の上に小さき棚をかまへて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち、和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。

【注釋】【いま日野山の奥にあとをかくして後】といふのを、多くの註書は、たゞぼんやりと前段につゞけて、前の方丈の庵のそれと同じものゝやうに見なしてゐるが、それはなかしい。いまといふことばが特に用ゐてあるし、してあとのそのすまひのさまの記事も、前段とは違つてゐる。それで、ひとり、抄には、

四合　合は個といふに同じい。◎和歌管絃　和歌、管絃に關する書。管絃は笛と琴とで音樂にいふことば。◎往生要集　佛書の名、下にとく。◎抄物　ぬきがきしたもの。

ある人のいはく、『いま日野山の奥にとあるを以て見れば、この日野山にて、はじめて方丈をつくるとは見えず。よそにて作りたるか。さて後、かの日の山に移して、この山にては、南にかりの日がくしなどをしたると見えたり』といへり。いさゝかさもあるべし。

といふことわりがきをしてゐる。實際、この書き方では、ふくはわからないが、とにかく前の方丈の庵とは、別のやうである。で、抄の引いてる、そのある人の説のやうに、前の方丈の庵を、どこか別の地に建てゝゐたのを、最後にこの日野山に移して（作者の前段にいふところの、ごく移すに容易な家であつたといふから）そして少し改造などしたものと、がう見るべきものであらう。【あとをかくして】といふのは、全く世の中から隱退してしまつたのをいうたのである。【竹の簀子をしき】といふのは、すのこは和名抄に『床上薄竹名也』とあるので、もと縁の上に敷いたものであらう。それがいつか竹の縁がはをいふやうになつたのである。それでこゝもしきというたのだ。但し意味は竹の縁がはをこしらへたといふ意である。【闕伽棚】は、闕伽（あか――音をかりてうつしたので、字には何の意義もない）

は梵語で、水の意である。（今インド、ヨーロッパ語に殘つてゐるアクアがそれである）佛教語に用ゐられる故に、清淨水、香水などと譯してある。そして重複のやうであるが。佛に奉る水を閼伽の水（あかのみづ）といふのである。その閼伽の水を容れた具を載せる爲に、佛前に構へてある棚を閼伽棚といふのだ。【阿彌陀】は、阿彌陀由須（あみだゆす）、もしくは阿彌陀婆（あみだば）の略で、無量光明（むりやうくわうみやう）と譯する。でまた、無量壽佛とも、無量光佛とも稱する。四十八の願を立て、西方に極樂淨土を建てゝその教主となり、慈悲の極めて深い佛だといはれてゐる。眞宗、淨土宗では、特にこれを本尊として歸仰し、その他、日蓮宗を除くの外は、すべての佛教の宗派にわたつて、あまねく信仰せられてゐる佛である。【畫像】は畫にかいた像である。【眉間の光】は、佛の三十二相中の眉間白毫相といふもので、そこから光を放つてゐるので、その光明を眉間の光といふのだといふ。そして佛教を信ずるものは、西方に淨土があるといふので、ひどく落日の光を珍重したものである。夫木集の源俊頼の歌に、『いろいろの雲のはたてをかざりにて、入日や彌陀の光なるらむ』とあるなど、その一例である。で、こゝも落日の光が、さしこんできて、その彌陀の畫像

にうつるのを、眉間の白毫の光によそへて見るといふ意で、『落日をうけて』といたのだ。更にいへば、その畫像を、落日の光のさしこむ所に安置したといふのである。【帳のとぴら】といふのは、ちよつとわかりにくい書き方であるが、この帳は、すなはち斗帳（とちやう）で、神佛の龕の上などに垂れるとばりである。それで、そこに佛龕があつて、それに斗帳が下つてゐる、その下のとぴらに、普賢、不動の像がかけてあるといふのである。つまり、帳のさがつてゐるとぴらといふ意にいうたのである。【普賢】は普賢菩薩で、諸菩薩中の最も勝れたものといふ意で、さう名づけられたのだといふ。阿彌陀佛が因位の無淨念王であつた時の第八子であつて、その第三子である文殊菩薩と共に、悲と智、定と慧、行と證との一雙一類の代表者とされてゐる。この菩薩は、よく白象に騎るところが圖せられゐるが、それは文殊菩薩が獅子に乘つてゐるのに對して、この菩薩の定力がよく諸行を攝取すること、まさに白象の柔軟、しかもよく事に耐へるが如くなるのを表して、この菩薩の德を表示したものだといふ。【不動】は不動尊ともいふ。不動明王のことである。大日如來の化身で、密教に祭る五大明王（不動、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉）の

中央尊である。その形相は青黒で、大忿怒の相を大火焔中に現じ、磐石座上に住して、右手に利劍を持ち、左手に羂索を執つてゐる。外道、悪魔を降伏する尊體だといふ。蓋し大火焔は、一切の煩惱を焼く大悲德を標し、利劍は、貪慾、瞋恚、愚癡の三毒を害する智慧を標し、羂索は、難伏者を繫縛する三昧を標してゐるのだといふ。

皮籠を【三四合】と數へるのは、蓋のある器であるからだといふ。【往生要集】は、比叡山横川、慧心院の源信(慧心僧都)の著した書で、諸經論の要文を集めて、念佛往生の教義を説いたものである。厭離穢土、欣求淨土、極樂證據、正修念佛、助念方法、別時念佛、念佛利益、念佛證據、往生諸業、問答料簡の十門に分つてある。

文評 これよりいよいよ、作者が最後のやどりである、日野山の閑居の叙事にはひつて、その閑居のさまと、その閑居の氣分とをとくのである。して文章もまた、ここに至つて、最もその感興をつくしてゐるのである。こゝはその發端で、閑居のすまひの家づくりのさまを述べてゐるところで、さまでいふほどのこともないが、さすがに叙法が整然としてゐる。

前にもいうた通り、作者はひどくきちんとして、ものを整頓することのこまかい

◎一張　漢文の用例から來たので、琴にはよく、一張といふやうに數へいふのである。◎折りごと　用ゐない時には、折つて疊んでお

人であつたと見える。その家の内も調度の排置の工合など、いかにもきちんとして、こまかいものである。かういふ遁世の閑居にはふさはしくないと思はれるまでに、一々、その排置を氣にしてゐるあとが、よく見えてゐる。まるで、普請ずきの人か何かが、新宅の趣向や、調度の排置の配合に、そのすきをこらしてゐるやうな趣がある。この點においては、前段の方丈の庵の叙事と同じ趣である。しかし、こゝには前段ほどのいやみがない。われわれはこれを讀んで、さう前段におけるほどに、感興をそがれないのである。そして文章の調子も、またきつぱりしてゐるのである。

これは、まだこゝで切れないで、次の段へ、そのまゝつゞいてゐるのである。(便宜上、かりにこゝで切つたが)

傍に、筝、琵琶、おのおの一張を立つ。いはゆる折りごと、つぎ琵琶これなり。東にそへて、厳のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出

くやうになつてること。このことは、箏のことで十三絃である。◎つぎ琵琶　これも用ゐる時は、つぎあはすやうになつてる琵琶である。◎蕨のほどろ　蕨の穗の長くのびて、老けたもの。◎つかなみ　藁をあんで作つた敷物。◎文机　ふみづくゑの略で、書物を載せる机である。◎すびつ　炭櫃の略であらうといふ。角な火鉢をいふ。◎柴　雜木をいふ稱。◎くぶる　口語にいふくべるである。◎よすが　よるべ、たよりの意。すなはち、柴をたく

せり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばらなるひめ垣を圍ひて園とす。すなはちもろもろの藥草を植ゑたり。かりの庵のありさま、かくの如し。

註釋【一張】といふのは、昭明太子の陶潛傳に、『蓄二無絃琴一張一』とあり、白氏文集の廬山草堂記にも、『漆琴一張』などあつて、漢文の用例で、琴を一つ二つと數へるにいふことばである。【蕨のほどろ】は、蕨の穗の長くなつて、そして老けてしまつたもので、やはらかであるから、それを敷いたのであらう。山家集に、西行の、『なほざりに燒き捨てし野のさ蕨は、折る人なくてほどろとやなる』といふ歌がある。【つかなみ】は、農家で藁藉といふ敷物のことだといふ。歌枕に、田上の問答の歌だといふて、源俊重、『つかなみの上に夜な夜なかり寢して、黒津の里になれにけるかな』、源俊頼、『つかなみの上は黒津になるれども、下はねよきしくものぞなき』といふ歌が出てゐる。【すびつ】は、今いふ圍爐裏だと、古註にといふのものといふのである。◎少地　すこしばかりの地である。◎しめ　定めての意。◎あばらなる　まばらである意。◎ひめ垣　ひくく、ちひさい垣。

てゐるが、さうではあるまい。枕草紙などに、すべて角火鉢をすびつといひ、丸火針を火桶といふてゐる用例によると、やはり角な火鉢をいうたのであらう。

文評　前段につゞいての、そのかりの庵のすまひのさまを叙したのである。例によつて、そのすまひの趣向と、その叙し方とが、なかなかにこまかい。いかにもきちんとした構へ方である。その簡素な、隱遁の趣には、おのづから一種の感興を引かれないでもないが、こがしあまりに道具だてがきちんとし過ぎてゐる。どうしても形を氣にしてゐる、――形を離れようとして、しかも形に囚れてゐるといふそしりは免れまい。

藥園まで用意してゐるところは、用意の周到といへばいへようが、あまりの用意であるといはなければならぬ。流水抄には、

近くは自衛に足り、遠くは人を濟ふの理、これ醫家の本意なり。長明の用心殊勝にこそ。

と、ひどく譽めてゐるが、自分はむしろ、あまりまでなる用意と思ふ。尤も徒然草にも、兼好がよく醫療のことを氣にしてゐるあとが見えてゐる。醫術の進んで

◎かけひ　地上に高くかけて、水を引く樋。◎つま木　細少のたきぎをいふことば。◎外山　日野山のほとりに、今も外山といふ地名がある。◎まさきのかづら　ときはである蔓草の稱。◎あとを埋めり　人の往來のあとをふさいでゐる意。◎觀念のたより　觀念のよるべといふほどの意。觀念は下の註釋にとく。

ゐない當時にあつては、おのづから各人みな、さうした用意を要としたものであらう。なほ本朝文粹の紀納言の山家秋歌に、『幽棲何事且營々、藥圃荒涼手自耕』といふ句があるので、さうした趣味にもさそはれて書いたものであらう。一體、かういふやうに記してゐることが、すべて事實であるかどうかは、もとより疑問である。無論、多少とも誇張もしてあり、美化もしてあるに違ひあるまいと思ふ。蕨のほどろ、つかなみなどは、特に事實であるまいと思はれる。さてかうはいふものゝ、かうした閑居の趣は、誰にでも何となく一種の感興をそるものである。して文章はまさに、その感興をそるに足りるほどに、巧に書きなされてゐるのである。

その所のさまをいはゞ、南に寛あり。岩をたゝみて水をためたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。まさきのかづらあとを埋めり。谷しげけれど西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。

註釋【その所のさま】といふのは、日野山の作者の庵のあたりのありさまをいうたのである。【かけひ】は埋樋に對することばで、竹や木のなかをくつたものを、地上に高く懸けて、谷川などから、水を引く爲に作るものである。【岩をたゝみて】といふのは、そのかけひでよんでくる水を受ける水ためで、岩をたゝみ築きて、小さい池のやうにして、そこに水をためてあるといふのである。【のき】は、家の屋根の棚の、四方へ垂れてさし出てゐるところをいふことば、これは軒のはしないふのきばの意に用ゐたので、あたりの林が、すぐのきば近くにおほひかさつてゐるといふのである。【つま木】は爪木と書く。手で折りあつめるほどの柴、すなはち細少の薪をいふことばである。白氏六帖に、『大曰レ薪、小曰レ蒸』とある。夫木集に、『かげにゐて枝を折るにもなりぬべし、軒ばの山をたのむつま木は』といふ爲家郷の歌がある。で、林が近いので、つま木を拾ふのに不自由しない、すなはち薪の心配はいらぬといふのである。【外山】は、今も日野山の邊に、さういふ地名が殘つてゐて、長明の方丈の庵の遺址というて、谷あひの落ちくぼんだところに、徑一丈ばかりの石があるといふ。心敬僧都の『さゞめごとの記』に、この長

◎かけひ　地上に高くかけて、水を引く樋。◎つま木　細少のたきぎをいふことば。◎外山　日野山のほとりに、今も外山といふ地名がある。◎まさきのかづら　ときはである蔓草の稱。◎あとを埋めり　人の往來のあとをふさいでゐる意。◎觀念のたより　觀念のよるべといふほどの意。觀念は下の註釋にとく。

ゐない當時にあつては、おのづから各人みな、さうした用意を要としたものであらう。なほ本朝文粹の紀納言の山家秋歌に、『幽棲何事且營々、藥圃荒涼手自耕』といふ句があるので、さうした趣味にもさそはれて書いたものであらう。一體、かういふやうに記してゐることが、すべて事實であるかどうかは、もとより疑問である。無論、多少とも誇張もしてあり、美化もしてあるに違ひあるまいと思ふ。厳のほどろ、つかなみなどは、特に事實であるまいと思はれる。

さてかうはいふものゝ、かうした閑居の趣は、誰にでも何となく一種の感興をそそるものである。して文章はまさに、その感興をそゝるに足りるほどに、巧に書きなされてゐるのである。

その所のさまをいはゞ、南に筧あり。岩をたゝみて水をためたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。まさきのかづらあとを埋めり。谷しげければ西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。

註釋【その所のさま】といふのは、日野山の作者の庵のあたりのありさまをいうたのである。【かけひ】は埋樋に對することばで、竹や木のなかをくつたものを、地上に高く懸けて、谷川などから、水を引く爲に作るものである。【岩をたゝみて】といふのは、そのかけひでよんでくる水を受ける水ためで、岩をたゝみ築きて、小さい池のやうにして、そこに水をためてあるといふのである。【のき】は、家の屋根の裾の、四方へ垂れてさし出てゐるところをいふことば、これは軒のはしをいふのきばの意に用ゐたので、あたりの林が、すぐのきば近くにおほひかぶさつてゐるといふのである。【つま木】は爪木と書く。手で折りあつめるほどの柴、すなはち細少の薪をいふことばである。白氏六帖に、『大曰レ薪、小曰レ蒸』とある。夫木集に、『かげにゐて枝を折るにもなりぬべし、軒ばの山をたのむつま木は』といふ爲家郷の歌がある。で、林が近いので、つま木を拾ふのに不自由しない、すなはち薪の心配はいらぬといふのである。【外山】は、今も日野山の邊に、さういふ地名が殘つてゐて、長明の方丈の庵の遺址というて、谷あひの落ちくぼんだところに、徑一丈ばかりの石があるといふ。心敬僧都の『さゝめごとの記』に、この長

明の石の床に、後鳥羽上皇が二度御幸あらせられたといふことをしるし、また草山集巻四に、遊二石田一記に、『訪二鴨長明舊蹤一、幽居之態、其方丈記盡焉、有レ巖名二方丈石一、或云二千丈石一、高二丈許、其上幾平而可レ坐二數十人一』とあり、幽齋法印玄旨の集に、『日野山といふ所にまかりけるついでに、長明のうき世をはなれて、すまひをりし由申し傳へ侍る、外山の庵室のあとを尋ねて見侍るに、大きなる石の上に、松の年ふりて、水の流いさぎよく、心の底さこそとおしはかられ侍る。昔のことなどおもひ出でて、岩がねに流るゝ水も琴の音の、昔おぼゆるしらべにはして』と書いてある。但しそれが方丈の庵の眞の舊跡かどうかは、勿論わからない。【まさきのかづら】は、さういふ一種のつる草があるのだといふので、そしてそのどういふものかといふについて、いろいろの說がある。それに、古今集神あそびの歌に、『深山にはあられ降るらし外山なる、まさきのかづら色づきにけり』といふのがあるので、紅葉するもので、ときはのものではないといふ說もあるが、古文の上の用例を見ると、どうもときはであるつる草の總稱らしい。してこゝは、この古今の歌を、ちよつと思ひ寄せて書いたものであらう。【あとを埋めり】といふのは、紀齊名の賦の辭に、『山遠雲埋二行客迹一』とありなどして、その人の足あとの印せらるべくもないほどに、蔓草のしげりあうてるさまである。そしてまさきのかづらは、かうした山や谷やの深い所に叢生するものである故に、よくかうした閑居の宿にとりあはされる。後拾遺集に經信卿の『たびれする宿は深山にとぢられて、まさきのかづらくる人もなし』といふ歌がある。新勅選集に、『外山にはあられ降るらし谷しげき、まさきのかづらあとをうづめり』とあるのは、この書から取つた趣向であらうか。【谷しげけれど西は晴れたり】といふのは、谷が迫つて、草木がしげくはえてゐるが、西の方だけは開いてゐるといふのである。【觀念のたよりなきにしもあらず】といふのは、例の西方淨土、すなはち極樂は西方にあるといふ、佛教の信念からして、西の方は開いてゐるので、そこが方淨土を思ひやつて、觀念のよるべとすることができるといふので、【觀わんねん】は佛教語である。諸法の道理、または極樂の莊嚴等を觀察想念するのをいふことばである。一體、觀ずるといふことばは、よく、たしかに思ひ考へるにいふことばである。

浮べて觀察想念することの意にいふたのである。【なきにしもあらず】のしどころの意にいふたのである。【なきにしもあらず】のしところのしにもの添つたもので、通例はごく強く、そのことなゝゐられる助詞であるが、時に輕く、語句に抑揚を添へ、その音調用ゐられることがある。こゝもその輕い方の用例である。

文評 前に庵の結構、その裝置のさまを叙したのを受けて、こゝはその庵のあたりのありさま、光景に叙し入つたところである。

例のこの作者の得意な簡明な句法が、こゝでは特に眼にたつてうまく、整然とあらはし出されてゐる。

▲南に筧あり。岩をたゝみて水をためたり。

▲林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。

▲名を外山といふ。まさきのかづらあとを埋めり。

▲谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。

かうわけて觀て見ると、すぐにわかるが、いづれも同じ句法である。ほつりほつりと、短く句を切つて、それですぐ下の句を起し、そしてその間に幽微の關係を保たせてるところ、また原因結果、もしくは因緣のその關係を直截に見せてゐるところ、そしてその光景と、その心情とをかゝ寫し出したところ、さういふところが、まことに巧である。作者の筆致がうかゞはれるのである。して、かう同じ句法でつゞけていきながら、しかもそれが平板單調の弊に陷らぬところに、特に作者のそのこまやかなる用意と、筆の巧とが見えるのである。これはこの書の全篇にわたつてのことであるが、こゝは特に眼に立つてゐるのである。

『南に筧あり。岩をたゝみて水をためたり』といふはじめの一句は、特にその巧な筆法がうかゞはれる。いかにも簡明直截の書き方で、いかにもよくそのさまとその趣とをつくしてゐるではないか。

こゝはこれで切れるものでなく、結末の『觀念のたよりなきにしもあらず』の句に對して、後にくる『紫雲の如くして西の方ににほふ』といふ句を起してゐるのである。

◎藤波　藤の花のしなゝひなびくさまからし

春は藤波を見る。紫雲の如くして西の方ににほふ。夏は時

て、藤の花をいふことば。◎紫雲　下の註釋にとく。◎かたらふ　談合する意。◎死出の山路　めいどをいふ。◎ちぎる　約束する意。◎日ぐらし　蟬の一種。◎うつせみの　世、命、人などにかゝる枕詞。それにせみをいひかけたのである。◎あはれむ　あはれと見る意。感にたへて見る意。◎罪障　往生のさはりとなる罪。

鳥を聞く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲、耳に滿てり。空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。積り消ゆるさま、罪障にたとへつべし。

註釋【紫雲の如くして西の方ににほふ】、紫雲は、紫色の雲で、念佛行者の臨終に、佛、菩薩が來迎なさる時は、多くこの紫色の雲に乘つてこられるといふ、佛教の信念である。往生要集卷五に、『二十五の菩薩、百千の比丘衆もろともに來り給ふや、西の方紫雲たなびき云々』とある。この紫の雲に、藤の花の紫色にうちなびくさまを比したのである。尤も藤の花を紫雲に比した例は、古歌に多い。拾遺集に、公任卿の『紫の雲とぞ見ゆる藤の花、いかなるやどのしるしなるらむ』といふ歌があり、また西行の山家集に、『西を待つ心に藤をかけてこそ、その紫の雲をおもはめ』といふ歌がある。その他、いくらも例がある。これらからして作者は思ひついて、かういうたのであらう。西の方は、前にあつた西方淨土を思ひよせていうてゐるのだ。にほふといふことばは、すべてうるはしい質の、ものゝ中に充

實して、それでその美質が、ぼうつと外にあらはれ出たのにいふのである。で、花などには、その色にも香にもいふ。こゝは藤の花のうるはしい色のにほひ出たさまである。【かたらふごとに死出の山路をちぎる】、死出の山路といふのは、佛教語で、われわれがこの世で死んで、さて行く所である故に、來世を死出といふ。そして、苟くも佛果を究めて、淨土に到らざるかぎりは、未來、惡趣の報を感ずべき故に、その艱苦を山路の嶮難なるにたとへて、死出の山、もしくは死出の山路といふのである。そして時鳥の異名をしでのたをさといふ故に、かう死出の山にかけて、一所に死出の山路をたどり行かうと約束するといふのである。しでのたをさといふ名は、賤の田長の義で、農業のさかりの頃に鳴くから、勸農の爲に鳴くといふ意でいうた名だといふが、よくわからぬ。一説には、ほとゝぎすは死出の山の鳥であるからいふのだといふ。袖中抄には、『郭公は、しでの山より來りて、農を勸むる故に、四手田長といへり』と、兩説を一つにしたやうな解をしてゐるが、要するに、どちらともはつきりわからないのである。してこれは、山家集に、堀川局の『この世にてかたらひおかむ時鳥、死出の山路の道しるべせ

よ』といふ歌に、西行が『ほとゝぎすなくこそはかたらはめ、死出の山路に君しかゝらば』と返歌してゐるのが載せてある。作家はそれから思ひついていうたのであらう。【日ぐらしの聲、耳にみてり】、寒蟬、晩蟬などいうて、陰暦八九月の頃の晩方に鳴くせみである。後撰集に貫之の『日ぐらしの聲もいとなく聞ゆるは、秋夕ぐれになればなりけり』といふ歌がある。耳にみてりといふのは、その鳴きしきるのをいうたので、白氏文集卷十三の『相思夕上二松臺一立、蜚思蟬聲滿レ耳秋』といふ句から思ひついたものであらう。【空蟬の世】といふのは、うつせみは現身(うつそみ)の義であらうといふ。で、命、世、人などにかゝる枕詞である。そして蟬のぬけがらを、またうつせみ(轉じては、蟬の意にもいふ)といふので、それをいひかけたのである。【あはれむ】といふのは、あはれと思ふのであるが、今日の用例の悲哀の意のあはれとは違ふ。感にたへて思ふの意である。すべて外物の刺衝に逢ふて心に感じたことを(うれしいにも、かなしいにも、おもしろいにも、苦しいにも)、古文ではあはれといふのである。それがあはれの本義である。【罪障】は、佛教語で、佛果菩提の悟境に到る障害たるべき、一切の罪業妄執をさしていふこ

とばである。罪はつみとがで、われわれ凡夫が煩惱によつて造るとこの罪惡の業作である。【積り消ゆる】といふのは、罪障の消えたかと思ふとまた積り、積つたかと見ると、また消えるといふ意にいひなしたのである。

文評 前段を受けて、そのあたりの春夏秋冬四時の風物を取つて、その感興をいうたのである。

春夏秋冬の、その折々につけての、眼前の風物を取り來りて、巧にこれを佛教修養のよすがにいひなした所は、作者の苦心を見るべき所であらう。また古詩歌の上から脱化して、文章の調子もよく、巧に書きなしてゐる。句法は前段に說いたと同じい、例の筆致である。

但し、われわれはこゝで、そのわりあひに、感興を喚び起されない。これは春夏秋冬のその次第も、またその比喩、そのとりあはせも、あまりにきちんと、殆ど型(かた)にはまつたやうにいつてゐる爲であらう。なるほどとはうなづき得るが、そのまゝその趣におぴき入れられるまでには、感興がのらぬ。

要するに、作者が胸にあふれる感興に筆を載せてゐるのではなくて、形の上で文

◎念佛　彌陀の名號を唱へて、佛を念すること。◎ものうく　氣のすゝまぬ意。◎讀經　經文をよむこと。◎まめならざる　實の入らぬといふほどの意。◎こと更に　わざわざ。◎無言　佛教にいはゆる無言の行。なほ註釋にとく。◎口業　言語でなす所の作業。◎禁戒　佛教でいふ戒律である。◎境界　下の註釋にとく。

章の巧を求めてゐるからの爲である。

もし念佛ものうく讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。こと更に無言をせざれども、ひとりをれば、口業をさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。

註釋【念佛】は、佛教語で、廣く諸佛に通じて、いはゆる佛の相好を觀察し、その功德を憶念し、その佛名を稱念するに名づけることばであるが、しかし最も普通には、阿彌陀佛の御名を稱念するにいふ例になつてゐる。【讀經】は、音便でどきやうとよむ例である。經文を讀むことをいふ。【無言】は、佛教では、妄語、綺語、惡口、兩舌などいうて、禍の口より生ずることないましめ、それで無言の行をする。それをいうたのである。【口業】も佛教語で、三業(身業、口業、意業)の一で、言語でなすところの作業をいふ。【をさめつべし】のつべしは、現在完了の助動詞のつがべしに添つたので、をさめおほせる筈であるとの意である。【禁戒】は、またこんかいともよむ。佛教でいふところの戒律(五戒、八戒、十戒など)であるが、それはいづれも、身、口、意の三方面において躬行實踐するを旨とするものである。で、戒行(かいぎやう)ともいふのである。【境界】も佛教語で、境域界別の義で、凡聖迷悟の十境界に、世界を別ちいふことばであるが、別にまた心識の對象たるものをさしていふことばにも用ゐられる。こゝもその意で、心を動される對象がないから、禁戒を守るといふわけでもないが、何につけて禁戒を破らうや、破る次第がないといふ意にいうたのである。

文評　前段にあたりの光景を叙して、そのいづれも、取つて以てわが修行に資すべきものの、いかにも心安きを述べたのである。

いうて、さてそれを受けて、こゝにその修行の、――この山外の庵にしての修行いかにもさもあるべきことで、ことわりせめて、却つてやゝくどく、うるさいといふほどの憾はあるが、――すなはちそのわざとらしいあとが見えて、そのいは

ゆる『なさめつべし』といひ、『何につけてか破らむ』といふところの、おのづからにして修行の完いといふ趣が出てゐない憾はあるが、しかし人なして、そゞろにその閑居の幽情をおぼえしめるものがある。

『もし念佛のものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、……』といふのが、特にいゝ調子で、その實情を彷彿せしめてゐる。但し、『また恥づべき友もなし』といふのは、ちと書き過ぎてゐる。かうした人前をつくろふといふやうな念佛の行といふのは、おもふに、たしかに當時に行はれた實際のことではあらうが、しかしこゝにしては、何となく感興をそがれる。

もしあとの白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌の風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴す夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督の流をならふ。もしあまりの興あれば、しばしば松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれつたなけれども、人の耳を喜ばしめむとにもあらず、ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

◎あとの白波に　下の註釋にとく。◎岡の屋　宇治川の東岸にある。◎滿沙彌　滿誓といふ沙彌のこと。下の註釋にとく。◎風情　おもむきといふほどの意。◎桂の風　下の註釋にとく。◎源都督　桂大納言經信卿のこと。◎あまりの興　興のまだつきずに殘るのをいうたのである。◎秋風の樂　樂曲の名。◎流泉の曲　琵琶の曲の名。◎あやつる　琵琶を彈ずるにいうたのである。

註釋【あとの白波に身をよする】といふのは、拾遺集にある、沙彌滿誓の『世の中を何にたとへむ朝ぼらけ、漕ぎゆく船のあとの白波』（この歌、萬葉集卷三に出で末の句、『あとなきがごと』とある）といふ歌を取つていうたので、もしわが身のはかなく、たのみなきことを、漕ぎゆく船のあとの白波の如しと、思ひよせた時は、宇治川の岡の屋のあたりに行きかふ船をながめて、沙彌滿誓の歌のその趣にならふといふのである。ぬすむというたのは、ならふ、學ぶといふほどの意である。

【滿沙彌】は、沙彌滿誓で、尾張守左大辨正五位上笠朝臣麻呂のことで、養老五年四月、太上天皇の御病を祈り奉る爲に剃髮得度し、同八年二月、筑紫の觀音寺の別當に補せられて、造營の事を掌つたよしが、續日本紀に見えてゐる。沙彌は、またさみともふむ。梵語で、息慈（世俗の染情を息めて、群生を濟度せむために、慈心を起すといふ義）と譯す。はじめて落髮して佛法に入るものゝ名稱で

ある。【桂の風葉をならす夕には】といふのは、白樂天の琵琶行の『潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟々』とある句を取つていうたのである。桂は、和名抄にめかつらというて、楓をかつらといふに對してあるので、『楓葉』にかへて用ゐたのである。なほ楓をかつらとよませてゐる例は、古歌古文に多くある。【潯陽の江】は、白樂天の配所で、右に引いた琵琶行の詩句に出てゐるそれをさして、琵琶行の詩趣を思ひやるといふのである。【源都督】は、桂大納言經信のことである。都督は、太宰帥を唐風にいひなす用例で、經信が、嘉保元年六月に太宰權帥に貶せられたので、時人がかう呼びなしてゐたのである。この人は宇多源氏で、和漢の才に富み、故實に通じ、ことに琵琶の妙手であつた。で、その流を、世に桂流というた。(前の桂の風といふのは、この桂流にもきかせてあるのであらう)それで、秋風が桂の風におとづれる夕には、白樂天の潯陽の江頭のその趣をおもひやつて、琵琶を彈じて、源都督の風流を學ぶといふのである。【もしあまりの興あれば】といふのは、それでもなほ興がつきなければといふのである。【松のひゞきに秋風の樂をたぐへ】といふのは、白氏文集の第三樂府の『第一第二絃索々、秋風拂レ松疎音落』

といふ句を思ひよせて書いたのであらう。秋風の樂といふのは、盤涉調の樂の名である。たぐふはならべそへる、つれ伴はしめる意で、松風の音に和して、秋風の樂を奏するといふのである。【流泉の曲】は、あの今昔物語に、源博雅が逢坂山の蟬丸の所に通うて纔に習ひ得たといふ逸話に名高い所の、琵琶の祕曲である。【あやつる】は、すべて絲をしかけて、引き張つて、はたらかすにいふことばであるが、それで琴、琵琶などを彈ずる意にいはれるのである。さてこゝの秋風の樂といひ、流泉の曲といふのは、いづれも、その松のひゞき、水のひゞきに緣語の巧を求めていひなしたもので、必ずしも、その祕曲であるといふ樂曲の意をはたらかせてゐるのではない。尤も作者は、琵琶にはよほど堪能の人であつたのではある。【ひとりしらべ、ひとり詠じて】といふ、しらべは琵琶を彈ずるをいひ、詠じは、その樂の歌をうたふのをいうたのである。しらぶは、音の律呂を合せとゝのへるにいふことばで、奏する、かなづるの意である。【心を養ふ】といふのは、孟子の公孫丑章句に、『吾善養二吾浩然之氣一』とあるやうな意で、自分と自分の心を養ふといふのである。

文評 前段に、佛道の修養の心やすきをいひ、それについで、こゝにはその風雅の心の、おのづからにうち興ぜられ、養はれる趣を述べたのである。

沙彌滿誓の古歌の意を取り、白樂天の琵琶行をおもひよせ、源都督の風流にならふといふやうな用意が、すべてこまやかに巧にあらはされてゐる。そして『岡の屋に行きかふ船をながめて』といひ、『桂の風葉をならす夕』といひ、『松のひびきに』といひ、『水の音に』といひ、いづれもそれを、眼前の風物に密著せしめて、どこまでも庵のその閑居の趣と離れぬやうに、叙してゐるところは、特にこまかい用意である。

前にもいうた通り、この作者は、極めてものごとのきちんとした性格の人であつたと見える。それで文章の上にも、そのどこまでもきちんとした、つじつまのきちんと合つた趣が出てゐる。こゝなどはことにその著しい例である。

『桂の風』の桂が、源都督の桂流にひゞかせてあり、『潯陽の江』に、『流』の緣語がおのづからに求めてあり、

『松のひびき』に『秋風の樂』の秋風がとりあはせられ、『水の音』に『流泉の曲』の流泉がとりあはせられてゐる。

といふやうな風である。しかもそのとりあはせが、いづれもぴたりと合つて、寸分のすきもないほどにちやんとしてゐるのである。そこがこの作者の一つの長所であつた。しかし同時に、あまりきまり過ぎて、餘裕とか餘情とかいふものが、殆どないのである。そこにまたこの作者の短所がうかゞはれる。いはゆる長短ともに、こゝにありといふべきものであらう。自分はこの點において、あの明治文壇の齋藤綠雨の筆致とこの作者の筆致との上に、その著しい類似をおもふのである。

但しこの作者には、綠雨のあの皮肉な筆はないのである。

『藝はこれ拙けれども、……』といふところは、この作者の例のくせではあるが、こゝにはなくもがなのことわりである。どうしても、こゝまでつつこんでいはなければ、氣がすまぬといふのが、この作者の性格であつたらう。

『みづから心を養ふ』といふのは、作者に取つては、或は、この一段の主題であつたかも知れぬが、何だか折角の風雅の感興が、理に落ちてしまつたやうな心もちがして、ちよつと感興をそがれるやうな氣がするのである。——自分はかうおも

◎麓　外山の麓である。◎山守　この山の番人である。◎とぶらふ　おとづれる意。◎つれづれなる　することがなくて、たいくつなの意。◎ありく　あるくに同じい。

また麓に一つの柴の庵ありぃすなはちこの山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りて相訪ふ。もしつれづれなる時は、これを友として遊びありく。かれは十六歲、われは六十、その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。

ふのである。

注釋【柴の庵】、しばは山野の雜木をいふことばで、その雜木の枝などで、そまつに造りなした庵といふ義で、はかなげの、そまつな庵をいふのである。【かしこ】といふのは、遠稱の指示代名詞である（近稱がここ、中稱がそこ）で、それで、その庵が作者の庵からは、遙にはなれてゐるさまを見せたのである。古文では、すべてこの種の代名詞の用法が嚴格になつてゐる。【心を慰むることは】といふのは、その小童と作者と、共に無邪氣な趣に心を慰めるのをいうたのであらう。

文評　これはこゝに、ちよつとこの一小童との往來を、挿み叙したのである。

但し、この一段の挿叙の意味が、ちよつとわかりかねる。諸註釋書は、すべてこれを簡單に、たゞこゝに挿んだだけのもの、すなはち十六歲の小童と六十の老作者とが、そのいはゆる忘年の交をなしたといふ一小話の挿叙とだけに見てゐるのであるが、それにしては、何だかその趣がつくされてゐないやうな感がある。それに前後の句節の照應に、絕えず細心の注意をしてゐた作者の筆法としては、さう見ると、いかにも前後の關係が切れてゐて、泛然としてゐるのである。で、自分の考では、これは、この小童と、無邪氣な、忘年の友の交をなしたといふ一小話を挿み叙すると共に、そこに『もしつれづれなる時は、これを友として遊びありく』とある句をきかせて、次にくる『或はつばなを拔き、……』以下の句につゞけてゐるのではあるまいかと思ふのである。

勿論、下の句には、小童と共に遊びありくといふ上の、いひかへれば、その小童に伴うての叙事は見えてゐない。しかしこれは、小童と共にといふことが、作者の主題ではなく、この小童と共に遊びありくといふことを緣にして、作者自身の

◎つばな　茅の花である。◎岩梨　はまなし、こけもゝともいふ。灌木で、小さい赤い實がなる。◎ぬかご　今いふむかご。山の芋の蔓に結ぶ實。◎もる　下の註釋にとく。◎ゆそわ　山の麓のほとり

その逍遙の興を叙するのが主題であつたからである。

なほいへば、作者はこゝに、この一小童との交遊の一小話を挿叙すると共に、更にこれをば、後段の逍遙の叙事の前提にして、それでその前後の聯絡を保たせてゐる、――自分はかう、この一段をとくのである。

但し、それにしても、ちよつとおもしろいこの一小話の叙事は、何だかその趣がつくされてゐないやうな氣がする。そして、『また』といふ接續詞で起したところは、この作者に似あはぬ、極めたる不手ぎはであつた。

あるはつばなを抜き、岩梨をとる。またぬかごをもり、芹をつむ。あるはすそわの田居に至りて、落穗をひろひて穗組をつくる。もし日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて、遙に故郷の空をのぞみ、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。

たいふ。◎田居　田といふに同じ意の用例。◎落穗　刈り取つた跡に落ちてゐる稻穗。◎穗組　稻穗を組みあはせて、ものにかけておくもの。◎うらゝかなり　天氣のよくはれて、のどかにある意。◎故郷　京都をさす。◎木幡山伏見鳥羽羽束師　みなあたりの名所。下にとく。◎勝地　景色のすぐれていゝ地。なほ下にとく。

註釋【つばなを抜き】といふのは、下の岩梨、ぬかご、芹などと共に、食用にする爲である。今もよく田舍の小供などは、つばなをたべるのである。【ぬかごをもり】のもるは、ぬかごを取るといふ意である。もと、ぬかごを取るのに、これを何か籠などに盛り入れるといふ上からでもいひならしたものか、古文には、よくぬかごをもるといふ用例が見えてゐる。平家物語卷六『祇園の女御の事』に條に、『いもが子ははふほどにこそなりにけれ、たゞもりとりてやしなひにせよ』といふ歌があるなど、その一例である。【すそわの田居】は、萬葉集卷九に『筑波ねのすそわの田居に秋田かる、いもがりやらむもみぢ手をがな』といふ歌があつて、すそわは山のすそ(麓)のめぐりであるといふ。田居は、もと田の中の家居のある所をいふことであるが、通じて田といふ意に用ゐられる用例である。『田居に至りて』は、一本には、『下りて』とある。【落穗をひろひ】といふのは、貧困のものなどが、さうして刈田のあとに落ちてる穗を拾ふといふならはしがあつたものと見える。伊勢物語に、『うちわびて落穗ひろふときかませば、われも田づらに行かましものを』といふ歌が出てゐる。【穗組】穗掛ともいふ。古くは稻蘰というたといふ。つまり

稲を乾す爲に、穂を組み合せて、物に掛けるものである。夫木集に、信實の『秋の田のかりほのほぐみいたづらに、つみあまるまでにぎはひにけり』といふ歌が出てゐる。【木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師】、ともに山城にある名所で、木幡山は宇治郡、伏見、鳥羽は紀伊郡、羽束師は乙訓郡にある。いづれも古歌に多くよみ入れられてゐる名所である。【勝地は主なければ】といふのは、白氏文集十三の卷の『勝地本來無二定主一、大都山屬二愛レ山之人一』といふ句のあるのを取つていうたのである。

文評 つれづれな折には、庵を出でて、そことも知らず逍遙するといふ、その逍遙の趣に叙し入つた第一段である。そして前半は、その折々につけての食料の拾收をも念とすることをいひ、後半は眺望の興にまかせる趣をいうてゐるのだ。

前半の食料の拾收は、いつもの作者の細心の用意を見るべきものであるが、ちとこまかく書き過ぎて、何だか、逍遙の趣を逸してゐるやうな感じがする。

さてそこの叙事について、抄に、

『つばなをぬきは春なり、岩梨をとるは夏なり、またぬかごをもり、芹をつむは秋なり、あるはすそわの田居に至りて、落穂をひろひては冬なり。四季をつられたり。』

とといてゐるが、こまかい見方と思ふ。實際、作者は例のこまかい用意で、四季に配して書いたものであらう。總じて抄の著者は、他の註釋者のやうに、字句のこまかい出所などの穿鑿にはうとい方であるが、章句の接續や、意味の脈絡には、こまかい見方をしてゐる。たしかに文章を味ひ見る一隻眼を有してゐた人と見える。

後半の眺望の興を叙した方は、いゝ調子である。たゞ極めて簡單に、『故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る』とばかり叙したところが、いゝ餘情をたゞよはせてゐる。故郷といふのは、京都、ことに作者の生地の賀茂のあたりを指してゐるのであらうが、その故郷を望み見る、羇旅の作者の胸には、いふまでもなく千萬無量の感慨が涌くべき筈である。それをたゞ輕く『望み』とばかりいひなしてゐるのが、いゝ調子である。

結末の『勝地は主なければ……』の説明的の語も、こゝではくどい説明に落ちな

◎岸山　宇治の御室戸山の東北にあるといふ。◎笠取　宇治郡醍醐山の東に當つてゐる。◎岩間　近江志賀郡にある。ここに正法寺といふ寺がある。◎石山　近江の志賀郡にある、石山寺である。◎粟津の原　志賀郡にある。◎田上河　近江の粟太郡にあつて、宇治河の上流。◎歸るさ　かへる時の意。◎折につけ　春夏秋冬のその折々につけての意。◎櫻をかり　かるは、もとめたづねてみる意。◎家づと　家への

いで、その引用法の修辞とあはせて、一種の感興を誘うてゐる。

あゆみ煩なく、志遠く至る時は、これより峯つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、あるは石山を拜む。もしはまた、粟津の原をわけて、蟬丸の翁が跡を弔ひ、田上河を渡りて、猿丸大夫が墓をたづぬ。歸るさには、折につけつゝ、櫻をかり、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家づとにす。

註釋【あゆみ煩ひなく】といふのは、歩みつかれず、あゆみになやみなきというたのである。【志遠く至る】といふのは、遠く遊ばうといふ心の起りくるのをいうたのである。【これより】のこれは、作者の今をる大原山をさしたのである。【岩間】は小山で、笠取、田原など、その麓に當つてゐる所である。元正天皇の朝、泰澄がこゝに正法寺を建立したので、本尊は千手觀音で三十三所の内である。まうでと

みやげの意。

いふのは、その正法寺に參詣するといふのである。【石山を拜む】といふのは、有名な石山寺の觀音を拜む意である。【蟬丸の翁】、後撰集に『これやこの行くも歸るもわかれては、しるもしらぬも逢坂の關』といふ歌がのせてあり、百人一首にも取られて、世に有名になつてゐるが、その傳記は詳でない。この作者(長明)の著である無名抄に、

『逢坂の關の明神と申すは、むかしの蟬丸の、かのわらやの跡を失はずして、そこに神となりて住み給ふなるべし。今もうち過ぐるたよりに見れば、むかし深草のみかどの御使にて、和琴ならひに、良峯宗貞が、良少將(僧正遍昭の俗名)とてかよひけむ事までおもかげに浮びて、いみじくこそ侍れ。』

と書いてあつて、仁明天皇の御時の人と見えるが、今昔物語には、宇多天皇の皇子敦實親王の雜色で、目しひて逢坂山に住んでゐたといふことが書いてある。すると、朱雀、村上天皇の御時の人と見える。どちらかよくわからぬのである。從つて粟津の原にある蟬丸のあとといふのも、よくわからぬのである。【猿丸大夫】、歌人として有名な人であるが、これも傳記がよくわからぬ。攝津の深草の人で、後

に近江の曾束（その田上川のほとり）にかくれたといふが、よくわからぬ。墓はこゝにもあるし、伊賀にもある。これもこの作者の無名抄に、

『ある人のいはく、田上川の下に曾束といふ所あり。そこに猿丸大夫が墓あり。庄のさかひにて、そこの卷に書きのせたれば、みな人しれり。』

と書いてゐる。「櫻をかり」のかるは、流水抄に、定家卿の説だといふて、『ものをもとむる』意で、こゝかしこの花をたづね見るにいふとといてゐる。つまりもとは、鳥や獸を狩る、あのかるである。それで野山などにわけ入りて、花をたづねもとめて見るといふ意に用ゐる用例となつたのである。紅葉がりといふ用例もある。同じことである。こゝも、櫻をかり、蕨を折りは春のもの、紅葉をもとめ、木の實を拾ひは秋のもので、それによつて、その折につけつゝの句に應じたのである。「家づと」つとは、ものを藁などでつゝんだものをいふので、家へのみやげに、物をつゝんでもちかへるものを家づとといふのである。で、今いふみやげといふほどの意に用ゐられる。ところで、作者は獨身者であるから、家へのみやげといふのはをかしい、これは自分の身命を養ふ爲の料といふ意にいうたのだと、

諸註書がことわつてゐるが、それはあまりかゝはつた説で、家人があらうが、なからうが、家へのみやげとして、何もさしつかへはないのである。

文評 前段の逍遙の叙事のつゞきて、その第二段とも見るべきものである。してこゝには、單なる逍遙の興を、一歩進めて、寺々の參詣、古人の追懷といふやうな興を添へて叙してゐるのである。

『……笠取を過ぎて、岩間にまうで、あるは石山を拜む』といふところは、『岩間にまうで、石山を拜む』となつてゐる本や、『あるは岩間にまうで、あるは石山を拜む』となつてゐる本や、諸本によつて、いろいろにかはつてゐるが、文章の調子から見て、こゝに取つた本文のやうにある本のがよろしいと思うて、さうしておいた。

『……蕨を折り、木の實を拾ひて』といふのを、今註釋に説いたやうに、その家づとといふことばが、獨身者の作者にはふさはしくないといふので、食用にする爲のものと、諸註書が説いてゐるのであるが、それはさうではない、こゝは、その家づとといふのは、櫻をかり、紅葉をもとめにまでかゝつてゐるので、その趣の

上から、これをみやげにするというてゐるのである。（自然、蕨や木の實は食用には供せられようが、その食用といふことが主ではないのだ）さう見なければ、前のつばな、岩梨、ぬかご、芹、落穗などの收拾とついてしまつて、いかにも食物ばかり氣にしてゐるやうで、おもしろくない。何でもないことのやうであるが、實際こゝでは、この終の一節の上に、その趣がしのばれるのである。

こゝの文章の趣に關係があるから、ことわるのである。

それから、ちよつとしたことであるが、『歸るさには』と轉じて、そこに、『折につけつゝ』の一句を挿んだところが、器用な筆づかひである。

もし夜靜なれば、窓の月に故人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は、遠く槇の島の篝火にまがひ、曉の雨は、おのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろほろと鳴くを聞きて、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。あるは埋火をかき起して、老の寐ざめの友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色、折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知れらむ人の爲には、これにしも限るべからず。

◎故人　故舊をいふ。◎槇の島　山城の久世郡にあつて、宇治川の西川に當る。◎篝火　氷魚を取る漁火である。◎父か母かと　下の註釋にとく。◎かせぎ　鹿のこと。◎埋火　灰にいけ埋めた炭火をいふ。◎寐ざめ　ねむりの中途でさめたことにいふことば。◎あはれむ　あはれと思ふ、感に堪へて聞く意。

註釋【窓の月】は、窓に映ずる月の趣をいうたのである。【故人】は、今は世になきもともとけるが、故舊、すなはちもとの知人たちをさしていうたので

【袖をうるほす】といふのは、古樂府の『巴東三峽巫峽長、猿聲袖をうるほす』といふ句を思ひよせて書いたのであらう。【槇の島の篝火】、の名所であつたから、氷魚を捕へる爲の漁火をさし、

相混じてわけ難いにいふことばで、草むらの螢、

の島の篝火と相連つて、いづれをいづれと、

うたのである。尤もこれは、源氏物語蓬、

もの、やり水の螢に見えまがふもを、

川瀬々にひまなき篝火と、見ゆるは

よくいひなされる比喩ではあるのだ。【お

のも、後拾遺に能因法師の『神無月ねざめに

けり』といふ歌などがあつて、ありふれた想で

趣であるし、それに『おのづから』といふ副詞が、

おもしろい。『山鳥のほろほろと鳴くを聞きて父か母かと

集に出てゐる行基菩薩の『山鳥のほろほろと鳴く聲聞けば、

ぞ思ふ』といふ歌を取つていうたので、してこの歌は、梵網經に、

父、一切女人是我母、我生々無不從之受生、故六道衆生是我父母』といふ

をよんだものだといはれてゐる。すなはち山鳥の鳴く聲を聞くと、あれは自分の

父、自分の母ではあるまいかと思うて、そゞろにこひしく、その昔を思ひ出すと

いふのである。但しその雉子を父か母かと思ふといふ意を、強くはたらかせてゐ

るのではなくて、さう思うて、そゞろに父母の上がこひしくおもひ出られるとい

ふ情を、はたらかせてゐるのだ。それでほろほろといふ寫音的の副詞の、その

しんみりした、あはれな趣がよく踊動してゐるのである。【かせぎ】は鹿の異稱であ

る。それは紡錘で取つた絲をかける道具のかぜきといふものが、兩端槌木形をし

てゐて、鹿の角に似てゐるといふのでいうたのだといふが、よくわからぬ。して

これは、山家集に西行の高野山でよんだ、『山ふかみ馴るゝかせぎのけぢかきに、

世に遠ざかるほどぞ知らるゝ』といふ歌があるのを取つていうたのである。【埋火

をかき起して、老の寐ざめの友とす】といふのは、堀川院百首の歌の中に、國信

の『いふこともなき埋火をおこすかな、冬のねざめの友しなければ』といふ歌の

あるのを、思ひよせて書いたものであらう。【梟の聲をあはれむにつけても】といふ

のも、西行の歌に、『山ふかみけぢかき鳥の音はせで、ものおそろしきふくろふの

聲』といふのがあるのを思ひよせて書いたのであらう。【況や深く思ひ云々】とい

ふのは、ちよつとわかりにくい。作者が自分を卑下して、自分でさへこれほどに

閑居の興を感じる。まして深く思ひ、深くものを知る人にあつては、その興、その

感じはなかなかこれ位ではなからうものをと、かういふ意であるか、それともこれ

を婉曲に、自分の上にかけて、後段の言説の上に『一期のたのしみは、うたゝね

の枕の上にきはまり……』といふやうな（そこばかりではなく、すべて後段の言説に）應じさせてゐるのか、ちよつとわかりにくい。しかし、どうも前の方の、自分を卑下していうてるものであるらしい。

文評　これでひとまづ、外山の閑居の興の叙事を結んでゐるのであるが、文章はこの一段が、最もふるつてゐる。前段の方の所々（ところどころ）で、ともすると談理に落ち、説明に流れた作者の筆は、こゝでは全くそのあとを收めて、その感興にまかせて、おのづからにはせた筆の趣が、いかにもゆかしく出てゐる。

そして今までにはなかつた、作者のそのさもあるべき、悲哀、感慨の情が、こゝには感興のその土臺となつてあらはれてゐるのが、まことにうれしいのである。

これがひどくわれわれ讀者の感興を引きつけてゐるのだ。

なほいふと、自分はこの一段があるによつて、この方丈記の一篇が、はじめてわれわれにそのいみじい感興を與へるのであると、かう思ふ。外山の方丈の庵に世をのがれつくした作者に、もしもこの般の悲哀、感慨がなくて、たゞ單に閑居ののどけさを説き、心やすさを主張する心ばかりが動いてゐたとすれば、われわれ

◎おほかた　まあといふやうな、輕い調子で

讀者は、こゝにたゞその理窟つぽい、ひやゝかなる談理、説明を聞かされるだけで、殆ど何等の興味をも感ぜさせられなかつたであらう。すなはちこの方丈記の一篇は、全く落莫なものになつてしまつたに違ひない。

この悲哀、この感慨を心の底にいだいて、しかして山外の草庵にその遁世の終を完うしたところに、作者のあはれがあり、作者の修養があり、作者の煩悶があり、作者の悟入があるのである。こゝに至れば、作者のその遁世のりに傳へる通りの、いふに足らぬ、つまらないもので、遁世は、決して無意味ではないのである。この念を捧げないわけにはいかないのである。

後段に、作者が昂然として、『……さとらむ』と喝破してゐる、

自分は、いつも在來のだ飽き足らなく思

おほかたこの

ある。◎あからさまとかりそめとの意。◎事のたよりに　事のついでにの意。◎都を　都のやうすをといふほどの意。◎やむごとなき　尊い意。◎かくれ　死ぬの敬語。◎數ならぬ　人數ならぬ、すなはち身分の低く、いやしいものないうたのである。◎のどけくして　靜にゆつたりとして、安穩にの意。

かど、今既に五て、軒には朽葉深りに都を聞けば、このかくれ給へるも、あまたひ、つくしてこれを知るべかしびたる家、またいくそばくぞ。たゞかしておそれなし。

注釋【おほかた】といふのは、大抵といふ意であるが、まあ、一體といふやうな、輕い調子でいうたのである。【あからさまと思ひしかど】といふのは、さういつまでも久しく住むといふ考もなく、たゞほんのかりそめにと思うたのであるがといふのである。【おのづから事のたよりに都を聞けば】といふのは、わざわざ求めて、都の事を聞きたゞしたわけではないが、自然時折の事のついでに、聞くといふのである。都をといふのは、をの助詞をはたらかせて、都の事なといふほどの意にいひなしたものである。【つくしてこれを知るべからず】といふのは、とてもことごとくこれを知りつくすことはできないといふ意を、修辭的に（つくしてといふのを強く提示して）いうたのである。

文評 前數段を重ねて、山外の庵の閑居の趣を叙しつくし、これよりまた、遁世の心安き理を説き出すのである。してこの段は、前の閑居の感興の叙事と、後の遁世の談理との中間の接續をなしてゐる段であるのだ。

いうてることは、別にこれぞといふこともないが、文章の調子、ことに斷續の、あひは、いかにもよく整うてゐる。『おほかた』と起したところ、『おのづから』と轉じたところ、『まして』と受けたところ、『たびたびの炎上に』とわかれたところ、『たゞ』と結んだところ、どれもみな氣のきいた、引きしまつた、作者得意の筆法である。

それからちよつとしたことであるが、『都を聞けば』といふのが、眼に立つ。一體この作者は、助詞の用法にはくはしくなく、助字のその用ゐ方は、すべて確適で

◎ほど　家の内の分限をいうたのである。◎とこ　寢る爲に特に設けた所をいふことば。◎がうな　寄居蟲のこと。◎みさご　鷲類の一種、水邊にすむ。◎荒磯　浪のあらい磯。◎まじらふ　まじる、まじはる意。

ないのである。それがこゝは、かう『を』をはたらかせてゐるので、ひどく眼に立つのである。

ほどせばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり、一身をやどすに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち人を恐るゝが故なり。われまたかくの如し。身を知り、世を知れゝば、願はず、まじらはず、たゞ靜なるを望とし、愁なきを樂とす。

註釋【ほどせばし】のほどは、すべて物事の分限をいふことばである。で、こゝは家の内の分限をいうたのだ。なほいへば、家の廣さである。せばしはせましに同じい。すなはち廣さ僅に方丈の庵をさしたのである。【がうな】はやどかりのことで、空の貝を求めてその中に住む。頭は蝦に似て、はさみは蟹に似てゐる。脚に爪があつて、その爪だけを出して、貝にはひつたまゝあるく。【身をしるによりてなり】といふのは、自分の身のはかなく、小さいのを知つてゐるので、小さい貝に安んじ住んでゐるといふのである。【身を知り、世を知れゝば】といふのは、身を知りは、がうなに應じて、身のはかなく、つまらぬものであるのを知つてゐる故に、敢て非望をいだかないといふ意にいひ、世を知れゝばといふのは、みさごに應じて、世をおそろしいものと知つてゐる故に、敢て世に交ることを求めないといふ意にいうたのである。この『知れゝば』は、諸本『知れらば』とある。しかしそれではをかしい。『知れゝ』と送つてあつたのが、『知れら』と傳寫されたものであらうと思ふ。それ故、本文にさう改めておいた。

文評　さて前段を受けて、閑居遁世の談理にはひつたのである。してまづ作者自身の遁世の理由を明にしたのだ。

がうなとみさごとの比喩を以て、作者の遁世の心情をあらはし所が、ちよつと巧である。そしてその比喩の方に、『これよく身を知るによりてなり』、『すなはち人を恐るゝが故なり』といふ説明を下しておいて、『われまたかくの如し』と、その

◎眷屬　親屬をいふ。◎親昵　したしみむつびあうてる人。◎むすべり　庵である故に、むすぶといふたのである。むすぶは前にといてある。◎やつこ　奴僕である。◎すゑむすうは置く意。

喩義にはひつては、たゞ輕く『身を知り、世を知れば』と、受けていうたところは、なかなかいゝ用意である。

この説明によると、作者の遁世の理由は、一方においては、作者その人に、非望を掛くべき資格がなく、一方においては、世の中がまたおそろしいものであるといふことを、よく知つてゐるからだといふのである。そして作者の顧ふところは、たゞ靜な生涯、愁なき境界といふ上ばかりだと、かういふのである。

すべて世の人の、住家を作るならひ、必ずしも身の爲には せず。あるは妻子眷屬の爲に作り、あるは親昵朋友の爲に 作る。あるは主君師匠及び財寶馬牛の爲にさへ、これを作 る。われ今身の爲にむすべり、人の爲に作らず。故いかんと なれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき 人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひ廣く作れりと

も、誰をかやどし、誰をかすゑむ。

【註釋】【眷屬】はもと佛教語で、親眷愛屬の義からして、父母、兄弟、姉妹等をいうたことばである。轉じて、一般に親屬をいふに用ゐられる。【師匠】は師の意である。天台に『師有三匠成之能』とあるのからできた語だといふ。さてここで、【親昵朋友の爲に作る】といふ句と、【主君、師匠……の爲にさへ】といふ句とが、ちよつとわかりにくい。知人や朋友や、主君や師匠やを住まはせる爲に作るといふのか、知人や朋友や、主君や師匠に對して見えを飾つて作るといふのか、いづれにしても事實に遠い事のやうである。で、おもふにこれは、かういろいろと、何の爲に、何々の爲にと、句を重ねていふ修辭的のいひ方で、さうきつぱりとあてゝいうたのではないのだらう。もし強ひてとけば、それらの人を住ませる爲にとゝく外はないが。【今の世のならひ】といふのは、當時の世態人情の浮薄にして、たのむべくあらぬのをいうたのである。【この身のありさま】は、それに對して、自分の世にあはず、世にそむいたさまをいうたのである。但し、前の句を強くいうて、この句はとりあはせにいうたのだ。

◎れんごろなる　手あつく、しんせつである。

文評 前段についで、世人の用もない家づくりに心を勞するの愚を評し、わが庵の上にいひ及してゐるのである。

『すべて世の人の、住家を作るならひ、必ずしも身の爲にはせず』といふのは、おもしろい評言である。勿論、作家の立場からしての評言で、これを以て通論とするわけにはいかないが、たしかに一部の理を含んでゐる。してそこに擧げてゐる例の中では、『財寶馬牛の爲にさへ、これを作る』といふのが、最もふるつてゐる。但し『さへ』の用法は、ちと確適でない。

『今の世のならひ』のたのみにならぬのないうてゐるのは、必ずしも作者の立場からしての、獨斷的のことばではない。實際、この時代はおそろしい時代で、世態人情の最もあさましかつた時なのである。

『たとひ廣く作れりとも、誰をかやどし、誰をかすゑむ』といふのは、作者の身に取り、作者の境界に取つては、なるほど尤のことではあるが、例のちと書き過ぎた憾をのこしてゐる。何だかよまひごとのやうに聞えて、おもしろくない。

それ人の友たるものは、富めるを貴み、ねんごろなるを先とす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせむにはしかじ。人の奴たるものは、賞罰の甚しきを顧み、恩のあつきを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすく靜なるをば願はず。たゞわが身を奴とするにはしかず。

◎すぐなる　まつすぐに、實直にある意。◎絲竹　音樂樂器をいふことば。◎奴　しもべ、奴僕である。◎はごくみ　心をかけて養ふ意。

註釋 【富めるを貴み、ねんごろなるを先とす】といふのは、世人が友となり、友を求めるのに、とかく富める人に眼をつけ、ねんごろにする人にまづ趨いて、さういふ人たちとばかり交ることをつとめるといふのをいうたのである。してこれは、保胤の池亭記の『人之爲レ友者、以レ勢以レ利、不ニ以レ淡交一、不レ如レ無レ友』といふのを脫化したものであらう。【絲竹】は、絲は琴、琵琶の類をいひ、竹は笙、笛の類をいふので、通じて樂器、また音樂の意に用ゐられる。【賞罰の甚しき】の賞罰は、漢文の用語例で、反意語をつられて、その一方に意味をもたせるもので、（緩急、多

少などの例）こゝは賞の方に意があつて、罰はたゞ添はつてゐただけである。『願み、重くす』といふのは、さういふ人にばかり使はれむことを望むのをいうたのである。【はごくみ】は、はぐくむに同じい。もと親鳥が羽翼を以て雛鳥をかばひ養ふといふ意から出たのだといふので、撫育の意に用ゐられることばである。こゝは心をかけて愛撫する意にいうたのだ。【あはれぶ】は、あはれむに同じで、かはいがるといふほどの意である。【更に】といふ副詞のかゝり方が、ちよつとわかりにくい。更には、またといふ意のものと、ちつとも（下に打消のことばで受ける）といふ意のものとあるが、どちらかちよつとわかりかねる。しかしどうも『やすく静なるをば願はず』にかゝつて、ちつとも……願はないといふ意にいうてゐらしい。さうすると、そのおき所がをかしくなるが、これは『はごくみあはれぶ』といふ句を起すのに、その接續がわるいので、その發語的の用をもかねて、そこにおいたものであらうと思ふ。前々から見られる通り、この作者は、その句の轉折するところのつなぎめに始終苦心して、發語的の接續詞（殆ど感歎詞のやうな趣のもの）を巧に用ゐなしてゐるのである。こゝもその爲に、かうした用ゐ方をしたの

◎たゆからず　たゆくあらずの約。たゆしは、だるい意。◎人をかへりみる　人を世話する意。◎ありく　あるくに同じい。◎なやますであらうと思はれる。

文評 前段に世のたのみにするに足らぬのを述べたのを受けて、こゝに友と奴との上について、そのたのみにならぬ世態と、わが身の上の用意とを述べたのである。富めるにつき、れんごろなるに趨り、恩愛の甚しく、あつきを願み重んずるといふ世態をいひ、情あるとすぐなるとを愛せず、やすく静なるをば願はぬといふ人情をなげき、そこに、絲竹花月を友とし、わが身を奴にするにはしかぬといふことを説いてゐるのである。

條理が極めて整然として、文章もまた理路が極めてきちんとしてゐる。そしてどこまでも『やすく静なる』といふ趣につかうといふ、作者の立場もよく見えてゐる。かういふところは、作者の最も得意とする所の壇場であつたのである。

もしなすべきことあれば、すなはちおのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人をしたがへ、人をかへりみるよりはやすし。もしありくべきことあれば、みづから歩

いためくるしめる意。

む。苦しといへども、馬鞍牛車と心を惱すには似ず。

註釋【おのづから】は、自然といふ意で、今作者は自分一人であるから、自然、自分の身をつかふといふのであるが、しかし、その自然といふ意は、ごく輕い。【やすし】といふのは、その心やすいのをいうたのである。【馬鞍牛車と】の『と』は、關係の助詞で、動作、狀態のあらはれる範圍を定めて、抑へてその事物をさし示すに用ゐるものである。ここでいへば、心を惱すといふ動作の範圍をきめて、その對象の事物である、馬鞍牛車を示してゐるのだ。それ馬に鞍をおけ、それ牛車の用意せよと、かう心を惱すやうの比ではない、心やすいといふのである。『似ず』は、一本には『しかず』とある。

文評　前段の『だぶわが身をやつことするにはしかず』といふのを受けて、ひとりわが身を、われと役するの、甚だ心やすきをいうてるのである。そして、更に進んで、『ありくべきことあれば、みづから歩む』といふ上にまで及んでゐるのだ。『おのづから身をつかふ』といふことと、『みづから歩む』といふことと、兩々相對せしめて、すべて對句にして書いてゐるのが、ちよつと器用な句法であるといふ

◎まめなる　ものうくない義で、たつしや、ぢやうぶの意。◎ものうし　たいぎな意。◎養生　攝生に同じい。◎いたづらに　むだに、空しくの意。◎罪業　つみとがの意。下の註釋にとく。◎いかぞ　いかでに同じい。何としての意。

以外に、ここには別に取り立てていふべきこともない。

今一身を分ちて、二つの用をなす。手のやつこ、足の乘物、よくわが心にかなへり。心また身の苦みを知れゝば、苦む時はやすめつ、まめなる時は使ふ。つかふとてもたびたび過さず、ものうしとても心を動すことなし。いかに況や常にありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらに休みをらむ。人を苦め、人を惱すは、また罪業なり。いかぞ他の力をかるべき。

註釋【二つの用】といふのは、やつこと乘物との二つ用をさしたのである。【やめつ】のつは、連句法ではあるが、ちよつと接續の助詞のやうな（ての少しつまつた趣）はたらきをもしてゐる。【まめなる】といふのは、まじめの意から、ものうくない意になり、そしてからだ、手足などのすこやかに、ぢやうぶにあるにいふことば

である。【ものうしとても心を動さず】といふのは、『苦む時はやすめつ』を受けたので、心がすゝまず、ものうい時には、からだをやすめるので、聊か不自由の感もするが、しかし心を動して、その爲にいらいらするやうなこと（奴のいふことをきかぬやうな場合の）はないといふのである。これはちよつとさう見えないで、或は、からだを使ふのに氣がすゝまぬことがあつて、その時にはたいぎに思はぬでもないが、しかし心を動すまでにはないといふやうに說きたいかもしれぬが、さうではない。前にといた通りにとくべきのだ。それは、『まめなる』と『ものうし』とのそのかけあはせを見れば、ちやんとわかるのである。【養生】は、莊子の養生主篇に、『文惠君曰、善哉、吾聞二庖丁之言一、得二養生一焉』とあるのから出た語で、身心を存養することの意にいふことばである。【罪業】の業は、佛教語で、われわれの身、口、意の三つによつて作すところの行爲になづけたものである。で、それには善惡の二別があるのであるが、慣用上、多く惡の所爲の方にのみいはれる例である。

文評 更にくはしく、前段に述べた所を說いたのである。『今一身を分ちて二つの用を

◎藤の衣　そまつな著物をいうたのである。◎ふすま　夜具である。◎かて　食物である。◎ともし　とぼしに同じい。◎おろそかなり　そまつな意。◎あまくす　うまくすといふほどの意。◎たく

なす』といふのは、ちよつとおもしろく、また『手のやつこ』、『足の乘物』は、奇拔な、おもしろい比喩の修辭である。しかしまたあまり書き過ぎてしまつた憾をのこしてゐる。『況や常にありき、常に動くは、これ養生なるべし』に至つては、道理はいかにもさることながら、あまりに理に落ちて、いたく讀者を感興をそぐ。『動く』は、一本には『はたらく』とある。『人を苦め、人を惱すは罪業なり』は、それほどではないが、同じく理に落ちておもしろくない。

但し文章の調子はいゝ。『まめなる』と『ものうし』のかけあはせのとこなど、ことに氣のきいた筆づかひである。

衣食のたぐひ、また同じ。藤の衣、麻のふすま、得るに從ひて肌をかくし、野べのつばな、峯の木の實、僅に命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧を乏しければ、おろそかなれども、なほ味を甘くす。すべてかやうの事、樂しく富める人に對していふにはあらず、たゞわ

らぶる　くらべる、比較する意。

が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

註釋【藤の衣】といふのは、藤の皮や葛などで織つた、そまつな布でこしらへた衣である。萬葉集に、『鹽くむあまの藤衣』、古今集に、『山田をもると藤衣』などあつて、あまや山がつなどの著るそまつな著物をいふのだといふ。【ふすま】は、れる時に、身の上にかける、方形の夜具である。そのかけぶとんの如きもの。【得るに從ひて】といふのは、得るがまゝに、すなはち、別にたづね求めることをしないで、あるものでまにあはせておくといふほどの意である。これは往生要素の卷四に、『麁服といへども、肌をかくし、寒さをふせぐに足れり』とあるのを思ひ寄せて書いたのであらう。【野べのつばな、峯の木の實】といふのは、前にあつた、『あるはつばなをぬき、いはなしをとる』（一三〇頁）といふのに應じてゐるのである。

文評　こゝには更に、『衣食のたぐひ』にはひつて、その簡素の心やすきをいたのである。

一體、遁世者の簡素の生活にまかせるといふのは、すべて形の上の問題にはなれて、內容の上の充實を期しようといふのである。で、さう一旦發心して、形のくだらない問題から離れた以上、もうそれを氣にしたり、それをいひ說いたりする必要はないわけである。それがこの作者には、どうしてもさういかないのである。實際に簡素な生活にまかせてゐながら、しかもなほ形に囚れて、いろいろとその上をいうてゐる。だからともすると、それがよまひごとに聞えてしまふ。この段なども、まさにそれである。これはたびたびいうた通り、この作者の遁世が、そでない遁世であつた爲ではあるが、一つには、いたく形を氣にする作者の性格からの爲でもあつたらう。『姿を恥づる悔もなし』の一句は、その點からいうて、不用意の間に、いかにもよく作者のその性格を見せてゐるのだ。

作者もさすがに、氣がさすと見えて、『すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにはあらず』とことわつてゐるが、それがよけいくどく聞えるのである。但し、文章の調子は、例によつていゝ、『僅に命をつなぐばかりなり』、『昔と今とをたくらぶるばかりなり』と相對して出してゐるところなど、特にいゝ調子である。

◎命　天命をいうたのである。◎まだしい

おほかた世を遁れ、身を捨てしより、恨もなく、恐もなし。命

まだしに同じで、まだ至らないにいふのである。◎一期　一生涯の意。◎うたゝね　かりねである。◎折々　春夏秋冬のその折々をいうたのである。

は天運にまかせて、惜まず、いとはず、身をば浮雲になずらへて、たのまず、まだしとせず。一期の樂はうたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望は折々の美景にのこれり。」

注釋【おほかた】は、前に一四四頁にといたのと同じ用法である。【命は】の命は、天命といふあの命である。周易の係辭に、『樂レ天知レ命、故不レ憂』とあるのがそれである。天命の解釋については、漢文では、いろいろやかましくいふが、命は令で（朱熹の解）、天の命ずるところといふ意からのことばである。そして天道、天理などいふ意に用ゐられ、またそれに人生の禍福吉凶を含ませてゐるのである。こゝもその禍福吉凶をこめていうたのだ。【身をば浮雲になずらへて】といふのは、維摩經の十喩に、『是身如二浮雲一、須臾變滅』とあり、千載集に、公任卿の歌の『定めなき身は浮雲によそへつゝ、はてはそれにてなりはてぬべき』とあるなどから、思ひよせていうたのであらう。浮雲は、ういてたゞようてゐる雲である。なずらふは、前にあつた通り、比する意である。【まだしとせず】といふのは、たのみにならぬとしないといふ意にといてゐる註書もあるが、さうではあるまい。たとひ自分の思ふやうにならぬことがあつても、それを未だしとくやまないで、そのまゝに滿足するといふのであらうと思はれる。【一期】は佛教語で、一生死間、すなはち生涯をさしていふことばである。但し、時に、死期の意に用ゐられることもある。こゝは本義の生涯の意である。【うたゝねの枕の上にきはまり】といふのは、何の慾もなく何の望もないのをいうたので、いゝ心ちでうたゝねの興にまかせてゐる瞬間に、自分の樂は極る、これが無上の樂であるといふのである。これを諸註書に、人生は夢の如しといふ意にといてゐるのは、あまり考へ過ぎたとき方である。【生涯】は、莊子の養生主篇に、『吾生有レ涯、而知也無レ涯』とあるのから出たことばである。

文評　作者はこゝに、閑居の説のその結論に入らうといふのである。

前數段の、とかくに談理に過ぎて、ともすると、讀者の感興をそがうとしたのとちがつて、こゝに至つて、作者の筆は、その感興にのつて、實にいゝ調子に流れ出てゐる。從つてその感想の充實に伴ふ、その文章の調子が極めて強い生趣を持